

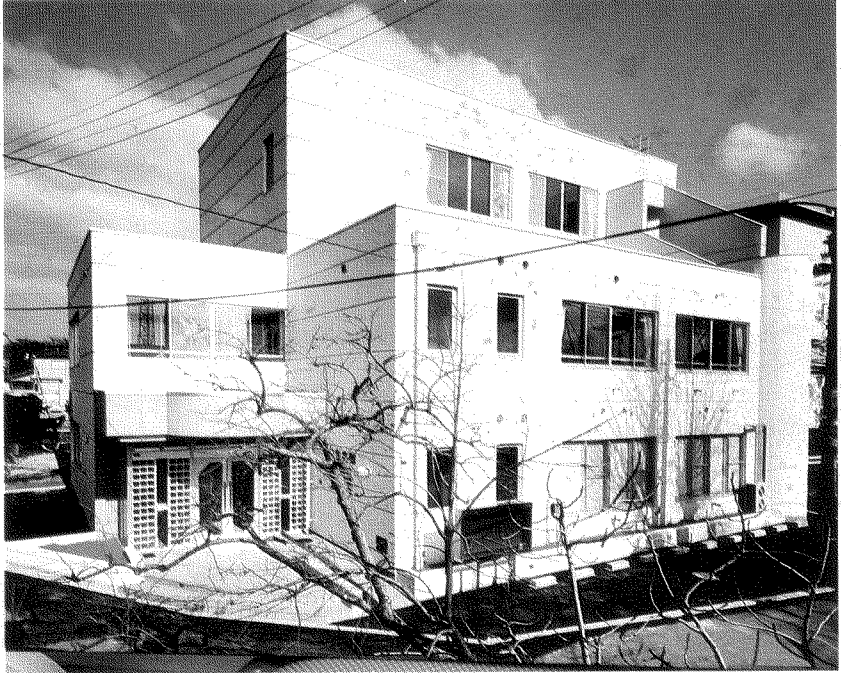
弥生公民館新館 10周年記念

弥生  
の  
明日  
の  
ために

金沢市弥生公民館







弥生公民館新館



弥生小学校・泉中学校周辺（北國新聞社提供）

## はじめに



弥生公民館長 松下 良

弥生地区は藩政時代以来、旧北陸街道と鶴来街道にまたがり、街道筋では加賀平野と金沢の接点として栄えてきました。

明治四十一年に現在の弥生一丁目に金沢測候所が移転、大正三年に隣接されて石川師範学校（現泉中学校）が広坂から移転、金沢市勢南進の起点として、学問・文化の薫り高い閑静な住宅地として発展してきました。

旧北陸街道と鶴来街道沿いを中心に百姓衆をはじめ様々の職業をもった住宅街が形成され、こ

の地の人々によって培われ、受け継がれてきた民俗伝承文化も数多く残されております。それが時代の中に押し流され、埋没し、廃れて行くのが必至の現状となっております。私たちは、その地域の伝承文化や将来の街像も含めて、その発達過程を後世に伝え、記し残すことが大切な責務と心得ております。

このたび、昭和六十一年に公民館が新館竣工され、ことしで十周年を迎えました。これを記念し、弥生校下の歴史と伝承芸能、文化などを館報やよい連載の「弥生の歴史」「わがまち紹介」などを中心に小冊子にまとめ発刊いたしました。

「故きを温ねて新しきを知る」と申しますが、「弥生の明日のために」輝かしい未来像を画くうえにも、この小冊子が何らかの参考になれば幸いと思えます。

平成七年三月

「弥生の明日のために」 刊行に寄せて



金沢市教育長 石原 多賀子

弥生公民館の新築十周年、誠におめでとございます。心からお祝い申し上げます。

併せて、昭和二十七年の公民館設置以来、生涯学習活動の推進、また、コミュニティ活動に力を尽くして参られました地域の皆様に対し、深く敬意を表する次第であります。

さて、現代社会は、「高齢化」「国際化」「高度技術・情報化」等、急激に変化しております。その渦中にあつて、歴史や文化を後世に伝えていくことは非常に重要なことではないでしょうか。そういったなか、新築十周年記念事業として「弥生の明日のために」を刊行されますことは、

誠に意義深いものと存じます。

この記念誌には、学問のまちとして、また、文化の薫り高いまちとしての弥生地区の、躍動感あふれる素晴らしい足跡が記されております。

このように素晴らしい歴史を踏まえ、公民館が一層活発に活動され、「弥生」の名のように学習の花咲き誇る地区となることを祈念いたしまして刊行のお祝いいたします。

平成七年三月



金沢市弥生公民館新館10周年記念

弥生の明日のために 目次

グラビア

はじめに

弥生公民館長

松下

良

お祝い

金沢市教育長

石原

多賀子

弥生のうつりかわり この60年

一、町会界限あれこれ 17

1、つるぎ街道と長坂用水・泉が丘町

／わがまち紹介（泉が丘致学会）

2、昔は御鷹狩場、今は閑静な住宅地・泉野町三丁目 21

／わがまち紹介（泉野町三丁目町会）

3、六動林・六道林そして六斗林・弥生1丁目 24

／わがまち紹介（六斗林一丁目親誠会）

4、金沢市住宅街南進の先駆け・弥生町 28

／わがまち紹介（弥生第一町会・弥生上丁町会）

5、南端国道開通で一時数戸に・芦中町 30

／わがまち紹介（芦中町町会）

6、八百年の歴史「野八ヶ」の親村・泉町 32

／わがまち紹介（泉町交友会）

7、義仲陣屋・泉館、調練場まで歴史の里・泉新町 37

／わがまち紹介（泉新町第一、同第二、有松町会）

8、京・伊勢・大乘寺へ上り官道の玄関口・有松町 44

## 二、地蔵めぐり

1、雀谷川から安置した有松地蔵 47

2、大小四十余体のニンニザンマイ泉墓地地蔵 47

3、毎月御詠歌同心講をもつ念西寺地蔵 48

4、安産、道中安全の養清寺地蔵 49

5、諸願成就の六斗林地蔵 50

6、天徳院二世が開いた龍徳寺地蔵 51

7、雨宝院に移した千日塚地藏 52

8、地藏尊御詠歌 54

### 三、獅子舞

1、棒術台覧の栄に浴した泉の獅子舞 59

2、二百年の伝統を守る泉町寛政獅子 62

3、七尾の名工作、地黄煎町獅子 64

4、雌雄一对の六斗林一、二丁目獅子 65

### 四、気象台のこと

弥生校下生みの親、金沢測候所 68

金沢地方気象台について(年表) 70

さよなら! 気象台 71

「郷土読本」から 気象台 73

### 五、民話

1、ドンド川民話三編 78

- 2、念西寺民話四編 80
- 3、狐に化かされた話 82
- 4、火の玉の話 83
- 5、師範学校の七不思議 85

## 六、人物

- 1、門弟二千人の塾を開いた木村民衛氏 86
- 2、第一回文化勲章受章の天文学者、木村栄氏 88
- 3、女流俳人千代尼 90
- 4、棒術半兵衛さ流を創始した町田半兵衛 93
- 5、宛身流躰術を確立した中房正行 94
- 6、孝子二題（泉町の仁太郎／六斗林の小助） 95
- 7、死んで名を残した佐々主殿 96

## 七、神社寺院

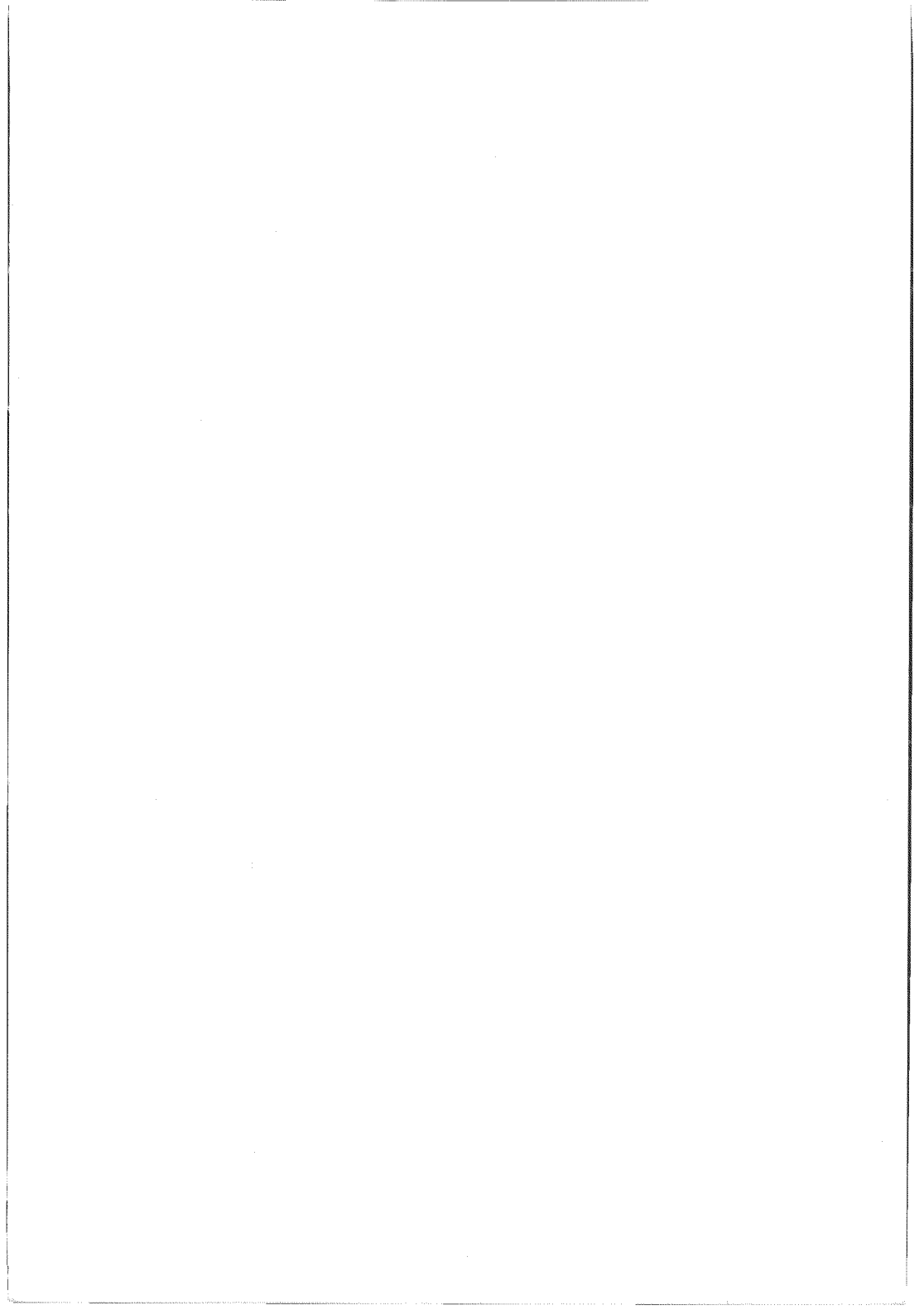
- 1、国道神社・虚空蔵社 98
- 2、泉八幡神社 104

3、地黄八幡神社	106
4、泉野桜木神社	107
5、念西寺	108
6、安楽寺	109
7、本浄寺	110
8、林幽寺	111
9、養清寺	112
10、如来庵	113

八、公民館行事アルバム

あとがき

題字	松下良
表紙絵	埜谷次郎（サロン・ド・パリ会員）
装丁	堀デザイン研究所



## 弥生のうつりかわり この60年

今年（昭和六十一年）は、天皇ご在位六十年と、また富樫地区・三馬地区金沢市編入五十年を迎えました。その記念に、紙上座談会の一部をご紹介します。弥生地区のうつりかわりといえます。

宝島外喜雄 弥生校下は、昔は野田山つづきの小松原でした。前田の殿様時代に、藩の調練場（泉一、二、三丁目、泉昭和町の全域）となりました。明治以後は、地黄煎の畑はキユウリが有名で、調練場は見渡すかぎり落畑でした。

辻世普喜知 私の子ども時代は、安楽寺さん裏のお天神さん（菅原神社）でよく遊びました。今は国造神社に合祀されました。

角村鈴枝 三馬小学校は念西寺の後ろにありました。私は大正五年に入學しましたが、富樫の子どももいました。七十五歳以上の方の母校です。二学期

には、新しくできた三馬の校舎に移りました。

宝島 公設運動場（旧称）は、ご成婚の翌年、すなわち大正十四年にできました。ご成婚記念事業で、校下へ新しい息吹を吹き込んでくれました。当時は全国にも誇る規模で、昭和二十二年には第二回国体が開かれました。その後、周りにいくつもの町が次々と誕生しました。

角村 南端国道が出来上がったのは、昭和七年です。落畑のど真ん中を、コンクリートの厚さ四十七センチの広い道が突っ走るのに驚きました。校下の雰囲気を一変させました。

宝島 万一のとき、軍用飛行場になるのでは、とのウワサもありました。

辻 道の両側は、宅地用として六十坪と五十五坪に区画されました。

宝島 そして金沢市編入と同時にドッと家が建ち並び、泉旭町や泉昭和町が誕生し、校下は一変しました。入居の草分けは、泉新町バス停に隣接する林誠一さんのお父さんと、江川為信さん（元代議士、現江川昇市長のお兄さん）でした。

辻 千日塚は、弥生二丁目の井口造園倉庫裏の  
小高い丘(古墳)でした。一株から生えた高さ三十  
メートルほどの見事な五本松がそびえ、枝下はもち  
ろん、金石沖の船からも遙か見えたそうです。だか  
ら「千日塚の五本松」は、金石沖航行の船の目印に  
なっていました。松の根元は、狐が巢穴を掘ったた  
め、まるで兼六園の根上り松のようでした。そして  
小屋に二人の行者がいました。昭和三十年頃、風害  
のため松は切り倒され、塚は跡形もなくなりました。  
その後、この地で護摩法要が行われました。

宝島 真言宗の僧雄勢が伊勢神宮千日の行で靈示  
を受け、金沢犀川大橋詰に千日山雨宝院を再建しま  
した。千日塚は、伊勢への遙拜所とも伝えられてい  
ます。雄勢は、慶安二年(一六四九)三月二十一日お  
彼岸の中日に、塚で自ら入定されました。九十六  
歳でした。塚には供養のため、お地藏さんやお不動  
さんなどが十数体奉納されていました。現在は、そ  
れらが雨宝院に安置されています。

辻 私は、

ドンド(雀谷)

橋の川下で大根

などを洗ってい

るとき、狐をよ

く見かけました。

角村 泉の豆

腐屋さんが、ド

ンド橋の近くで

油揚げが全部売

れたので、喜ん

で家へ帰ってお金を調べたら、全部柿の葉に変わっ

ていました。

辻 塚には、狐の好きな油揚げが、いつも供え

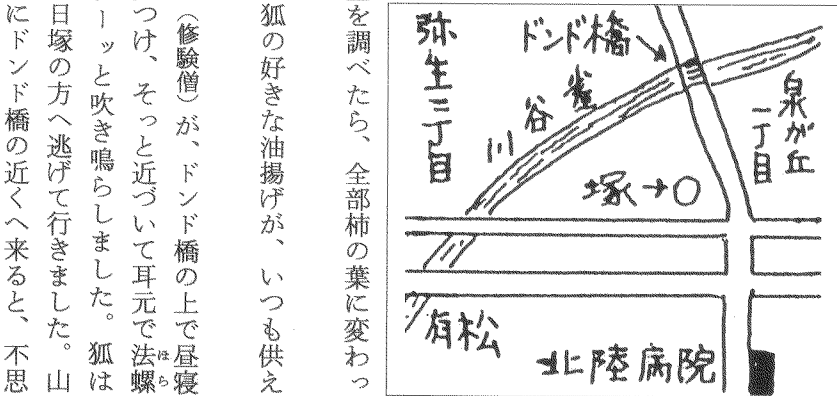
られていました。

角村 山伏さん(修験僧)が、ドンド橋の上で昼寝

をしている狐を見つけ、そっと近づいて耳元で法螺

貝を力いっぱいブーッと吹き鳴らしました。狐は

びっくりして、千日塚の方へ逃げて行きました。山



伏さんが、帰り道にドンド橋の近くへ来ると、不思



議や辺りがにわかになつて暗闇になりました。ふと見ると、近くの一軒家に灯火がつかまりました。「今夜一晩だけ、泊めてください」と頼みました。「実は今、じいさんが死なれたので困っています」と、ばあさんは断りました。「それでは、お経を読んであげましょう」と山伏さんがお経を読み始めますと、その法力のせいか、死んだはずのじいさんの手がビクッと動きました。山伏さんは、びっくりして一尺(約三十センチ)ほど飛び下がって、お経を読みつづけました。ビクッ、今度は足が動きました。山伏さんは二尺ほど飛び下がって、またお経を読みつづけました。ビクッ、ビクッ、三度目は手と足が同時に動きました。山伏さんは、三尺ほど飛び下がると、後ろのドンド川へ仰向けにドブーンと落ちてしまいました。川水の冷たさに、山伏さんはハッと正気に戻りました。辺りは明るくなり、一軒家は消えてなくなりました。山伏さんは「狐の仕返しだったなあ」と悟りました。

この話は、何人からもお聞きしました。(註)・雨宝院は、文豪室生犀星の養家として知られ

ています。

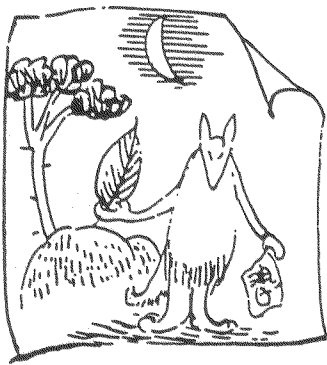
・ドンド橋は、割丸二本を並べただけの橋でした。

(館報昭和62年3月号)

### 〔千日塚のこと〕

文禄四年(一五九五)八月、雨宝院開祖雄勢上人が当加賀に來られて道場を再建され、修法三昧にひたっておられたのである。当時は豊臣末期であり、徳川時代に入る世相の変転激しく、みにくい戦いをいたく嘆かれたのである。慶安二年(一六四九)、九十六歳で泉野の原で眠るがごとくに入定されたのである。その入定された所を、千日塚と人呼んで古蹟上、有名である。

私も少年時代には、千日塚には大きな松が一株から三本も出て、小





高い丘陵にあり、周囲は草の茂った所であった。下の畑地から廻って上がった所にあり、松の株の下は洞穴になっていて人が容易に入れるくらい大きく広いものであった。この松の木に登ると、非常に見晴らしがよく日本海がよく見え、金石港に軍艦が入港するとここへ登って見たものである。

この洞穴には狐が棲んでいるのを、よく農家の人が見たということである。話によれば、その狐によく人間がだまされ、夜など食物を持って通ると、だまし取られたそうである。また面白いことに、豆腐屋が夕方そこを通って、狐が油揚げを買いに来て、金の代わりに木の葉をもらって油揚げと交換していたという昔話もある。

その当時、洞穴の近くに小さな御堂があり、堂守というか女の人がいたものである。しかし、第二次世界大戦後、農地改革により跡形もなくなり、松の大木も枯れていたように、どうなったか分

らなくなった。雨宝院の現任職の話によれば、一坪ほどの所に石碑があるだけだということ、雨宝院へ移すそうである。  
(宝島外喜雄記)

### 弥生校下 略年表

崇神天皇		景行天皇		西暦	
年号	年	年号	年	年号	年
10	27	40	2	一一八三	寿永
四道將軍大彥命、北国の賊を誅つ	日本武命、東北のえぞを討ち、北国に帰る	摘	木曾義仲、安楽寺後方に布陣	一一八五	文治
			富樫四郎高家、泉地頭となり泉館を築く	一四八八	長享
			一向一揆富樫滅亡、州崎慶寛泉館跡に道場を開く	一五八〇	天正
			尾山御坊滅ぶ	一五八三	"
			4月27日(太陽暦6・14) 利家入城	一六〇三	慶長
			泉野新町(泉町)町建利長判書	一六五二	承應
			泉館に作食蔵建つ	一六五八	万治
			泉野開拓。泉野新(地黄煎)六斗林の村建	一六六四	寛文
			上川除町より水害者57戸移転、芦中町となる		

西暦	年号	年	摘	要
一六七一	寛文	11	長坂用水完成	
一七三七	享保	12	有松、泉新、町家建許可される	
一八二二	文政	4	有松、泉新町、金沢町奉行支配となる	
一八五三	嘉永	6	泉館跡に調練場を設ける	
一九〇八	明治	41	金沢測候所開設	
一九一四	大正	3	石川師範学校開校、翌年附属小学校開校	
一九二五	"	14	金沢市公設運動場完成（弥生三丁目）	
"	"	"	泉野町三丁目、金沢市編入	
一九三二	昭和	7	南端国道開通。両側区画整理、分譲。	
"	"	"	泉昭和町、泉旭町誕生	
一九四七	"	22	第2回国体開催	
一九四八	昭和	23	石川師範・同附属小学校が転出	
一九五〇	"	25	11・1 弥生小学校開校、泉中学校開設、弥生校下成立	

西暦	年号	年	摘	要
一九五八	"	33	泉中学校から出火、弥生小学校焼失	
一九六九	"	44	航空自衛隊ジェット機が泉新町に墜落	
一九八六	"	61	弥生公民館新館竣工	
一九九一	平成	3	金沢地方気象台が駅西へ移転	
一九九五	"	7	金沢市泉野図書館が開館（泉野町四丁目）	

# 弥生校下区域図



## 一、町会界限あれこれ

### 1、つるぎ街道と長坂用水・泉が丘町

#### 泉野開墾と長坂用水

宝島 昔は、寺町台地や泉野、野町、弥生の各校下は「泉野」と呼ばれ、野田山つづぎの松原だったそうです。寛永十一年（一六三四）に押野村の十村役



元佐伯病院前にある標柱

後藤太兵衛さんが、藩の許可を得て泉野開墾のために、長坂用水を造りました。

能登長朔 用水は、内川の「割れ岩」（現在はもつと上流）から導き、野田山を廻ってから何本にも分流し、その中の一本は寺町寺院群の消火水路になり、そのほかは泉野の農業用水になり、再び集まったのが雀谷川です。用水の全長は十二キロメートルです。

宝島 加賀藩三代藩主の利常公は、後に開作法（農業振興）を定められた方ですが、笠舞や野田などから農民を長坂新に移住させて、農具、家財、食米を与えてからまず松を切らせ、田畑に開かせ、税金も免除しました。その後、各地から農民が移住して開墾し、出村や六斗林、泉野新田（地黄煎村）など、次々に新しい村ができました。

松下七雄 六斗林の町端の泉野新田に移住した百姓の中で、地黄（血圧を下げる薬草）を栽培し、その煎じた汁を飴と練り合わせた地黄煎飴が大変評判よく、文政四年（一八二二）に地黄煎町と改めたそうです。

#### 幕府上使の官道つるぎの道

宝島 つるぎの道は、利常公の命で造られました。

江戸幕府からの巡検使や、西まわりで江戸参勤のときは、この道を通りました。

平木静 「金沢で一番位の高い道やぞ」と、親から聞いたことがあります。

山河栄佐男 鶴来方面から毎日三、四十台の荷車が木炭などを運び、いろいろの品物を仕入れて帰って行きました。お昼頃になると、町内の煮売り屋の前にたくさんの荷車が並んでいたのを覚えています。大正年代には、鶴来までガタ馬車が一日三往復していました。

#### 天保の大飢饉と地黄八幡神社

宝島 もと犀川川上の山伏宝光寺の持ち宮で小さな祠だったのが、初めは八幡社と呼んでいましたが、明治十九年に地黄八幡社と改めました。ご祭神は応神天皇です。かつて、参道の杉の切り株の年輪を、弥生小学校の子どもたちと数えたことがあります。三百以上ありました。

山河 天保の頃（一八三〇〜四三）、天候不順で、大飢饉の年が続いたそうです。地黄煎は、長坂用水の下流のため水が流れてきません。そこで、とうと

う村人は地黄煎の田畑を売って泉村に集団移住し、お宮のご神体も泉八幡神社に併祀してもらいました。このいわれから、昔は「もらい祭り」がありました。その後、また各地から農民が集まって現在の地黄煎町となり、お宮も再建されました。

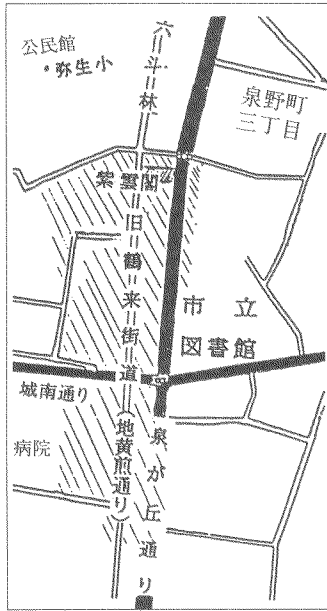
松下 新道鶴来線にバスも通り、近代建築が次々と建ちました。お宮も整備され、ひと昔前の竹藪に包まれた地黄煎町の風情は一変しました。今後、ますます発展するよう期待しています。

（館報昭和62年7月号）

わがまち紹介／泉が丘致芳会

泉が丘町会は、昭和四十二年まで地黄煎町と呼称し、金沢市行政の町名変更により泉が丘となった町です。明治の廃藩置県の頃は全戸数五十余り、その八割強が農業を営み、商家は数軒で、竹籠細工、桶屋、雑貨駄菓子屋、居酒屋等が点在していました。

地黄煎町は江戸時代の昔より蛤坂を起点とし、鶴来町までの四里、十六キロの行程の鶴来街道の出口に位置し、尾山（金沢）への商人の出入りや、時節とも



なると近在の年寄り達が、お寺参りに連れだつて通りました。四十万行きのボンネットのフリーパスの通っていたこともある懐かしい思い出のある町です。また江戸時代、前田の殿様が高尾あたりまで鷹狩りにお成りの時は、町内の旧家を休憩所とされ、茶室、米蔵、味噌蔵まで備えられたと聞いております。泉が丘一、二丁目は全長七百メートルの南北に長い町で、元和年中(一六一五〜二三)の頃、泉野地黄煎と呼ばれていますが、これは泉野地区全体の呼称であり、地黄煎村となったのは天保十三年(一八四二)であり、地黄煎町となったのは明治十二年です。当時の畑作物の中に薬草の地黄を栽培し、これを煎じ

煮詰めて飴状とし地黄煎飴として販売していたのが、町名の由来と言われております。

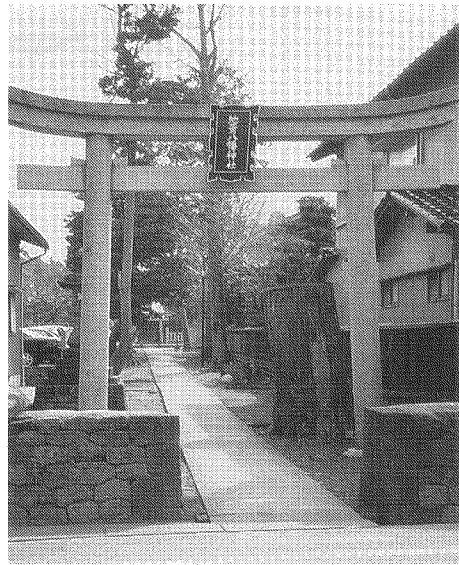
特記すべき事項としては、江戸末期から明治初期にかけて町の中程に有名な町田半兵衛氏の道場があり、近在の軍人、町人、農民ら千人余りの人々に剣術を教えていました。半兵衛翁が明治十七年に神社に奉納された小太刀、木棒の扁額のうち、小太刀は盗難に遭い行方不明ですが、扁額は現在も神社拝殿に掛かっています。道場跡は、残念ながら終戦間もなく類焼により取り壊されて、今はその面影すら残っておりません。

明治八年、地黄煎村致芳小学校が開校され(寺子屋式)、近在の子女二、三十人が集まって勉学に励んでいた時代もあり、場所は現在の致芳会館の所です。また、町の重大事故として忘れることのできないのは、大正九年八月四日、町内の青壮年二十余人が白山登山を実施し、三人が凍死するという痛ましい犠牲者を出したことです。今では知る人も数少なくなりましたが、八月一日早朝、一行は草鞋ばきで徒歩白山へ向け出発し、途中市の瀬で数人の強力を雇

い登山を決行したようです。ところが天候が急変し、強風雪が下から吹き上がり、蓑笠は何の役にも立たず、さすがの強力も泣いたと聞いており、生還者二十人と記録に残っております。当時の新聞雑誌などで大事故のニュースとして取り上げられ、永井柳太郎代議士直筆の見舞状もいただいています。

現在、泉が丘町会は百戸余り。うち江戸末期または明治初期に建築された旧家が四、五軒残っており、一部改装されているものの外観はまことに豪壮な構えの建物であり、当時の面影を彷彿させるものです。

泉が丘町会の年中行事としては、①町総会、一月初旬。②班長会議、必要に応じて開く。役職員三十人（世帯数百五十戸、四百五十人）。③町会総報恩講、十二月六日。一年間の町会員物故者の供養を併せ行う。④校下各種団体の行事ほか、町民の親睦を深める活動を心掛け、これを実施する。⑤地黄八幡神社の維持管理、氏子総代八人がこれに当たる。昔から奥深いことで知られる地黄八幡神社も、昭和二十六年にすぐ前を県道が開通して二分されましたが、氏子らの寄進による鳥居、玉垣もできてお宮らしさが



杉の巨木切り株が残る地黄八幡神社

加わりました。一の鳥居は大正十四年建立、二の鳥居および玉垣は昭和二十六年建立されました。昭和三十六年の台風により杉、梅の大木数本が倒れ、本殿が倒壊。昭和三十八年十月、鉄筋コンクリートの本殿が新築されております。

追記 平成三年度より余りにも膨張し続ける泉が丘町会の分割機運が高まり、三年がかりで旧町を五地区に分割し、平成五年度より現在の泉が丘致芳会として発展的運営を行っております。



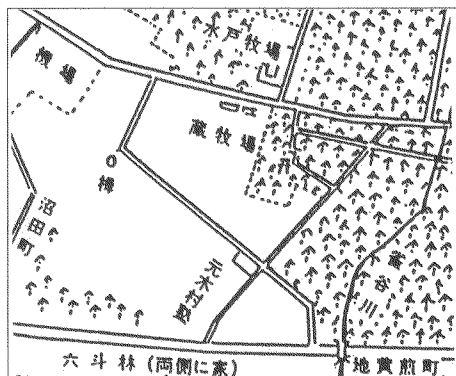
(泉が丘致芳会 相川久雄記)

(館報平成6年12月号)

## 2、昔は御鷹狩場、

今は閑静な住宅地・泉野町三丁目

新保望 泉野台地は、加賀三代藩主利常公の初期(慶長)、泉野桜木神社辺りを中心にした御鷹狩場でした。私宅には、殿様が休憩されたいわれで拜領し



金沢市編入(大正14年)当時の略図

たと伝えられる茶釜があります。元和の頃(二六一五、二三)から泉野開拓がはじまり、狩場は、だんだん山手へ移っていきました。

## 村建の恩人三輪法受

この頃、藩は桐、柿、栗、杉、桜などを十五か所に植えて御用林とし、その管理と泉野台地開拓のため、五か所に屋敷地を与えて百姓集落を造りました。ほぼ五十年後の承応四年(二六五五)に、その五か所を泉野村領と改めました。御算用場奉行三輪法受は、いろいろ開拓の指示を出し成功させました。

十村役の後藤太兵衛は泉野村と改まった次の年、藩の直営事業として御鷹狩場約四万坪(十三万二千平方メートル)を開拓して、泉野新(地黄煎村)百姓として三十軒の集落を造りました。また、泉野出村の村建、長坂新の開拓や長坂用水工事などの御用を務めました。その子の太郎衛門も十一屋村の村建や、延宝から元禄の二十余年間、諸開拓に努めました。この頃でも狼狩りや、トキの羽を拾ったら届け出るよう、御算用場から指示しています。

## 殿様もご賞味した篠木家の竹の子料理

泉野台地の孟宗竹は、足輕岡本右太夫が明和三年(一七六〇)に江戸から移植し、各地に広がりました。篠木家(ささき・泉野桜木神社隣)は、岡本家(旧

桜木十の小路」と親交があったので、株をもらい繁殖につとめ、特産品として名を高めました。この辺りは、市町村制公布により明治二十二年、石川郡野村字泉野と改まりました。そして金沢市編入は、大正十四年四月一日です。

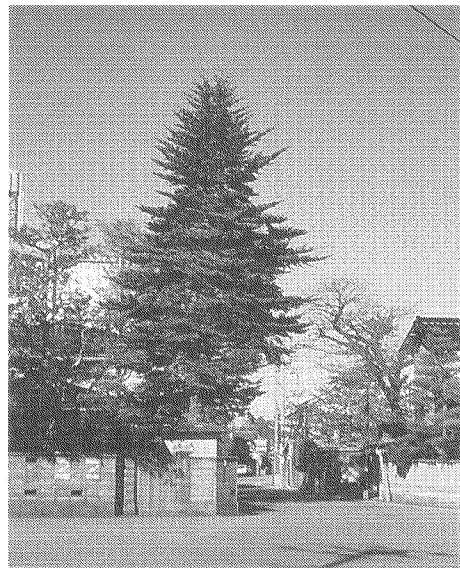
十握三郎 私は昭和十三年に泉野桜木神社宮司として着任しました。五十年前です。その頃は、泉野町三丁目地区をとり囲むように、どちらを見ても竹藪が奥深く茂っていました。お宮の近くには、宇田さんや数軒の家だけでした。

十握夫人 お宮の周りも竹藪でした。とくにお宮の前の道は昼でも薄暗く、冬は雪の重みで樹木が折れ曲がって道を塞ぎ、大変でした。雀谷川に精米用の水車がありました。

十握 お宮の右隣に蔵牧場があり、子供たちがよく遊びに来ていました。牧場は、昭和二十二年に無くなりました。

#### 泉野町三丁目創立の記念樹

十握 昭和九年に土地区画整理が完了し、間もなく県図書館長の中田さんが、洋館を建て梅の木を植



小松さん宅の梅の大木

えて入居されました。いわば泉野町三丁目の創立記念樹とも言うべきその梅は、今では二十メートル近くの大木になりました。小松芳光さん宅の場所です。とにかく終戦後、急に家が建ちはじめて、現在の恵まれた環境の閑静な住宅地になりました。

(館報昭和63年1月号)

わがまち紹介／泉野町三丁目町会

泉野地区は、藩政期に農地として開墾され、発展してきた町です。

昭和の初期に住宅地としての区画整理がなされたものですが、昭和も二十年代までは、牛舎、鶏舎に芋畑、菜の花畑、竹林が広がる地帯でした。同三十年頃には、県道金沢―鶴来線が旧道より移設、拡幅整備され、高度経済成長とともに住宅が増えはじめ、平成三年二月には金沢市の地区計画区域に決定、良



好な住環境の維持保全と緑豊かで潤いのある街づくりが形成されるようになりました。



今も緑濃い泉野桜木神社

文化勲章受章者、地球緯度変化の観測においてZ項を発見した世界的天文学者であります木村栄博ひらし博士の生誕の地であり、その碑のある町です。

氏神は泉野桜木神社です。その由来をみてみますと、主祭神は応神天皇、相殿神は天照大神です。明治五年、これまで泉野社と呼ばれていたのを桜木八幡社と改め、明治十五年に現在の泉野桜木神社と改称しました。明治三十九年に泉野村にあった法受社が合祀されました。法受社は神明とも言われ、天照大神を祭神として養老三年（七一九）の建立と言われています。

社殿境内敷地面積は千二百三十坪あり、昭和九年に境内整備と玉垣が造成されました。社務所、手水舎も改築され、当町会活動の中心地となっております。

弥生小学校が設立されるまでは、十一屋校下でありました。現在泉野町の大半が泉野校下である中にあって、泉野町三丁目、ただ一つ弥生校下となっております。

町会構成は、泉野町三丁目、泉野町四丁目の一部、

弥生一丁目の一部となっております。弥生校下では、最大の世帯数で三百二十戸。このため町会を三部制とし、役員は各委員を含め七十七人で運営に当たっています。町内一斉美化清掃はじめ、花と肥料等を希望者に配り美しい街づくり、社会体育大会、新年会、その他各部会行事に活躍しています。

長寿会／六十歳以上の居住者が参加、町会独自の行事を計画し親睦融和に努める。

婦人会／町会独自の行事を計画し、親睦融和に努める。

子供会／町会独自の子供会行事を計画し、健全育成に努める。  
(泉野町三丁目町会 茂村恵記)

(館報平成6年7月号)

### 3、六動林・六道林

そして六斗林・弥生一丁目

源平の頃からの古い歴史

『源平盛衰記』には、「国司林氏の武将、六動太郎光景は、加賀国住六動林の出身」と書いてあります。

この辺りは、前田利常公の元和年中（一六一五〜二三）からの泉野開拓で、百姓が次第に増えていきました。

寛文八年（一六八八）に、つるぎ街道ができました。その頃、金沢防備のために多くの寺院を六斗広見から雀橋間にも移し、また商人に替地を与えて移住させ（上地町）、一般の家も増えて町（門前町）が形成され、六斗林になりました。

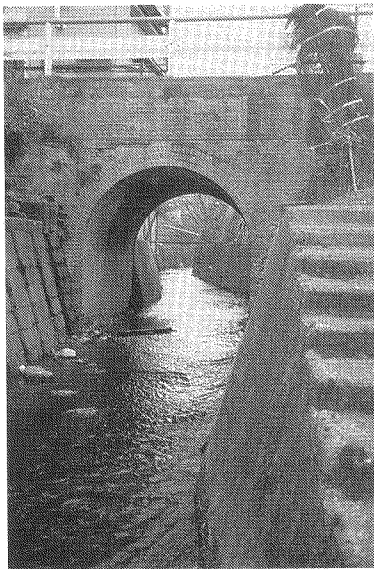
町名の変遷を振り返ってみますと、つぎのようです。

・六斗林（約八百年前）／六動光景の屋敷の辺りは、生い茂った林だったので、六動林と称しました。  
・六道林（約四百年前）／佐久間盛政が一向一揆を攻め亡ぼした時の記録にあります。

・六斗林（約二百八十年前）／元禄時代以後の公文書は「六斗林」ですが、六道林と記入した絵図も残っています。

明治四年、戸籍令で「六斗林一、二、三丁目」と決定しました。

大正時代は「銀座通り」



地黄煎町の雀橋



大正13年版金沢市地図・写  
(1月1日 弥生町誕生)

地野一清 父（利雄）の話ですが、鶴来方面からは炭や薪、野菜など金沢市民の生活必需品を運ぶ荷車が列を作ってやって来て、帰りには各自がまたそれぞれ必需品を買っていききましたから、商売は大繁盛だったそうです。鶴来までは、大正時代は乗合馬車が、昭和初期頃にはバスに変わったそうです。

地黄煎町と境の雀橋は、九十年前前に架けられたそうですが、今でも重量トラックが通っています。煉瓦造りのこんな珍しい立派な橋が架けられたのは、当時、このつるぎ街道がいかに重要だったかを物語っています。

（館報昭和63年3月号）

わがまち紹介／六斗林一丁目親誠会

明治五年の戸籍令で六斗林一、二、三丁目となりましたが、当時のこの通りを屋号で記した絵巻によると、一丁目は六十七世帯、二丁目は百二十三世帯とあります。

旧地黄煎町との境を流れる雀谷川（どんどがわ）は、昔から付近民とは関係の深い川でした。もっこり（湧き水）が出て、とてもきれいでした。菜園農家



の大根や芋などの洗い場として、また主婦たちの洗濯場に、そして子どもたちの遊び場でもありました。戦時中、その崖に防空壕が掘られ、町民の避難場所として役立ちました。昭和三十八年の豪雪には、深い雀谷川が雪捨て場となり、雀橋の欄干まで雪に埋まりました。

市街地には珍しく竹藪、樹林が群生し、雀、ヒワ、トンビなどが巢作りし、夏には蛍が飛び交い、ドジョウ、ナマズも捕れるなど自然豊かな環境でした。しかし、昭和三十二年に護岸工事が行われ、いまは昔の面影がちよっぴり残るだけとなりました。

当町は地盤が固いため、各家では大抵二つ、三つの芋穴を持っていました。近くの農家がそれらを借りて秋の収穫時、掘りたての甘薯や生姜などを貯蔵したので、夕方になると通りは混雑したものです。また、昔から「六斗の火事には、芋穴に落ちないよう気をつけるよう」と、面白いことが言われてきました。

町内の林幽寺さんは、六斗通りのたくさんあるお寺の中で、唯一の真宗大谷派寺院です。古くから春秋のお彼岸、お太子さん、報恩講などには近郊から大勢の人が参詣に訪れ、町会でも、各種行事のお世話をしていきます。

戦前は六斗林一、二丁目と同じ町会で、上は雀橋から下は今川酢店まで南北五百メートルに約三百五十世帯が並び、野町校下に属していました。行事などは青年会が主催し、皇紀二千六百年記念（昭和十五年）の獅子舞は盛大に行われましたし、二丁目の龍淵寺では納涼盆踊り、一丁目林幽寺では舞台が立ったことなども懐かしい思い出です。

昭和十六年戦雲急を告げるや、当町も臨戦体制が

とられました。雀谷川のわきに小屋を建て、市から腕力ポンプを払い下げてもらい、毎夜十時と十二時の二回、夜回りを始めました。それが戦後、一、二丁目に分かれてからもずっと続きました。平成二年末に中止するまで約五十年間、雨の日も風の日も一日も休まず続いたことは、町民の連帯意識がいかに強いかを示すものだと思います。

六斗林一、二丁目町会は、野町と弥生校下に分かれることになり、六二親和会と六斗林一丁目親誠会になりました。現在、当町は六十五世帯で、校下では小さい町会だと思いますが、長年培われてきた人情ある下町情緒豊かな町として、いっそうの親睦と団結を深めています。平成六年の校下社会体育大会には初優勝の快挙をなし遂げ、校下の人たちを驚かせました。

主な行事は、新年会（一月）、役員選挙（三月）、子供七夕祭、ラジオ体操（七月）、慰安会（十月）、もろつき大会、報恩講（十二月）などです。

時代が変わり六斗の通りは、昔日の面影はありません。かつて賑わった街道も道路網の整備により裏

道となり、生活様式の変化と相まって、静かな落ち着いた住宅街に変貌してきました。近年、市は旧鶴来街道を地域景観整備地に指定し、家並保全、修景整備に力を入れることになりました。市の中心部にも近く、何かと便利なわがまちの今後の発展を期待してやみません。(六斗林一丁目親誠会 島村正二記)

#### 4、金沢市住宅街南進の先駆け・弥生町

大正十三年元旦に弥生町が誕生

紺谷義弘 弥生町地域は、元石川郡野村字泉で、

大林区営林署の松、槻、あての苗圃地でした。大正九年に桃島市営住宅三十五戸(一の通り)が建ち、つづいて二の通り三十五戸が建ちました。そして大正十三年一月一日、金沢市弥生町に改まりました。

昭和六年頃から六斗林側に家が建ちはじめ、東部弥生町会になりました。上丁町会は、終戦後にできました。

石間作次 私の家は昭和七年に建てましたが、あたりは広い草原で、子供たちのよい遊び場でした。

近くの師範学校の学生さんも、体操や軍事教練などに来ました。六斗から大温湯の前を通って、野町に出る道は杉並木でした。

二十数年前に、向かい側の桃島町会と協力して道幅を広げ、舗装して現在のような道になりました。完成式は、新しい道路上で行い、両町民が合同で踊りました。そういうことで校下は違いますが、それを超えて桃弥会(とうやかい、十八会)を結び、今でも親睦の会を重ねています。

(館報昭和63年3月号)

わがまち紹介／弥生第一町会・弥生上丁町会

「市営住宅の先駆け」これが私たちの町の始まりです。

大正二年に石川師範学校(現在の泉中学校)が、石川郡野村字泉野桃島地内に建てられました。それに伴い同九年、学校近辺北側島地に市営住宅が造られました。当時の地籍は、泉野村ムの山林で、大正十四年に金沢市の第一次町境界変更が行われ、弥生町二十四番地となり、三十五戸の市営住宅が完成しま



した。

市営住宅の先駆けとして発展し、その後、町会組織「弥生一二三会」が結成されました。一の通り（三十戸）、二の通り（十八戸）、三の通り（三十一戸）、四の通り（三十六戸）、五の通り（三十四戸）、六の通り（十二戸）ができ、合計百六十戸の住宅街になりました。このうち六の通りは、戦後の引揚者住宅



として建設されたもので、住宅街として最後のものと言われています。

当時町会内には、共同井戸が四か所ありましたが、数年後には五の通りに井戸ポンプによる簡易水道が造られ、各住宅に給水し住民から重宝がられました。五の通りまでの住宅建設が終わって、町会組織「芳生会」が誕生しました。しかし、当時は戦中の物資統制時代で町会長の業務が多忙だったため、二つの町会に分割され「弥生第一町会」と「弥生上丁会」になりました。

昭和二十八年から市営住宅の払い下げが始まり、同五十三年に終了しました。その後、各自が住宅の改築や改装を行いました。町並は昔の集合住宅の面影がいまも残っております。開町以来今日まで、火事を出さなかったことは町会の誇りであり、現在も毎日夜回りを実行し、防火・防犯をスローガンに住みよい街づくりに努めております。現在、弥生第一町会は五十世帯、弥生上町は四十四世帯です。

（弥生上町会 山本舜一記）

## 5、南端国道開通で一時数戸に・芦中町

犀川は、寛永八年（一六三二）に死者八十数人の大洪水を見たほか、たびたび洪水がありました。寛文四年（一六六四）に藩の指図で、水害被災者五十七戸が百姓地泉野枝町に移住し、後に芦中町になりました。

二百年前の金沢城下図に「アシガル丁」と記載されていますが、その後、泉新町後町、泉後町、上・下芦中町を経て、明治五年四月から「芦中町」になりました。芦中町の語源は、

- ① 芦が生えていた所だから。
  - ② 足軽中組が住んでいたから（芦は足の当て字）。
  - ③ 足半のように尻切れの短い町だから（足半は踵の短い武士が好んだ草履）。
- などの諸説があります。

紺谷 昭和七年に南端国道敷地を取るため、六十四戸あった家が次々に移転し、気象台に近い数戸と柿の木一本だけを残す状態に変容しました。谷茂次

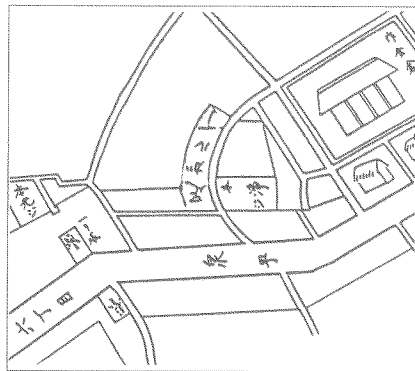
さん宅のその柿の木に、当時の面影が偲ばれます。しかし、新国道ができて両側に家が建ちはじめ、現在は九十五戸になっっています。

気象台が三年後に駅西へ

酒井守三 九十五戸の小さな町内ですが、芦中郵便局、信用金庫、派出所、バス停、横断陸橋などがあり、さらに弥生会館や小・中学校、ストア、気象台などにも囲まれ、最高の町です。

紺谷・酒井両夫婦 児童館や学校と隣り合わせの町なのだから、気象台が移転した跡地には、ぜひ児童公園がほしいものですね。

（館報昭和63年7月号）



寛政金沢城下図写(金沢市図書館所蔵)

わがまち紹介／芦中町町会

芦中町は金沢市弥生一丁目、泉一、二丁目に跨がった町で、野町通りの南側に位置し、泉新町の後ろ町で「並び短く、尻切れたる町」と言うことから足半町、または足中町と書かれていました。藩政時



代の発祥と言われ、その後、かつて地黄煎町の百姓長右衛門が、泉野村領金沢町奉行支配の町方世話役となり、文政の頃（一八一八〜二九）、後泉町と呼ばれていた辺りを、上、下の芦中として立町しました。昭和七年に南端国道（159号線）ができ、香林坊から約三キロ離れたこの地に九十戸余りが軒を連ね、活気のある町となってきました。同四十四年以来、四度の火災に遭い、跡地が駐車場となるなど町並は歯の抜けた形となりました。

明治十五年にできた金沢測候所は、後に気象台となって町民に愛されてきましたが、平成三年には駅西合同庁舎内に移転しました。しかし、その跡地は公園として生まれ変わり、新しい憩いの場となることは住民の一人として嬉しいかぎりです。桜の開花標準木がそのまま残り、これからも美しい花をつけて私たちを楽しませてくれることでしょう。

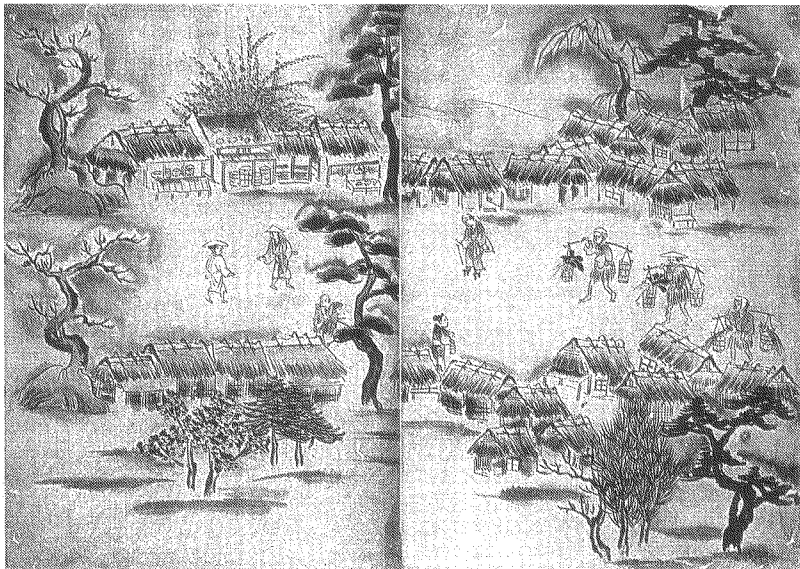
この地に生まれ、育ち、生活してきた私たちは、芦中の地名に深い愛着をもっています。火の見櫓の跡の芦中小公園と芦中郵便局は健在です。芦中の名前が、末代まで残ることを願っております。

町会の運営面では八班に編成し、三役は毎年班より一人ずつ交代で出しています。長寿会、婦人部では会員同士連携のとれた活動をしています。子供会員は、最も多かった昭和三十年代の五十数人から、現在は激減しています。それでも育成委員の指導のもと、行事活動に参加しています。社会体育大会では、三十九年から三年間連続優勝したことがあります。町会行事では、運動会、レクリエーション、新年会などがあります。ほかに今年は、ゴミの出し方三原則、カラス対策、ゴミの不法投棄防止などに取り組んでおります。また、各班の戸数のばらつきを編成替<sup>な</sup>いで均すなど住みよい町づくりを目指しています。

(芦中町会 酒井守三記)

## 6、八百年の歴史「野八ヶ」の親村・泉町

「泉」の地名は、源平合戦の頃(約八百年前)すでにありました。泉村は大村で、泉野、西泉、米泉、増泉、泉野新、泉野出、泉野十一屋を合わせ「野八ヶ(村)」の親村でした。



農業図絵・泉松門(日本農画全集・第26巻)

慶長八年(一六〇三)に、二代藩主利長公の判書で

「野町つづきを泉新町に新規取り立て」られ、翌九年に野町との境に榎の木一對を植えた一里塚（山）が設けられました。

農業図絵（農村漁村文化協会出版）に見えるように、一里塚右の松門は、城下内と郡地境を示す惣門で、泉町南境の松下孝昭さん宅に「松門址」額があります。行列は松門までは威儀を正し、旅人は服装や髪形を整えました。送り迎えの茶屋もありました。

石坂元治郎 私たちや近郷のお百姓さんは、今でも泉町を新町、有松を出町と言っています。戦前の泉町は、農村向きの商店街で、また農産物を青草市場へ出荷する中間集荷場でもありました。鍬・鎌の鍛冶屋、種子肥料屋、農機具屋、竹屋、馬蹄屋、集荷人、もちろん日用雑貨、呉服屋もありました。

坂井直勝 泉八幡神社の境内は、幹周りが最大二・七メートルくらいの銀杏林です。このようなお宮はどこにもありません。うち二本は、金沢市指定の保存樹です。氏子の方々が実を拾いに来られ喜ばれています。

（館報昭和63年7月号）

（註）・農業図絵 享保二年（一七一七）の泉町図で

す。東側に板屋根の商家（種物屋か桶屋）、右端松門横の茶屋は松下孝昭さん宅でしょう。西側（手前）の農家は、藩の定め通り間口二間、奥行き九尺です。この絵から約八十年後の寛政時代には、多額の経費を要する獅子舞用具を備え（市内二〇四の獅子頭は、ほとんど藩政末のもの）、また神社に手洗石や幅五尺の和



松下孝昭さん方の「松門址」額

歌額を奉納するなど、豊かな町に発展しています。

・「松門址」額 「町地と郡地の堺で両側に松樹があった 昭和三十四年三月金沢市」と書いてあり、市内で所在地の確定した唯一の懸額です。雨風で墨字が薄れるため、松下家のガレージ内におろしてあります。

・一里塚 二代將軍秀忠の令で、慶長九年（一六〇四）全国に設置されました。野町堺の一里塚は、旧北国街道の南町・彦三・小橋を渡って大樋町一里塚に至る三十六丁です。明治九年、太政官令で廃止されました。

・新町のこと 明治維新の風潮で、町名を簡素に俗称する風潮がありました。明治四年八月、戸籍法で戸数約五百をもって区となし、翌三年二回の区画改正により有松町、泉新町、泉町、芦中町、桃島は加賀国第七区（金沢町）一番組となりました。さらに九年の改正で石川県第十大区（金沢町）小十区に変わりましたが、泉町住民はなじみにくい番号制よりも、

新町、泉町の俗称（正しくは泉新町）を混用していたようです。現在でも、近郷の老農は「新町の石坂肥料店」などと言っています。・角場 鉄砲射撃場です。大豆田、大衆免、笠舞、石坂（上ノ組用と下ノ組用の二か所）にありました。

・足軽大組・中組 足軽は、射撃（鉄砲、弓）、警護、その他に区分されます。大組は五十人編成の鉄砲組で、大衆免一組と石坂二組の三組がありました。中組は三十人編成の鉄砲組四組、同弓組三組の計七組ありました。芦中町は鉄砲中組、六斗弓ノ町は弓中組でした。大組・中組は、ともに二十五俵（他の足軽は二十俵）を賜り、異風筒で玉目六匁、修練上達の者は十匁を撃ちました。成績によって俸祿は増減されました。

・吹屋 鋳物場です。桜橋詰めW坂の寺町台に吹屋があったので、吹屋坂と言われました。小坂町油木山や田井町にも吹屋がありました。「能登中居鋳物由来書」「村山四郎兵衛由来

書」などによりますと、鑄物は遠く神代の時代、石凝姥命に始まり、河内国円南郡狭山郷日置の庄に伝わりました。近衛天皇の仁平年間（一一五一〜五三）、勅命により鑄物技術を諸国に広めるため、日置の庄の工人たちは能登中居村や各国に赴きました。鍋は河内、釜は中居が最上佳品と称されるようになりました。宝永年間（一七〇四〜一〇）、中居鑄物師村上新左衛門は加賀藩の命により野町五丁目に移り、村山四郎兵衛と改名、後に泉村領に吹屋を移し、代々受け継ぎました。藩令により、城内早鐘、時鐘（いずれも高さ七、八尺）の巨鐘や大砲などを造りました。大正時代、吹屋の跡に百坪ほどの浅い池がありました。毎年冬になると、池面が二寸ほど凍り、子どもたちは手製の竹下駄でスケートを楽しましました。この池は、明治三十六年、国造神社改築のとき、盛土用の土が掘り運ばれた後の凹みでしょうか。

わがまち紹介／泉町交友会

泉町の本通りは、藩政時代は北陸街道で参勤交代の通り道であり、宿場、居酒屋、樽桶屋、傘細工、竹箆細工、荷車屋、畳刺し、髪結い、金物鍛造（馬蹄）、荒物屋（笠蓑）など日常生活に直結した商人が住み栄えた町です。

明治・大正・昭和の初期頃の町会となりますと、上丁、中丁、下丁の三町で運営され、神社（泉八幡神社）の総代の方々が相談し合い、青年たちが幹事役となつて交遊を深め、町のお世話をしたようです。神社のお祭り、お寺のお講がおもな行事でした。終

戦後は、東部、中部、西部に三区分され、各部で幹事（町会長格）を選出して町会運営に当たりました。

町紋の権印は、天明六年（一七八六）の「町火消しの定」により町旗に、また寛政獅子（一七八九〜一八〇一）の錦帯前にも描かれています。町並には、藩政時代の名残として、行列を見下ろさないよう屋根が低く、二階には両袖があり、窓はキモスコ、一階はヒトミ（板戸）の跡をとどめる商家が数軒遺っています。



鎮座五百有余年の泉八幡神社境内には、神木の銀杏林があり、中には金沢市指定保存樹になっているものもあります。

現在の町会は、世帯数百五十一戸、住民は五百十



泉八幡神社の神木銀杏

七人です。町会役員は、校下公民館役員を含み五十人で、町会運営に当たっています。おもな町会行事は、レクリエーション、社会体育大会、新年会、成人式など。その他は各部で独自に活躍しています。泉寿会／校下行事のほか、年度初めに総会を開き、行事を計画し親睦を深めます。

子供会／校下スポーツ大会、レクリエーション、ボランティア活動などを行います。

壮年部／校下および町会の行事には中心的に活躍します。



青年部／校下町会行事のほか、秋祭りの踊りを主催します。

婦人部／校下および町会すべての行事の裏方として活躍します。

獅子保存会／伝統ある獅子舞（半兵衛さ流）や獅子道具の保存に当たります。

（泉町交友会 泉屋隆久記）  
（館報平成6年3月号）

## 7、義仲陣屋・泉館、調練場まで

歴史の里・泉新町

### 木曾義仲の陣屋

寿永二年（一一八三年）五月、俱利伽羅合戦に敗れた平家軍は、佐良獄（金石大野湊神社社叢）に集まり、志雄方面軍も合流して十数日間、赤旗を立てて氣勢を上げました。

義仲軍は、石川平野を一目で見渡せる安楽寺の後方に、駅西の広岡から陣営を移し、六月二十五日、手取川を渡っている平家軍を急襲しました。敗れた

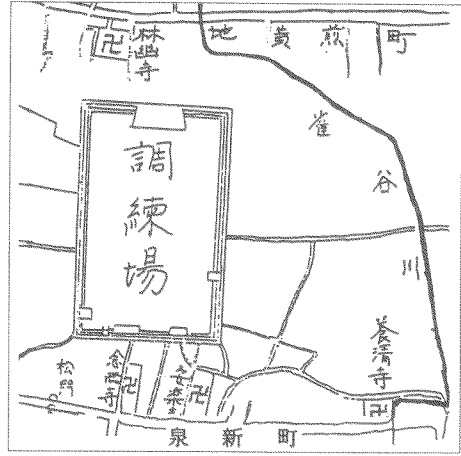
平家軍は、安宅に逃れました。

加賀国司富樫氏は、野々市に館を建て、六百余年間「じょんがら踊り」の唄のように善政を行いました。十代目家経の弟高家は、安楽寺後方に横百二十メートル、縦百六十メートルの土囲と、中に館を造り、代々地頭となつて約百五十年間、泉野を治めました。後にその跡は加賀藩の藩有林になりました。

長享二年（一四八八）、加賀一揆軍は高尾城で二十四代富樫政親を攻め滅ぼし、天正八年（一五八〇）佐久間盛政に金沢御坊を攻め落とされるまで九十三年間、歴史上有名な「加賀農民の持ち（治め）たる国」でした。一揆の武将泉入道慶寛は泉館に砦を構え、米泉や御供田（新神田）などに道場を置き、代々一宗の布教や住民の治安を守りましたが、寛永十三年（一六三〇）百姓町に移りました。

### 作食蔵や調練場

承応元年（一六五二）、加賀藩は食米の不足する農民に米を貸し、秋に返納させるため各地に作食蔵さくしきぐらを設けました。泉作食蔵は、泉館の跡地に設けられました。返納米に糠を混ぜたり、不作で蔵米が不足し



明治2～3年金沢図（略写）

たりして運営に困ったようです。

寛政の頃から諸外国の船が来て、通商開国を迫りました。文政八年（一八二五）に徳川幕府は異国船打払令を出しました。加賀藩は海岸防備のために砲台を築いたり、念西寺後ろに洋式軍事訓練の調練場を設けました。念西寺の横小路をいまでも「調練場道」と言い、殿様が来られるときは、道を清め紫の幕を張りました。

### 松門や「タッチン坂」

松下孝昭 祖母の話ですが、この家の前に松の木が向かい合わせに立っていて、町地と郡地の境になっていました。そして二本の枝が門のように交わっていました。それでこの家は、泉新町一番地（旧町名）です。代々茶店でした、夜は通行止めだったそうです。明治になって、松の木の下の家ですから姓を松下と決めたそうです。

昭和三十四年に、市役所が私宅の前に木製の「松門址」の額を掲げましたが、雨風のため板が傷み、いまはガレージ内に置いてあります。金沢で一つだけの大品だそうで、どうしたらいいでしょうか。北村久子 私の家と野島さんとの境は小路で、そこ松下さんのガレージ内に切り株が残っていました。いまはありません。

研谷千代子 近所の鍛冶さんは、お侍の馬だけの蹄鉄屋だったそうです。

田村勝治 昔の雀谷（どんど）川は、養清寺の横から北陸街道を横切って私の家の有松側を流れていて、川底が高く、養清寺橋は五尺も高かったそうです。

明治三十七、八年に国造神社改築のとき、氏子が総出で川底を掘り下げ、社殿の盛土にしました。日露戦争中でしたが、多額の経費や労力奉仕をされた氏子の熱意に心から敬服しています。

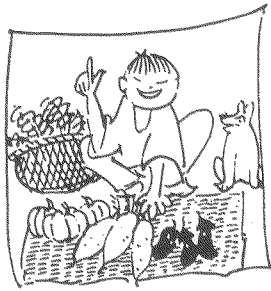
田村夫人 私たちは養清寺を何故か「タッチンさん」と呼び、また橋の両側はタッチン坂と言ったそうです。この辺をいまでも横町と言います。

(註)・タッチンは養清寺初代達善のことか？

(館報昭和64年1月号)

### 〔泉野菜市場の思い出〕

今から百年ほど前からあったのではないかと思いますが、現在の泉三丁目の中程に、夏場だけの野菜



のせり市場があったのを記憶しています。親元が六人いて、その人たちがせり親となり威勢よくせります。今でも、そのせり人の声が耳に残っています。

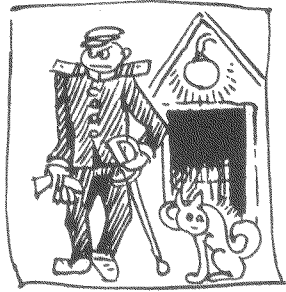
近くの農村あるいは遠い所では松任近在から荷車または天秤棒でかついで来て、市場近くの宿で荷物を整理し市場へ出すのです。各自の荷がせり終わると、それぞれ金を貰って帰る仕組みになっていました。買入人は、市中の八百屋とか泉の仲買の方々でした。今でも忘れられず印象に残っているのは、みの瓜の最盛期になると、たくさんの出荷品が前の道路にまで溢れ、車が道路両側に並んで盛んなものでした。

市場の前には「茂助さ」という酒屋があり、毎日々々賑わっておりました。思うに、荷主が酒屋でコップに一杯飲んで行くのが楽しみの一つであったかと思ひ出されます。その市場も、第二次世界大戦に入って物資も不足し、統制に入り、自然消滅したように思います。今は全然跡もなく、当時の親元を訪ねて聞いても何一つ資料もない由で、思い出のままに書いた次第です。

(宝島外喜雄記)

### 〔調練場〕

泉旭町(東部)の中央山手にかけて、藩政末期の



これは鉄砲（井風筒）の使用とともに戦闘方式が洋式と変わったためです。

青年兵士が笠羽織袴のいでたちで、先頭太鼓、横笛で金沢城から「チーヒョロヒョロ・ドンドン」と進軍して、この調練場で洋式訓練を受けたものと思われます。  
（宝島外喜雄記）

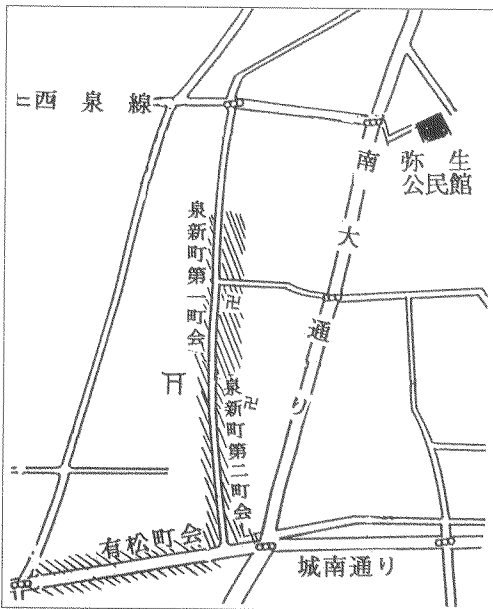
わがまち紹介／泉新町第一、第二、有松町会

泉新町は城下の南端に位置し、北陸街道沿いの両側町です。泉町の南に在り、有松町に通じます。有松町は藩政時代から新町、あるいは出町とも言いました。「文政四年（一八二一）泉村の相對請地が町奉

調練場がありました。通称どんど（雀谷）川から千日塚の松、泉中学校の後方まで広い地域でした。入口の石垣は最近までありましたが、いつしか無くなり住宅地となっています。

行支配下となって成立、町名もこれにちなむ」と『国事雑抄』に記してあります。立町以前から町場が進んでいて、俗称として当地一帯を泉新町と記す場合もありました。本浄寺明細帳によると、明治四年に戸数百九、同五年に一部が芦中町になり、同九年八十三戸となっています。

この地には念西寺、安楽寺、養清寺、国造神社があり、お寺とお宮が一緒にある町会は珍しいと聞い



ております。現在の国造神社は、明治三十六年に着工、同四十年に完成しました。その間に日露戦争があり、大工や人夫、資材が不足し、そのうえ建設敷地が凹地であったため、養清寺の横を流れる雀谷川の土砂を運び地盛りして建てたので、そのご苦労は大変なものだったと古老から伝え聞きました。

藩政時代から、この地に伝承されている民族芸能獅子舞は、秋祭の行事で、獅子の胴体部(竹と木で骨組み)を染めぬいた木綿の蚊帳で覆い、その中に西廓の芸妓が囃す三味線、笛、小太鼓の音頭で「ノエ節」や「コンピラフネ」を唄い、町回りをしました。獅子舞の先づれには、弥彦婆や祇園囃子も出たものです。昭和六十一年の秋に泉新町芳交会が出したのが最後です。獅子頭(白獅子、赤獅子は寛政時代作)や獅子舞の用具は泉文化会館(昭和五十六年竣工)に保存されております。

虫送りも、藩政時代から伝承されてきました。五穀豊穰祈願と農繁期の合間、村挙げての親睦の機会として行ったものと思います。昼時を過ぎると太鼓の合図で若者が、神社境内に集まってきて酒を酌み

交わし、「ヒョットコ」や「オカメ」のお面を被り、横笛で調子をとり、大太鼓と中太鼓を身振り手振りよろしく豪快に、またリズムカルに打ち競ったものです。

夕暮れ時から大松明(大人が四、五人で担ぐ)を先頭に、子女らが提灯風の松明をさげて続き、大太鼓を打ち鳴らして地区内の道々を回り、豊作を祈願しました。戦後市街化が進み、虫送り行事は昭和五十八年まで行われて、それ以後は廃れてしまいました。いまは、残された大太鼓が昔日を物語ってくれるだけです。

昭和二十一年秋、北中味噌工場が全焼しました。そのときの火柱が国造神社の大ケヤキよりはるかに高く上がりました。南風が吹いていたので、風下の家ではバケツに水を入れ、屋根に降り注ぐ炎を消すのに大変でした。当時の家屋は瓦葺きが普通でしたが、中にはこば板で葺き、平たい石(重さ約二キロ)を載せた屋根もかなり見受けられました。

また町会の大事故として記憶に残るのは、昭和四十四年二月八日午前十一時五十分ごろ、航空自衛隊



ジェット機墜落事故現場

のジェット機が被雷してこの地に墜落、死者四人、民家二十四戸全半焼という痛ましい犠牲者を出したことです。

泉新町にあったコバ葺き石置き屋根の旧松下家住宅は、昭和四十一年に金沢市湯涌温泉の江戸村に移築されました。重要文化財となっています。松下家は、藩政時代から種物商として伝統加賀野菜の普及につとめ、また町外れの街道筋にある地の利を生かし旅人相手の茶屋を営むなどの老舗で、在郷商家として栄えました。

泉新町・有松町は、かつて三馬村字泉と言われていました。現在は、泉新町第一町会（七十世帯）、泉新町第二町会（六十三世帯）、有松町会（四十五世帯）とそれぞれ独立町会を運営していますが、お互いに歴史のなかで培われてきた共有の文化をもつ親近感のある地域として、これからもますますの発展を目指しています。

（泉新町第一町会 塩谷潔、泉新町第二町会 泉屋清記）



江戸村の旧松下家住宅（森高芳氏の版画）

## 8、京・伊勢・大乘寺へ

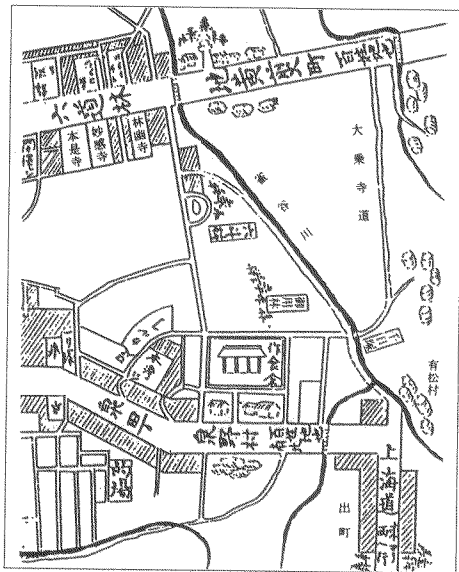
### 上口官道の玄関口・有松町

#### 鎌倉時代に有松村誕生

千三百年ほど前の文武天皇時代（六九七〜七〇七）、大宝律令（七〇一）で北陸道や東海道など七つの官道ができ、その道ぶちに人が住みついて、泉や有松の辺りにも集落ができました。

源頼朝が富樫一族の有松宮内小輔教景を初代の有松村地頭職に任命、有松村が誕生したと推定されます。その教景の屋敷神貴船明神が、現在の貴船神社と伝えられています。

元禄六年（一六九三）に切高（耕作権売買）、享保十三年（一七二八）に町家建願出が許可されて家数が急増し、文政四年（一八二二）二月、有松町・泉新町は金沢町奉行支配になりました。しかし、その土地は泉村地のため、有松町は出町、泉新町は横町と俗称していたようです。そして明治十二年に金沢区有松町になりました。



寛政金沢城下図

元禄十年（一六九七）に曹洞宗第二本山の大乘寺が、本多町から寺地山（現在地）に移転しました。参詣本道は、貴船神社の前を通り、地黄煎町の町端の西田医院左側や泉丘高校左側用水沿いの道でした。医院の左角に高さ一・五メートルの石標があります。貴船神社前の石標は残っていません。後に野田道が本道になりました。

#### 三角茶屋や囚人処刑場

新屋久雄 私の子どもの頃（大正時代）は、道幅が



泉新町と同じく六メートルぐらいでした。町端に松金電車の停留場があって、松並木がつづき、昔は二軒の茶屋もあったそうです。町の半数は野菜集荷商でした。夏、夕涼みのとき、ガキ大将が狐の嫁入り灯や火の玉の話をした後、千日塚まで肝ためしに行かされました。

魚屋寿美子 私の家の初代は、泉新町との曲がり角の三角茶屋でした。馬や駕籠も備えていましたし、位牌に万治二年（一六五九）と記されています。

田村 町端に明治初期まで処刑場がありました。「囚人の最期の願いは聞き届けられたので、見さっしゃれ」と先ぶれが来ると、親は囚人の言いがかりを恐れて「見るな、見るな」と急いで戸を閉めたそうです。  
(館報平成元年3月号)

#### 〔三角茶屋の由来〕

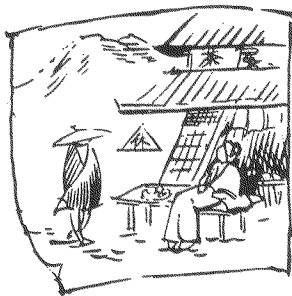
場所は泉一丁目五の五四。現在は呉服雜貨商を営み、屋号は「三角屋」。現主人は角屋義雄さん（七十四歳）です。

「三角茶屋」は明治初年頃まで、先祖代々北陸道

の金沢の街はずれ、有松の右角に在り、北陸道を上り下りする旅人の駅として繁盛した茶屋でありました。

金沢から京詣りする人たちは、この街はずれの有松まで家族や親戚一同の見送りを受けたものです。その際、三角茶屋で一休みし、そこで送る人、送られる人が挨拶を交わします。送られる人はそのお礼を、送る人は道中の無事を祈りつつ別れを惜しみ涙を流した所でした。

その茶屋には、駕籠あり、馬あり、足に自信のない人たちはそれを利用して、長い道中を旅立ちしたのであります。しかし、明治初年に鉄道・北陸線が敷かれるようになってからは、次第に社会状況が変わり、その茶屋も遂に姿を消すことになりました。三角屋の歴史は相当古いものと思えます。はっきりしたことは分かりません



が、約三百年前までの系図が残っております。

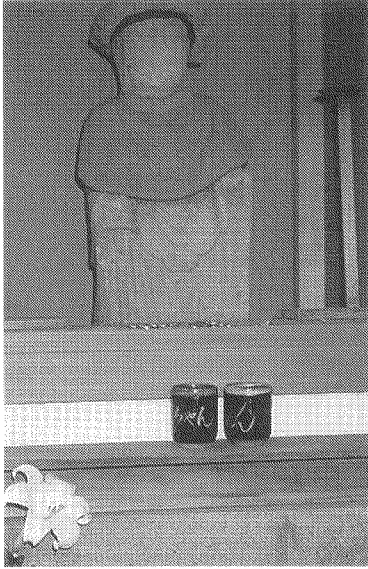
(宝島外喜雄記)

## 二、地蔵めぐり

### 1、雀谷川から安置した有松地蔵

夢枕に立った川底の地蔵さん

平井義正 明治三十六年に国造神社改築工事が始まりました。その頃、私の祖父（弥三太郎）が、地蔵



有松地蔵

さんの夢を見ました。本殿盛土のため、雀谷川の川浚えをしていると、私の家の後ろの川底から地蔵さんが見つかったと聞いています。

松本安平 三十七、八年の日露戦争に勝ち、神社も竣工したので、町内の守り本尊として旅人の命水と感謝された「池ん所」に安置されました。八月の地蔵盆には各戸からのお供え物を飾り、旗を立て、子どもたちの楽しい最大行事でした。

地蔵盆は八月二十四日午後三時から。

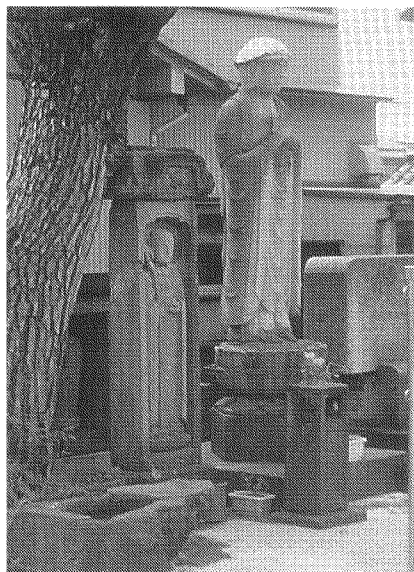
（註）・錫杖宝珠の延命地蔵と拝察されます。錫杖は欠損しています

### 2、大小四十余体の

#### ニンニザンマイ泉墓地地蔵

墓地公園化をめざす

伴田良観 泉墓地にある高さ三メートルの大地蔵さん（宝暦十二年作）は、昭和四年に旧市営泉火葬場が現在の西泉に移転したので、元の泉墓地にお帰りなさいました。六地蔵さんは、墓地に眠る方々をお



泉地藏

守りくださいますし、また多数の小地藏さんは、幼児（にんに）供養の優しい親心でしょう。ニンニザンマイ（墓地）の名は、そこから付いたものでしょうか。

太田一雄 墓地管理のうえから、全部の墓を調査して墓籍や管理規則を作り、また水道、舗装なども整備しました。今後はさらに地藏さんはじめ、忠魂碑、奥泉頌徳碑、塾門弟謝恩碑、町の歴史を語る享保・文化時代の墓などを生かした墓地公園化に努めます。

地藏盆は、旧盆に任意参詣することになっていきます。  
(以上1、2とも館報平成元年7月号)

### 3、毎月御詠歌同心講をもつ念西寺地藏

延焼を食い止めたご功德

伴田 当寺の起源は古く、いつしか無住となり荒廃しました。寛永の頃（一六二四〜四三）、念西さまが寺領内の延命地藏菩薩が野ざらしになっていた姿を悲しみ、堂宇を建てて本堂内に安置しました。

門前の地藏様は、明治大正の頃、泉のお百姓さんが松任市へ野菜を出荷するため、荷車に野菜を積み夜半に二万堂の大ケヤキ付近まで来ると狐狸に化かされ困っていました。お地藏様を安置してからは止んだそうです。その後、松金電車が開通し、また車社会になったので当寺の門前に移されました。

居村玉喜 毎月二十四日夜七時からの御詠歌には、観音御詠歌三十三番と金沢地藏めぐり札所第五番泉念西寺の「よにこゆるちかいにあいしうれしさに



念西寺御詠歌

かくてうきみのうさもわすれつ」を歌います。同心

同心

講で西国三十三か寺巡りもしました。

山本操 二十年前、自衛隊機が泉新町に墜落し大火災が起きたとき、奇跡的にお隣で鎮火し、お地藏様と本堂内の千代尼つるべ井戸の竜神様のご功德と大評判でした。

地藏盆は八月二十三日午後七時から。

#### 4、安産、道中安全の養清寺地藏

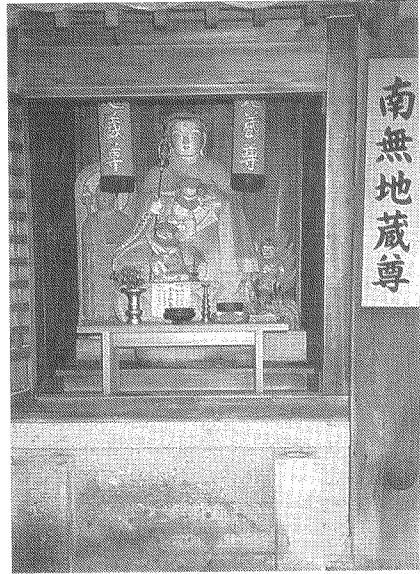
温顔で二児を抱く

松平妙香 初代達善さんのご祈禱があらたかだったので、この辺りの人々のお招きにより享保十八年（一七三三）に柏野村から移住し、達善庵を建てました。二代心蓮さんは養清寺と改め、処刑場跡の地藏さんを寺内に安置しました。

上口（京都）方面へ旅立つ人は、筋向かいの三角茶屋で休み、そしてこの地藏さんに道中安全を祈ったそうです。

また水子（子育て）地藏さんは、先代妙恵尼さんが戦後に水子が激増したのを悲しみ、供養を始められ

## 南無地藏尊



養清寺地藏

たもので、私も受け継ぎ動めています。

(註)・この水子地藏さんには全身彩色の跡があり、

普通だと抱いているのは一児ですが、この地藏さんは二児を抱き、温顔で形容整い優秀者と拝察されます。

有松久子 養清寺さんの御堂左側一室は、泉新第一・第二・有松三町会の寄り合い場で、若い人たちのクラブにもなり、町民に親しまれていました。毎月の御詠歌は、心が安まり楽しみでした。しかし時代の流れで、いまは寄り合いも御詠歌もなくなりま

した。

地藏盆は八月九日午後二時から。

(以上3、4とも館報平成2年1月号)

## 5、諸願成就の六斗林地蔵

甲子園での健闘誓いも

能登善次夫妻 三十年ほど前に、私どもの二人の男の子たちが、いずれも病弱でしたので、俱利迦羅不動尊ゆかりの石動の昭龍寺様のお言葉どおり、私の家の前右側に地藏様をおまつりし供養してきました。

お蔭さまで、子どもたちは二人とも強健に育ちましたし、通りがかりに合掌礼拝をして行かれる方も増え、供花などもいただいで喜んでおります。ご主人様の快癒祈願をされる方もありました。毎年八月に地藏まつりもしています。

中居殉也金沢高校野球部主将 僕たち野球部の自由寮生は、近くの六斗林地蔵さんに「甲子園めざして頑張ります」と、朝夕誓って猛練習をしています。



六斗林地蔵

榊木義則同監督 春の甲子園選抜大会へ出場決定の通知がありました。私も頑張ります。応援してください。よろしくお願いいたします。

## 6、天徳院二世が開いた龍徳寺地蔵

地蔵まつりが復活

三香美瑛舜任職 龍徳寺は正保四年（一六四七）に建立されました。開山は天徳院二世龍睡和尚です。

元禄の頃（一六八八〜一七〇三）、この辺りは龍徳寺町と呼ばれ、記録もあって由緒正しいお寺です。私は瓢箪町の崇禅寺住職ですが、十年前から当寺第四十世住職を兼ねています。

地蔵まつりは、昭和四十年頃から中断していましたが、現在は復活して信者や町内の方々のお参りをいただき喜んでいきます。

安東義雄・貴美子夫妻 昨年からお寺の一室を町内集会所にあて、町会や婦人会、子供会、映画会などに利用してもらい、お寺に親しんでいただくよ



龍徳寺地蔵

う努めています。

地蔵盆は八月二十三日午後七時から。

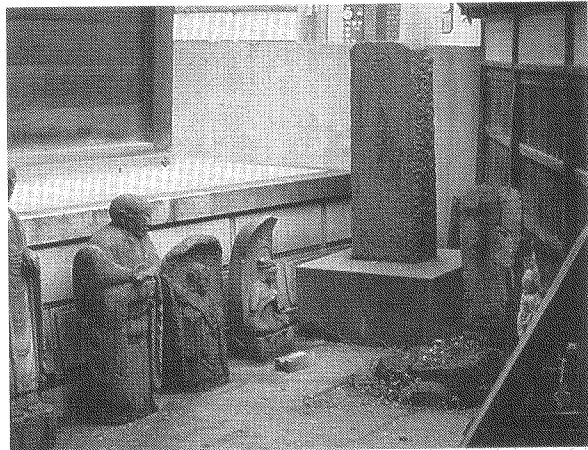
(註)・龍徳寺は六斗林二丁目にあり、野町校下ですが、弥生校下と数軒先に接しているのので取り上げました。尊像は蓮華台に座し、左脚を垂れ、宝珠錫杖を持ち等身大で石質も良く典型的な延命地蔵座像です。

## 7、雨宝院に移した千日塚地蔵

護摩供養をして移す

高山清旻住職 当雨宝院の開基雄勢は、慶安二年(一六四九)三月二十一日に泉野千日塚で入定され、里人は数多くの地蔵を寄進し供養を続けました。昭和三十年、塚の老松が風害等を受けたため整地をする際、護摩供養を行い、地蔵と伊勢両大神宮五千日祈願成就の塚碑を当寺内の宝篋印十輪堂右横に移し供養をしています。

(以上5、6、7はいずれも館報平成2年3月号)



千日塚地蔵

〔地蔵ミニ事典〕

### ①地蔵さんの歴史

お釈迦さまが亡くなられた後、地蔵信仰は十王經と地蔵本願經を原典にして、中国に広まりました。仏教が我が国に伝わったのは、今から千四百三十七年前の欽明天皇の時でした。地蔵さんと仏説延命地



藏経が伝わったのは、その二十三年後です。

・奈良、平安前期 光明皇后が一丈(三メートル)の地蔵を造らせた記録があります。当時の貴族たちは、虚空蔵菩薩像と一対にして財宝、現世利益の仏として尊崇しました。空也上人は西院河原地獄和讃(御詠歌)を作り、広まりました。

・平安後期、室町時代 庶民に広まり、地獄(六道)救済の六地蔵が現れました。

・江戸時代以後 安産、子育て、長寿、農耕、道標等いろいろな地蔵となり、また子どもの仏様として親しまれています。(館報平成元年7月号)

## ② 仏説延命地蔵経の要訳

仏(釈迦)が佉羅陀山(きやらださん)で説法をされたとき、無垢生が尋ねました。

問 もし仏が入滅されたら、衆生を誰が救いますか。

答 延命地蔵が六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六世界)に現れて、念ずる者に安産、五体具足、健康、長寿、聡明、財宝、敬愛、豊作、加護、菩提(極楽)の十福を与え、八大怖(異変)呪不吉を除

き、諸々の悪霊も悟りを開くでしょう。

問 衆生済度の方法は？

答 地蔵は、日月星、海山、動植物、貴賤老若男女の過去、現在、未来のあらゆる姿(三界四生五形)に変身して衆生を救うでしょう。そのとき、大地は六種に震動し、延命地蔵が錫杖を持ち、地上に出現します。(以下略)

(館報平成2年1月号)

## ③ 西院の河原地蔵和讃

(伝 念仏聖 空也上人作)

これはこの世のことならず

死出の山路の裾野なる

西院の河原の物語り

聞くにつけても哀れなり

二つ三つ四つ五つ

西院の河原に集まりて

父上恋し 母恋し

恋し恋しと泣く声は

この世の声とはこと変わり

悲しさ骨身を通すなり

かのみどり子の所作として

河原の石を取り集め

これにて廻向えこうの塔を組む

一重組んでは 父のため

二重組んでは 母のため

三重組んでは ふるさとの

兄弟わが身と廻向して(以下略)

(鬼が現れ地藏が救います)

〔地藏尊御詠歌〕

平安後期から奥州平泉の平泉寺金色堂内に、阿弥

陀三尊と定朝作の六地藏尊が祀られています。その

頃から京の都では、町の入口や要地の六か所に一尊

ずつが祀られ、順拜する風習ができました。それが

後に三十三か所等が増え、各地で盛んになりました。

金沢地藏巡りは、加賀藩時代は犀川以南を主に二十

四か所巡りでしたが、明治初期には市内四十八か所

に広まりました。(六観音巡りは平安中期に始まり、江

戸中期には三十三か所になりました) 御詠歌金剛流は

鉦、大和流は鈴を鳴らして唄います。

・六道救済地藏(鎌倉期の覚禅鈔図像による)

道(世界)名 地藏名(略称) 像形(時代・宗派に  
より変遷あり)

第一 地獄 延命地藏 左手宝珠 右手錫杖

第二 餓鬼 宝掌地藏 " " 与願印

第三 畜生 宝処地藏 " " 如意棒

第四 修羅 宝印手地藏 " " 梵籬

第五 人 持地地藏 " " 施無畏印

第六 天 堅固意地藏 " " 経巻

8、地藏尊御詠歌

一番雨宝院(元遍照寺、真言宗) 千日町一の三

ただたのめ よしあしひとをわかずして すくう

ちかいの あらんかぎりは

二番玉泉寺(時宗) 野町三の十五―十九

ちりみだれ にごるこころはうまれつき さてこ

そののめ すてぬちかひを

三番希翁院(曹洞宗) 野町三の十九―六十六

ひとかたに 思いたりる心より いのりのみち

の おくもみるべき

四番開禅寺(元向東庵、曹洞宗) 野町三の十八―十

ここにより かしこによばふみちあれど わがこ  
ころより まよふとぞしれ

五番念西寺(浄土宗) 泉二の十二—十四

よにこゆる ちかいにあいしうれしさに かくて

うきみの うさもわすれつ

六番千手院(真言宗) 野町三の一—二十六

ふかきよの やみぢもはれんよろずよの すえま

でてらす のりのともしび

七番国泰寺(臨濟宗) 寺町五の六—三十八

ほんらいも なきいにしえのわれなれば しにゆ

くかたも なにもかもなし

八番常松寺(曹洞宗) 野町一の一—八

ねがいとも うわのそらなる人ごころ えたりか

ほにぞ あらはれにける

九番西方寺(天台宗) 寺町五の六—四十八

みにそふて かげとひとしくまもるなる ほとけ

のめぐみ あれとうとや

十番真長寺(真言宗) 野町一の一—二

よをいとふ こころのふかくなるひとの みにや

しむらん きたやまのかげ

十一番宝勝寺(臨濟宗) 寺町五の五—七十六

おどろかす こころもほかになかりけり われこ

そよはの ゆめはさめけれ

十二番元安住寺・医王山寺(天台宗) 湯谷原二の二

十一

よしあしの おもひをやめてさとりにいる こころ

のおくも こころなりけり

十三番伏見寺(真言宗) 寺町五の五—二十八

つゆよりも もろきいのちのなかにすら なきの

ぞみを おもひけるかな

十四番大円寺(浄土宗) 寺町五の三—三

むつのみち ふかきやみぢをわたるかわ まこと

のよには われぞかわらん

十五番長久寺(曹洞宗) 寺町五の二—二十

ながきよの ゆめのうちにてみるゆめハ いづれ

かうつつ いかがさだめん

十六番玄光院(浄土宗) 寺町二の十三—二十五

あさゆうに わがみのうえをかえりみて みつの

こころの うむをしるべし

十七番宝集寺(真言宗) 寺町一の六—三十九

よもやまを ながめつきげばいりあいの かねも  
ひとしほ あわれますかな

十八番祇陀寺(曹洞宗) 十一屋町十一—二

たおりきて ほとけにそなふはななれば ついに

ほだいの みをやむすばん

十九番覚源寺(浄土宗) 菊川二の八—八

なむあみだぶは まよひさとりのみちたつて た

だなにかなの いきほとけなり

二十番善光寺坂地藏堂 小立野三丁目

このまより いでてすむべきつきかけを まつと

きかする あきかぜのこえ

二十一番下馬地藏堂 石引二丁目

むつのみち いくめぐりしてあいぬらん ところゑ

ひとこえ すてぬちかひを

二十二番石引町地藏(元岩倉寺) 石引二の十八—一

(石木木材店内)

のりのみち ひとつながれをむすびても ところ

ごころに すえはなりゆく

二十三番波着寺(真言宗) 石引二の十八—一

ほうぜうの むろどときけどわれすめば うゐの

なみかぜ たたぬひもなし

二十四番眞行寺(曹洞宗) 石引二の四—十七

たかきみね さきだつひとをみるからに われも

ゆくべき みちをしるかな

二十五番瑞光寺(臨済宗) 本多町二の四—十七

いにしへの しかなくそののいほりにも ところ

のつきは くもらざりけり

二十六番馬坂集福寺(浄土宗) 安楽寺内

おしなへて ところひとつをしりぬれば うきよ

にめぐる みちもまよわず

二十七番安楽寺(浄土宗) 東兼六町十一—一

あるじなき みだのみなにぞうまれける となえ

すてたる あとのひとこえ

二十八番出現堂 兼六園内

にごりある みづにもつきはやどるぞと おもひ

はやがて すむところかな

二十九番地藏橋地藏尊 小将町地藏橋

わたすべき かずもかぎらぬはしばしら いか

たてける ちかひなるらん

三十番了願寺(浄土宗) 東山一の三十七—一

ざとりゆく ころのうちにすむつきは いでて  
いるべき やまのはもなし

三十一番卯辰賢聖坊(真言宗) 美川町に移転

かしこくも ふかきのぞみのあるれば つたな  
きわざに ころとむるな

三十二番最勝寺(天台宗) 東山二の十九—二十

みようほうの ただひとつのみありければ ふた  
つともなく また三つなし

三十三番伝燈院(曹洞宗) 鶯町二十九

まつたかく つきのひかりともろともにも もらき  
でつとふ のりのともしび

三十四番心蓮社(浄土宗) 山の上町四—十一

おなじこと いちみのあめのふりぬれば くさき  
もひとつも ほとけとぞなる

三十五番光覺寺(浄土宗) 山の上町五—一

はるははな あきはのはらをながめても にわに  
はちすの はなをみるかな

三十六番善導寺(浄土宗) 山の上町十三—五十一

ごくらくへ うまれんとおもふころにて なむ  
あみだぶつと いうぞさんしん

三十七番広誓寺(曹洞宗) 昌永町十三—二十五

ちかひをば ちかひのうみにたとえたり つゆも  
たのまば かづにいりなん

三十八番崇禪寺(曹洞宗) 瓢箪町五—四十三

ほとけぞと なのれバあやしほどけには ほとけ  
とおもふ ころあるかは

三十九番元大巖寺(曹洞宗) 久昌寺内

みちひろき むつのちまたをまもりつつ ほとけ  
のちかひ ふかきほりかわ

四十番久昌寺(元宗徳寺、曹洞宗) 堀川二十九—二

むつのみち よつのちまたのくるしさに いつか  
かわりて たすけはつべき

四十一番持明院(元木の新保、真言宗) 神宮寺町三の

十二—五  
よしあしの ひとをわらしとはちすはな この  
しばまで さきかねるなり

四十二番放生寺(曹洞宗) 日吉町二十四

いきながら ほとけのみちはなきものを なむあ  
みだぶの こえにうまれて

四十三番高巖寺(臨濟宗) 芳斎町二の十五—三十三

まつたかく みのりのやまのうごかすは ころ  
のつきや くもらざるらん

四十四番真福寺(真言宗) 芳齋町二の十四—二十一  
みつのかわ ひとつのうみとなるときは しやり  
ほつのみぞ まつわたりける

四十五番救虎庵地藏尊 長土塀三の二十二—一隣  
みをすてる ころもかけるたけのはの そよい  
かばかり かなしかるらん

四十六番法船寺(浄土宗) 中央通り二の一—四十  
あしかりし なにわのさわりおもふみも ちかひ  
のふねに わたさぬはなし

四十七番養智院(真言宗) 片町二の十三—二十  
にぎりつる ころのみつにつきありと たかま  
ことより たづねそめけん

四十八番小林寺(臨濟宗) 野町三の一—三十九  
たづねつる くもよりたかきやまこえて またも  
うえなき はなをみるかな

(御詠歌は念西寺資料—全文変体仮名文字—、寺名所在  
地は小將町地藏橋講資料による)

### 三、獅子舞

#### 1、棒術台覧の栄に浴した泉の獅子舞

藩政の末頃から、獅子舞が盛んになりました。

赤獅子は、嘉永五年（一八五二）に高岡町紙屋小路の浅田某が、金沢城内の桐の木をさげ渡してもらい、作ったと伝えられています。朱塗り漆で高さ四十七センチ、奥行き四十七センチ、重さ十五キログラムあり、市内二百十八獅子頭の中で第十位の古さです。

白獅子は、桐材白木作りで、保存箱に「元治元年（一八六四）」と記され、やはり浅田某作で、重さが十八キログラムの大型です。

また、もう一つの赤（布）獅子は、殿様以外は使用禁止の貴重品である猖々緋色羅紗を全面に貼り付けて仕上げた大型のものです。



泉芳交会の赤（布）獅子（左）と白獅子頭

これら三獅子頭は、戦前の古くから有松町と泉新町の共有にし、両町で組織する泉芳交会が管理しています。現在は、国造神社地内の泉文化会館に白獅子と赤(布)獅子を展示してあります。

他府県の獅子舞は、一人または数人が一組で、花などを持ち獅子と戯れます。しかし、金沢の獅子舞は、一組十人の巨大型で、武芸をとり入れ獅子と戦います。百五十町会の二百十八獅子頭が、昭和四十年に市民俗文化財に指定されました。

半兵衛さ流棒術を普及した橋爪与一郎さん

橋爪豊康校下町連会長の敵父与一郎さん(明治十三年生、昭和三十八年没)は、青年時代に地黄煎町の町田半兵衛さの道場で武芸に励み、晩年まで獅子舞の指導振興に尽くされました。その弟子の中から、塩屋与市をはじめ何人もの名手が現れ、「泉の棒術」と有名になりました。

その練習場が泉新町の野菜せり場だったので、郡部からの出荷人から伝え聞いて弟子入りする者が多く、そのため半兵衛さ流は、石川郡や小松辺りまで広まりました。橋爪会長宅で与一郎さん愛用の大小

五本の檜の棒を拝見しましたが、握りの部分が激しい練習ですり減っているのに敬服しました。

町田半兵衛さは、自宅道場で棒術をはじめ剣術、長刀、鎖り鎌、躰術などを教え、門弟千二百人余を抱え、免状を与えるときは獅子舞袴に「渡の文字とトンボの模様」を許可しました。「渡トンボ袴」は獅子組の誇りでした。

泉文化会館竣工を機に獅子舞復興

昭和五十八年九月十三日、泉文化会館が竣工したのを機に獅子舞が三十年ぶりに復興し、町回りをして披露されました。会館建設に引き続き、獅子舞復興の責任者だった松下良弥生公民館長は「あの頃は、会館建設と獅子舞復興の資金調達はじめ、万般の手配、獅子舞用具の新調補修などに無我夢中でした」と回想されました。また、新屋武久獅子舞保存会長は「明治四十二年に大正天皇、大正十三年に昭和天皇(お二方とも皇太子時代)ご来県のとぎ、泉の棒術が選ばれてご台覧の栄を賜るなど、先人の築かれた伝統は、ぜひ後世に守り伝えたい」と話されました。

(館報平成2年7月号)





下段の構え



獅子舞の前ぶれ



渡トンボ袴

## 2、二百年の伝統を守る泉町寛政獅子

海道澄 泉町の獅子頭は、寛政時代（一七八九〜一八〇〇）に金沢城内にあった桐の古木を下げ渡していただき、紙屋小路の浅田某の作と伝えられています。白木の作りで、高さ六十三・五センチ、前幅三十八センチ、後ろ幅五十八センチ、奥行き四十九センチ、重さ十三キログラムで、市内でも指折りの大型であり、また、古さと聞いています。最近では、泉八幡神社五百年祭の昭和五十一年、同六十年、平成元年の各秋祭りに獅子舞を奉納



泉交友会の寛政獅子頭



親子共演

しました。

泉屋隆

久 笠井

喜久さん

と池森正

男さんの

ご努力で、

昭和五十

一年に二

十年ぶり

で獅子舞

が復興さ

れました。

六十一年の

秋祭りに

も指導さ

れました。

去年の

秋祭りか

らは、私

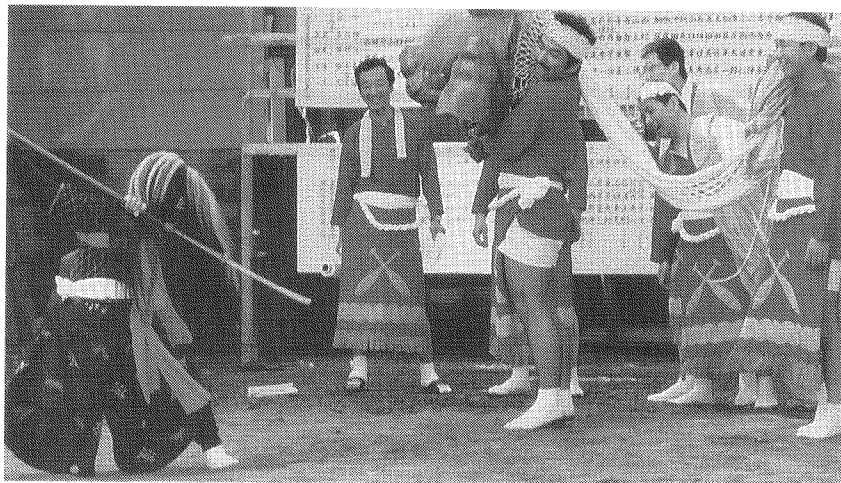
は篠田清一さんや保存会の方々と、小学生以上の約三十人に棒振りを指導しました。八月お盆過ぎから秋祭りまでの約一か月間、お宮さんの広場で夜七時から九時まで毎晩猛練習をし、婦人部の応援で一段と練習は盛り上がりました。

半兵衛さ流と玉田流

泉屋富三 私は、頭振りを指導しました。泉町は、明治・大正の頃は半兵衛さ流でしたが、その後、泉新町の中西与吉さんの指導で玉田流になり、現在はまた元の半兵衛さ流に戻りました。そのため、泉町の袴は半兵衛さ流の渡トンボ模様、玉田流の白玉との合わせ模様になっています。

石坂大喜治 泉町では、わが子に家紋入りの棒振り衣装と用具を贈る伝統があります。成人式後も親子の絆を結ぶ思い出にと、大切に保存されています。獅子舞が町回りをするとき、出演者と世話方が合わせて百人を超えます。町回りの途中、飛び入りの親子競演もあるなど、町内一丸となって燃えます。町会としても協力応援を惜しみません。

小西紀一 泉町獅子保存会は、昭和四十九年に町



親子共演

会長だった笠井喜久さんのお世話で結成されました。加賀獅子は百万石にふさわしい大型であり、棒振り技術とともに全国随一です。泉町が寛政から二百年守り続けてきたこの伝統は、いつまでも大切に伝えたいものです。

(以上1、2とも館報平成3年1月号)

### 3、七尾の名工作、地黄煎町獅子

松下七雄 地黄煎町の雄獅子は、後ろ幅五十一センチ、高さ四十三センチ、重さ二十キログラム、桐材白木作りの大型です。角の差し込み口に「七尾住人柴田三朝」と記してありますが、制作年代はわかりません。秋祭りには致芳会館で展示しています。

丸岡喜市 獅子舞は、明治の中頃が最後です。明治の中頃は戸数が少なく、人数が揃わなかったのでしょうか。

松下 また、こういう見方もあります。町会保存文書によると、北陸線のないその頃、水不足で何回も信州の戸隠神社へ雨乞い水をいただきに行ったと

いう記録があります。半兵衛さには申し訳ないけれど、不作続きで祭りは経済的にも無理だったのでしょう。

町田一郎 私は半兵衛の四代目です。半兵衛は、天保四年（一八三三）に生まれ、明治四十二年に七十歳で亡くなりました。石浦神社境内に、門弟千五百余人で「振武町田寿翁碑」を建てていただき、ま



地黄煎町獅子頭

た遠く白峰辺りまで半兵衛さ流が広まって、半兵衛もさぞ喜んでいることと思います。

道場は四間に五間の広さで、道路に面し、師範席は一段高くなっていて板敷きと土間は半々でした。戦時中、青年たちが武道練習をしていましたが、いまは在りません。

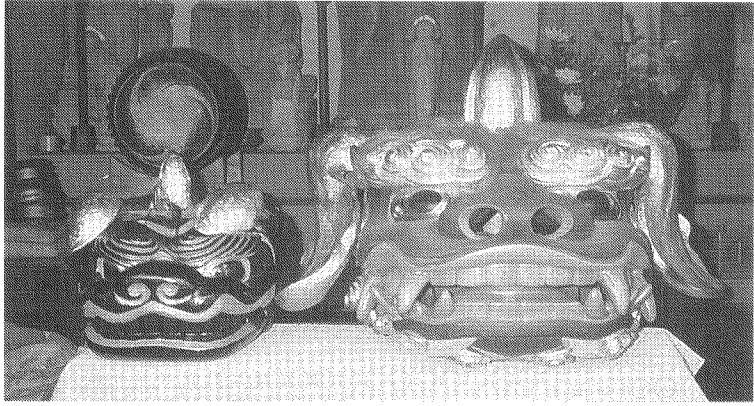
#### 4、雌雄一对の六斗林一、二丁目獅子

小西 六斗林一、二丁目の獅子は、六斗林一丁目町会と六二親和会の両町会が管理し、開禅寺さんの地藏堂に保管されています。

大屋信之 戦前までは両町合同の六斗林一、二丁目町会でした。いまでも行事は仲良く合同で行っています。獅子は青塗（雄）と、黒と赤塗（雌）の中型です。

村上忠 獅子舞は、日米開戦前年の昭和十五年が最後でした。しかし、四年前から秋祭りに山本工務店前に展示しています。

谷村ヨク 私の祖父の谷村外吉は、昭和三十年に

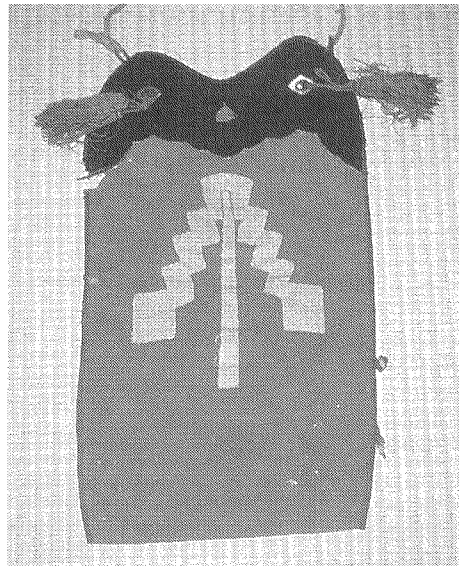


六斗林1・2丁目獅子頭

七十歳で亡くなるまで、千日町、伝馬町、野田寺町などの獅子舞を指導し、自分も出演していました。獅子頭の振り方は、石野勝太郎さんが指導されたそうです。

地黄煎町と六斗林一丁目の両町

会に、赤地に白抜き御幣印の獅子舞胸当があります。明治五年、加賀藩の町火消し四十組が廃止され、数



獅子組

町連合で二十四の自治消防組ができました。その中の町名不詳の御幣組の組印とそっくりなのです。旧両町会の消防組のものでしょうか。

松下 そのためか、両町共有腕力ポンプを使って、三十年ほど前まで一か月交代で雀橋や師範学校（現泉中学校）防火池で放水訓練をしていました。

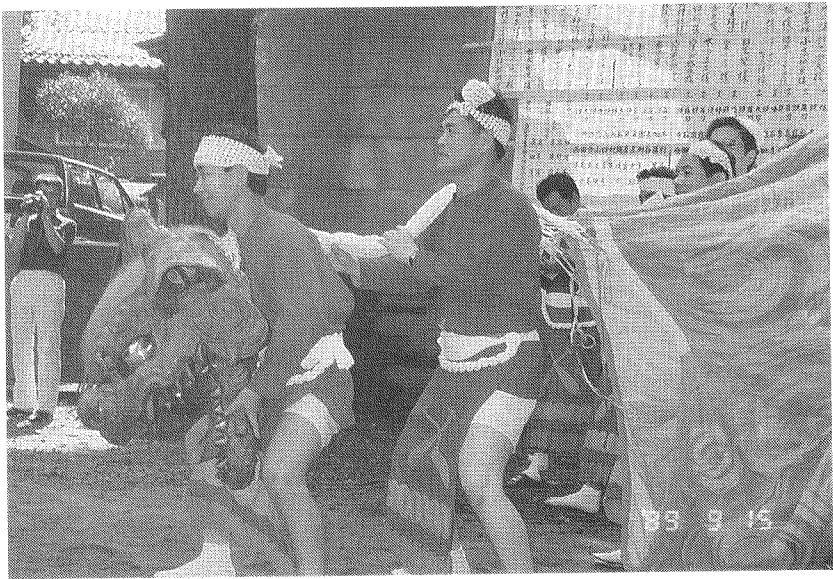
（註）・伝馬町ほか八町（龍王組）の龍印や泉町の權印は、消防組と獅子組共通の印となっています。



気合いを入れて、さあ出動！

(上は泉芳交会、下は泉交友会の獅子舞)

(以上3、4とも館報平成3年3月号)



## 四、気象台のこと

### 弥生校下生みの親、金沢測候所

明治十五年に県が、地理掛測候部を新設し、気象観測を始めました。同二十一年に、金沢測候所（現気象台）を創立しました。明治四十一年五月には、観測の適地として市街地を離れ、広大な泉野畑地の中央部（現在地）に移転しました。

移転七年後の大正三年に石川県師範学校が隣接地に、翌四年に附属小学校が、それぞれ広坂から移転してきました。それにつれてさらに教職員住宅や市営住宅や民家が建ち、野村、三馬、富樫、米丸、額、押野（一部）の六村が順次、金沢市に併合され、市営陸上競技場の完成や南端国道開通などと相まって、金沢測候所は金沢市南進政策の起点となりました。

当校下は、昭和初期まで鶴来街道と北陸街道沿いの民家だけでした。三馬、富樫、野町、附属の四小學校に分かれて通学していましたが、測候所周辺から住宅が増えはじめ、昭和二十五年に弥生小學校が独立開校して、二十三町会、戸数二千五百のまとまった校下になりました。

### 測候所から金沢地方気象台へ

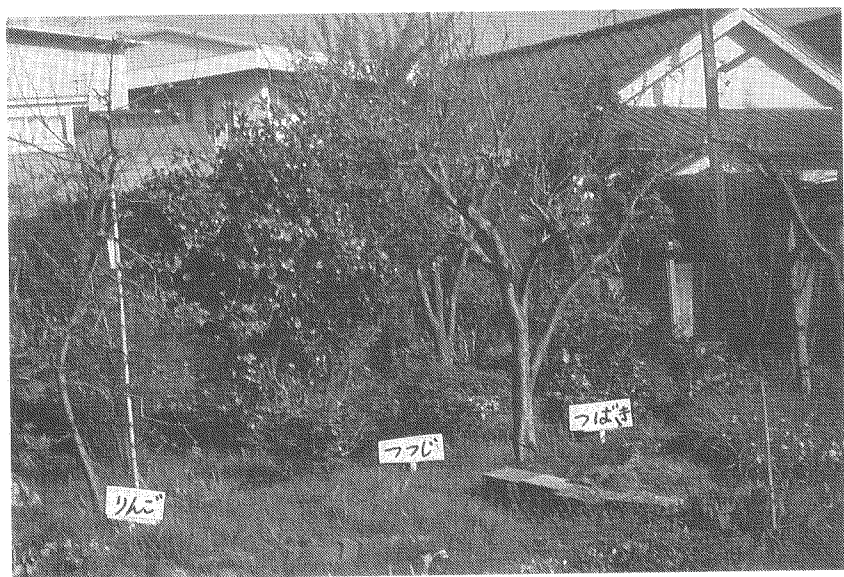
宮一郎 私は昭和六十一年に気象庁を退官しました。測候所は、昭和三十二年に運輸省所管金沢地方気象台に改まり、同三十六年に新庁舎が建ち、測器が近代化しました。敷地は三千五百三十五平方メートルあります。正門は弥生公民館前から南大通りへと向き、六階建て赤煉瓦風力台も鉄骨塔に代わりました。

北本与一 私は石川郡の出身です。小学校高等科のとき、測候所見学に来ました。当時は、地震計や露地の計器などすべてが珍しく、とくに赤煉瓦風力台の六階頂上から日本海の水平線や金石、大野を一望にした感激は、帰校後も何回も繰り返し友達と語り合いました。私は現在、気象台の隣に住んでいま





予報桜



季節予報植物

す。近く、气象台が移転することによって、開花予報桜や梅、桃、杏、椿、つつじなど三十余種の季節予報植物とのお別れが迫り、辛い思いで眺めています。

半田清次 昭和十年、私が押野小学校高等科二年生のとき、校庭に予報柱を立て、当番が毎日、白(晴れ)や赤(曇り)、青(雨)、緑(雪)の旗と、風向きを示す四色の三角旗を掲げました。農家は旗を見て、明日の農作業を考えたものです。ある日、強風で警報用の赤球が二百メートルほど吹き飛ばされ、それを懸命に追いかけました。懐かしい思い出です。

(館報平成3年7月号)

### 金沢地方气象台について(年表)

明治14年5月 金沢小学校教諭井上幾太郎氏の建議により、千坂高雅県令(知事)が採納し、県庁内に石川県地理測量掛測候部を置き、12月に観測場を設置した。明治15年1月より気象観測を開

始した

明治20年7月 金沢測候所と改名

明治25年5月 地震計を設置(正門は弥生会館前通路)

明治41年5月 現在地(弥生1-32-25)に移転。敷地一四七坪

大正10年1月 赤煉瓦造り六階建て風力台が竣工。

予報標識柱に赤球、赤白青緑色の旗

で晴雨曇風向などの予報を表示

J O J K開局。ラジオで県内に予報

を周知

昭和6年 球旗を廃止(別説あり)

昭和11年 金沢地方气象台と改称。同18年金沢

測候所に戻る

昭和14年 金沢地方气象台となる

昭和32年9月 現庁舎に改築。ソメイヨシノ一本伐

昭和37年4月 現庁舎に改築。ソメイヨシノ一本伐

平成3年8月 駅西地区に移転の予定(現在工事中)

開花予報桜について

昭和10年 現正門付近にソメイヨシノを二本植

昭和26年

える（昭和37年一本伐る）

気温の推移により中央気象台が開花  
予想発表

昭和40年

蕾の重量により開花を予想、現在に  
至る。第一回予想日3月10日。以下  
10日ごと

（註）

敷地内には、桜のほか予報用の梅、椿、山茶  
花、桑、牡丹、芍薬、水仙、タンポポ、芝、  
桃、梨、りんごなどが植えられている。

・赤煉瓦風力台時代（大正10年〜昭和11年）に弥  
生校下が形成された。

（平成3年7月作成）

さよなら！気象台

宮 一郎（弥生が丘町会）

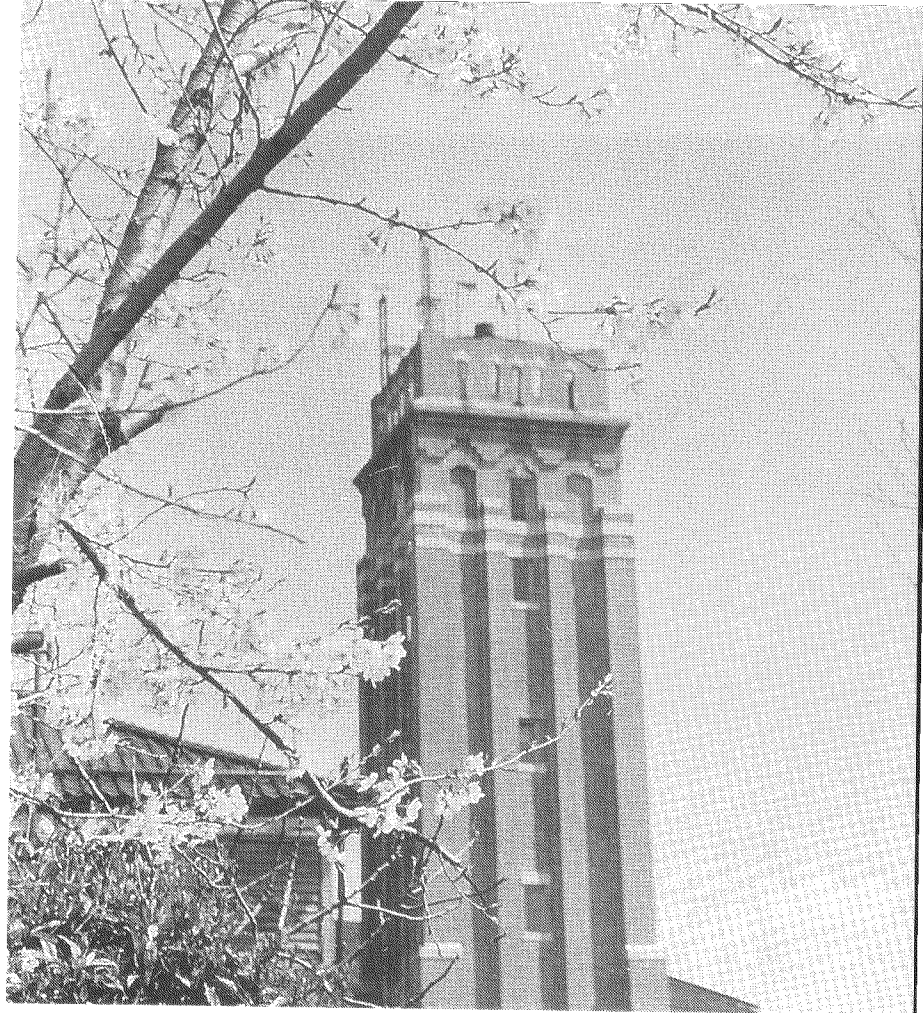
気象台は、広坂から現在地に移って以来八十三年。  
長い間、地域の皆さんに親しまれてきましたが、今  
秋、駅西の合同庁舎に移転します。

そこはかたなく郷愁を感じるのは、気象庁生活の  
半分近くをこの地に勤めた私ばかりではないよう  
です。戦後間もなく赴任した当時の気象台は、北陸病  
院までほとんどイモ畑で、南端国道のポプラ並木と  
赤煉瓦の風測塔が象徴的でした。

現存の観測用大桜横の無線鉄塔には、ぼろぼろに  
なった天気予報の信号旗が掲げられていましたが、  
予算不足で昭和二十三年頃には廃止されました。何  
しろ、ないないづくしの耐乏時代でしたが、生物だ  
けは豊かで、蛭やひばり、つばめ、とのさま蛙など  
など気象庁で定める生物季節観測の全部が、気象台  
構内で居ながらにして観測できました。

泉中学との境の石垣にいたしま蛇は、たびたび香  
ばしいつけ焼に料理されて、“生物観測ができなく  
なるぞ”と所長に叱られたものです。

蛭も、観測室に迷い込んできました。食糧もどう  
にか出回って、元気が出てきた昭和二十五年頃  
からは、毎年夏休みに弥生小学校や泉中学校の子ども  
たちと、野外観測に出掛けるのが恒例となりました。  
倉ヶ岳や医王山、卯辰山、内灘砂丘などに出かけ、



気象台の赤煉瓦風力台

自分の手で風を測り、湿度を計算し、ぐんぐん下が

少なくなった自然の命を大切に守る必要がある

る気圧計を見つめました。その生き生きとした子どもたちの目は、いまでも印象に残っています。

それについても、あふれる情熱をそのまま鵜呑みにして、プロセスを考えない子どもが多くなっているこの頃、私はふと不安を感じることがあります。

高度成長期に入ってからは、次第に生物は少なくなり、観測も気象台構内と限定せず、市内でよいということになって、種目も縮小されました。しかし、可憐な生物たちは、環境の変調を人間よりいち早く知らせてくれる大切な環境指標で、だからこそ私たちは

す。

緑の芝生に真白い百葉箱、そして付近の方々は覚えておられるでしょう、早朝から無線のモールの音が風に乗って、いつも流れていました。いまは無線音も消えて、ほとんどの気象要素は遠隔装置で電氣的に変換され、豪雨の中で雨量マスをかざす観測員の姿は見られません。

アデスと呼ばれる自動編集装置や電子計算機が主役となり、コンピュータ化された天気予報の精度は、昔より良いのは当然ですが、何となく人間味があり、ほのぼのとしたものがあつた時代を、おんほろ庁舎と共にいまつくづく懐かしく噛みしめています。

第二回国体が開かれた昭和二十二年、昭和天皇は気象台の大桜の横を通って行かれました。私は鉄塔の踊り場でお迎えし、初めて人間天皇を間近に感じましたものです。

基準桜の務めを終えた樹齢六十年の大桜は、せめて切り倒されることなく枯れ果てるまで、弥生の皆さんとともに見守ってやりたい気持ちで一杯です。

今後とも、気象台は離れても、自然に感動するゆたかな日々をお送りくださいますよう。本当に長い間、ありがとうございます。

(館報平成3年7月号)

金沢市教育会発行「郷土読本」下巻(昭和十四年刊)から  
転載||金沢市史編纂室提供

## 第十七 気象台

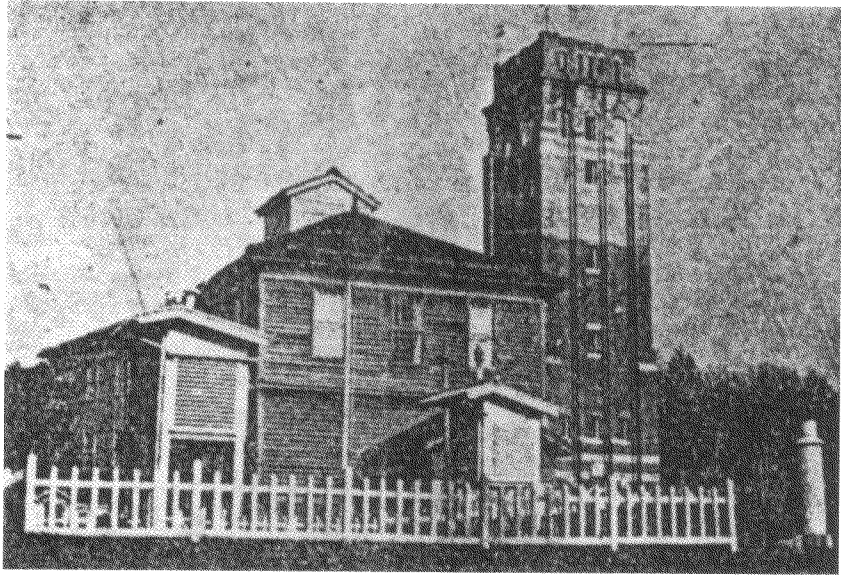
「気象台を見学に行こう」と、自治会できまったのは今月の一日。あれから十日目、今日はちょうど土曜日である。弁当をたべるとすぐ学校を出た。

「中央気象台金沢支台」と記された門をはいって見学をお願いすると掛りの方が親切に案内して下さった。

「これは何ですか」

と、卯辰君が聞く。

「百葉箱といって、箱の中には寒暖計や乾湿計・蒸発計などがはいっています。そちらのブリキの煙



金沢気象台の全景

突のようなのは雨量計で、『昨日は雨が五ミリメートル降った』というようなのは、みなその機械で測った結果です」

上村君と尾山君がノートを出してしきりに何か書いている。

「さあ、風力計台へ上がりますから、足下に気をつけていらっしやい」

急な階段を上がって風力計台に立つと、はるか日本海まで一目に見える。

「高いなあ」

と口々に言い合う。

「風車のようにくるくる廻っているのが風力計で、風の速さを測ります。矢のような形をして、ゆっくり動いているのは風信計で、風の方向を測るのです。すると、この台がなぜこんなに高いかもわかるでしょう」

「では、この円いレンズは」

と、尾山君が聞く。

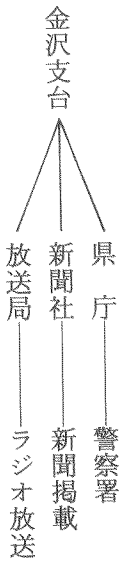
「これは、一日の中、何時太陽が直射したかを調べる日照計です。太陽の直射光線がレンズにあたっ

た時だけ、下の紙にしるしがつきますから、あとでその紙を調べれば、何時太陽が直射していたかがよくわかるわけです」とおっしゃった。

下へ下りて時計室、晴雨計室を見せていただいてから、支台長さんのお話をうかがった。

「今皆さんは、色々の機械をご覧になったでしょう。あの機械で、一日何回も天気を観測するのです。朝六時に観測した結果を、東京中央気象台へ電話で報告します。すると向こうでは、全国の天気をこちらへ知らせてくれます。私どもはこの報知と、土地の事情とを考え合わせて、一日三回天気予報を発表いたします。

午前十一時のは、



こんな風にして、県下のすみずみまでお知らせするように努めているわけです。それで遠足の時など、必ず予報に注意していただきたいと思えます。

次に金沢の降水量の大体を表について申し上げますと、金沢と東京、すなわち日本海側と太平洋側との気候の違いがよくわかります。

夏晴れて冬降る 日本海型 金沢

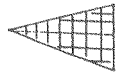
冬晴れて夏降る 太平洋型 東京

一年の三分の二を雨や雪にとざされている当地では、快晴が一年にわずか二十五日ぐらいですが、東京では五十六日もあります。このように太陽を仰ぐ日が少ないのですから、天気の良い日には精々外へ出て日光をあび、また家の中などへも十分日光を採り入れるよう、工夫しなければなりません。『北国人は引っ込み思案』と言われているのも、気候の影響ではないかと考えます。しかし、我慢強く、じつと物を考える力のすぐれているのは、気候に鍛えられたからでしょう。

次に天気予報の信号標を、実際のものについて話しましょう。一日三回天気予報を発表する際、支台ではこの標旗を塔高く掲げてお知らせするわけです。特報信号標は吹流しで旗よりも目立ちます。このほか、『寒クナル』『暑クナル』と予報する旗や、暴風



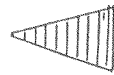
北ノ風



東ノ風

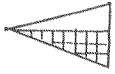


南ノ風



西ノ風

風向ノ旗



北東ノ風



北西ノ風



南東ノ風



南西ノ風



晴



雨

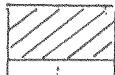


曇

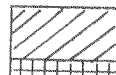


雪

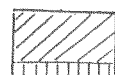
天候ノ旗



曇時々晴



曇時々雪



曇時々雨



雨カ雪



晴時々曇



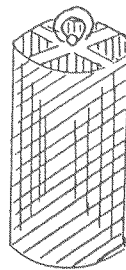
晴時々雨



晴時々雪



緑 青 赤 白



暴風警報特報信号



風雪ガ強クナル



風雨ガ強クナル



風ガ強クナル

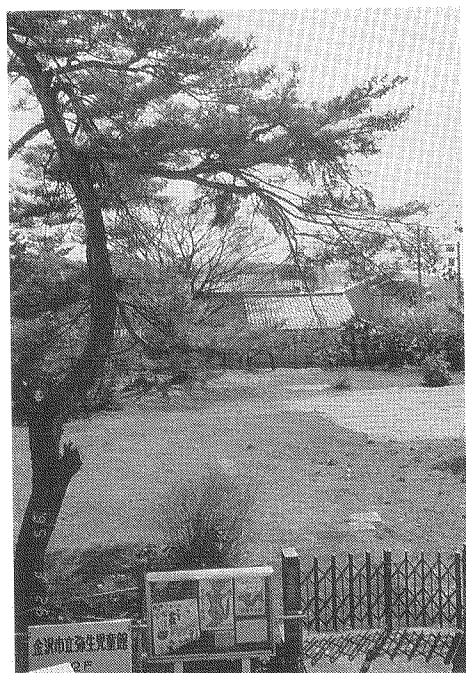


警報の標もあります。

みなさんは信号標によって、これから後出来るだけ気象台を利用して下さい」

色々と機械を見せていただいたり、お話を聞くことができてほんとうに嬉しかった。あつくお礼を言って外へ出ると、皆は言い合わせたように風力計台を仰ぎ見た。

(注 常用漢字、現代仮名遣いになおしてあります)



気象台跡地。近く公園化される

## 五、民話

### 1、ドンド川民話三篇

#### 〔狐と山伏①〕

山伏さん（修験僧）が、ドンド橋の上で昼寝している狐を見つけ、そっと近づいて耳元で法螺貝ほらを力いっぱいプーッと吹き鳴らしました。狐は、びっくりして千日塚の方へ逃げて行きました。

山伏さんが、ドンド橋の近くへ来ると、不思議や辺りがにわかになつて暗闇になりました。ふと見ると、近くの一軒家に灯火がつかまりました。

「今晚一夜だけ泊めてください」と山伏さんが頼みました。

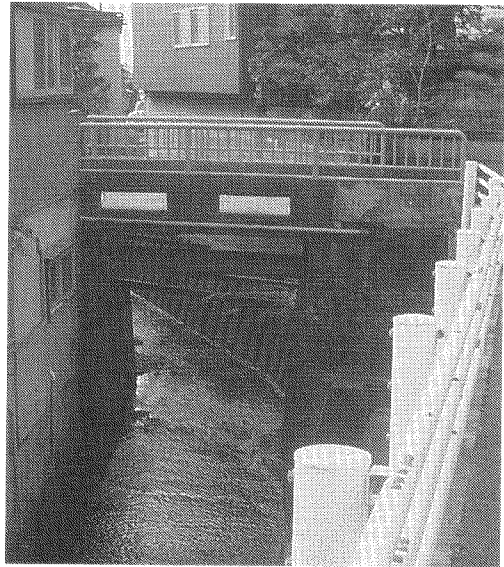
「実はいま、じいさんが死なれたので困っています」

と、ばあさんは断りました。

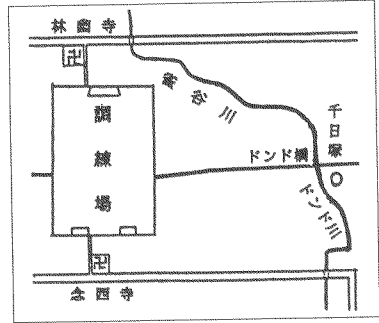
「それでは、お経を読んであげましょう」

と、山伏さんがお経を読み始めますと、その法力のせいか、死んだはずのじいさんの手がビクッと動きました。山伏さんはびっくりして、一尺ほど飛び下がって、お経を読み続けました。

こんどは、ビクッと足が動きました。二尺ほど飛び下がってまたお経を読みました。



現在のドンド橋



戻りました。あたりは明るくなり、一軒家は消えてなくなりました。

山伏さんは、「狐の仕返しだったのか」と悟りました。(泉方面の話)

### 〔狐と山伏②〕

ドンド川で、女たちが大根を洗っていました。

近くの割木(ドンド)橋の上で狐が背中を丸め、目をつむっていました。山伏さんが橋を渡ろうとしても、平気で寝ています。山伏さんは腹を立てて、狐の耳元で法螺貝をプーンと吹きました。狐は驚いて

三度目は、ビクビクッと手と足が同時に動きました。山伏さんは、三尺ほども飛び下ると、後ろのドンド川へ仰向けにドブーンと落ちてしまいました。川水の冷たさに、山伏さんはハッと正気に

川の中へドブーンと落ち、千日塚の方へ逃げて行きました。山伏さんは橋を渡り、ヤケ寺に着きました。尼さんが一人で、死人の番をしていました。尼さんに留守番を頼まれ、枕元に座ると、死人がニヤッと笑いました。

山伏さんは無我夢中で逃げだし、川の中へドブーンと落ちました。気がつくとき、そこは元のドンド橋の下でした。

大根洗いの女たちは、「山伏殿が、自分から川に身を投げた」と笑いました。(有松方面の話)

### 〔野菜が大石に〕

夜明けのまだうす暗いときに、村の人が車に野菜を積んで市場へ急ぎました。

美しい娘さんが、お腹を押さえて苦しんでいました。車に乗せてお医者さんへ連れて行く途中、車がガクッと重くなり、野菜の代わりに大きな石が乗っていました。

夜が明けてから調べると、野菜はドンド川の下流の杭にひっかかっていました。(有松方面の話)

(註)・ドンド橋は、杉丸太を二つに割り、並べてあ  
りました。

・弁慶も山伏でした。上菊橋近くの法光寺の山  
伏が、この辺りの無住の神社や寺を管理して  
いました。

・一尺は三〇センチメートルです。

(館報平成4年1月号)

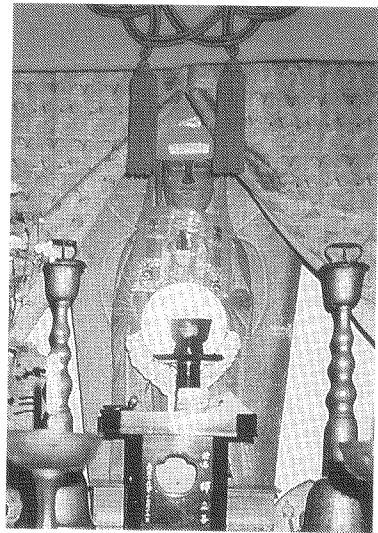
## 2、念西寺民話四篇

### 〔泥棒と念西寺地藏尊〕

昔、泉村の道ぞいに大きな地藏が立っていました。  
ある晩、泥棒が地藏さんを盗みに来ました。裏道  
近くまで運んだら、夜が明けました。次の晩も、そ  
のまた次の晩も運び出そうとしましたが、どうした  
わけか、地藏さんは動きません。そこで「地藏さん  
は、ここが好きなんだな」とあきらめました。

坊さん(念西さん)は、雨ざらしの地藏さんを気の  
毒に思い、地藏堂を建てました。後に、大きなお寺  
(念西寺)に建て直したときも、やはり動かないの

で、そのまま本堂の中にお祀りしてあります。



念西寺の本堂内地蔵

### 〔二万堂狐と門前の地藏さん〕

泉町のマタギさん(仲買人)が、夜明け前に野菜を  
車に積んで、松任へ急ぎました。

ところが二万堂の大樫の前まで来ると、狐にだま  
されて急に辺りがまっ暗になったり、野菜が石に  
なったりして困りました。

それで地藏さんをお祀りしたら、狐のいたずらは  
なくなりました。その地藏さんが、念西寺門前の地  
蔵さんです。



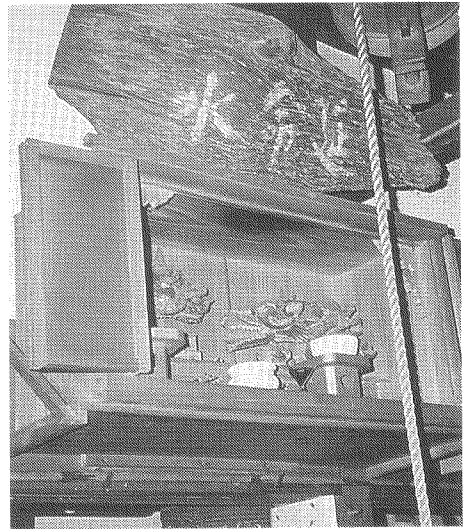
門前の地藏

〔ジェット機墜落と火伏せの竜神さん〕

昭和四十四年二月八日の正午頃、有松方面から飛んできた航空自衛隊のジェット機が、泉新町の道路上に墜落しました。

機体や油が飛び散って一面火の海になり、二十四軒も燃える大惨事になりました。

それが、不思議や念西寺の隣境で鎮火しました。「念西寺の竜神さんや地藏さんのお蔭や」と、人々は言いました。



火伏せ竜神さん

〔註〕・この事故は、真っ赤に焼けた破片が二百メートル先の黒川菓子店の大型ボンベ前に落下するなど、大変な騒ぎでした。死者四人、けが

人十八人にのぼりました。

〔瓜食い狐と千代尼さん〕

松任駅から西へ一キロメートルの松任市竹松町の民話です。

昔、竹松村の竹藪に、狐が棲んでいました。夜に

なると、畑の瓜や西瓜などを食い荒らしました。

困った村人は相談して、狐狩りを何べんもしましたが、一向に捕まりません。他に良い方法もなく、困り果てました。

そのとき、村人の一人が「俳句で有名な千代さんに、狐を追い払う俳句をお願いしたらどうか」と言いました。

それは名案だと、みんなで松任の千代さんにお願いました。千代さんは、気の毒に思い、

「狐奴がおのがつくりを食いにくる」

と短冊に書いて渡してくれました。村人は大喜びで村に持ち帰り、短冊を茄子の枝に吊るしました。

あくる朝、狐はその短冊の下で死んでいました。

狐という文字のつくりは、瓜です。千代さんの俳句は、「狐よ、瓜を食べるのは、自分の体の右側を食べる愚かな行いですよ」と、さとした句なのです。

(註)・漢字では、松、体、狐などの左側部分を篇と

言い、右側部分を旁つくりと言います。

(館報平成4年3月号)

### 3、狐に化かされた話

〔お金が柿の葉に〕

六斗林の「タキヤ」という豆腐屋さんが、油揚げを売りに出掛けました。

ドンド橋の近くに、美しい女の人立っていました。

「油揚げを一枚ください」

と言いました。

「もう一枚ください」

と言いました。

とうとう全部売れました。「タキヤ」さんは、大喜びで家に帰りました。早速、お金を調べましたら、お金は全部、柿の葉だったそうです。

(註)・泉町にも同じ話が伝わっています。ただし、

豆腐屋さんの名は「アラキ」です。

〔同じ道をぐるぐる回り〕

山伏さんが、ドンド橋を渡ってお寺に帰ろうとし

ました。少し行くと、橋がありました。よく似た橋を何回も渡りました。疲れて休みました。気がつく  
と、そこはドンド橋の上でした。

#### 4、火の玉の話

〔追いかけてくる火の玉〕

雨の降る晩です。

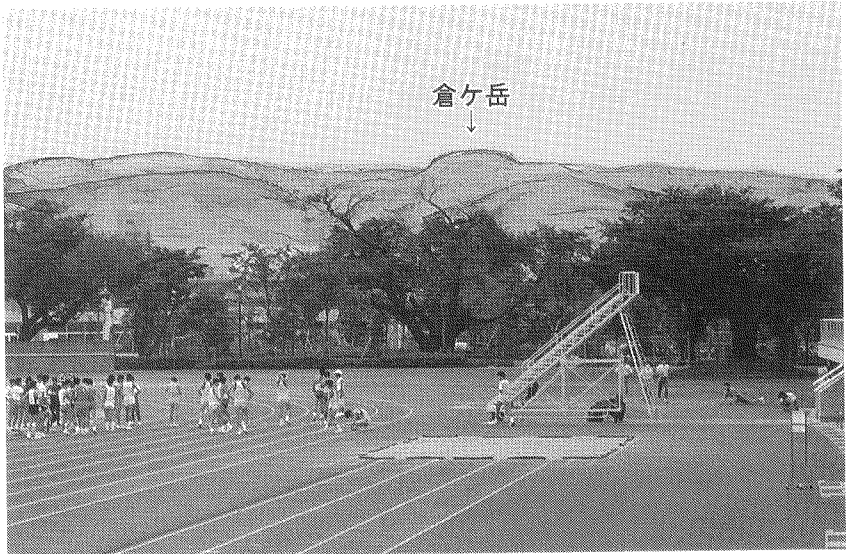
千日塚の松の根元から、青白い光の火の玉がフワフワと浮き上がり、もし、人が通りかかると、その後ろについてきます。逃げようと走り出すと、追いかけてきます。みんなは困り果て、中には泣きだす人もいました。

立ち止まってじっとしていると、火の玉は、風に吹かれて飛び去ったそうです。

〔狐の嫁入り灯〕

雨の降る晩です。

千日塚の松の根元から、青白い光の火の玉がフワフワと浮き上がりました。幾つも連なって山の方に



公設運動場から倉ヶ岳を望む

流れて行きました。

人々は「狐の嫁入り灯だ」と言いました。

### 〔高尾の坊主灯〕

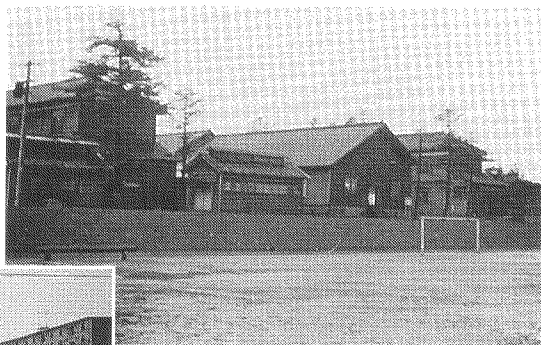
雨の降る晩です。

倉ヶ岳の麓の高尾山から、フワフワと幾つも火の玉が出ました。人々は「高尾の坊主灯」と言いました。

長享二年（一四八八）、高尾山や倉ヶ岳の戦いに敗れた富樫政親は、いまはこれまでと覚悟を決め、敵将水巻新助を抱えて五十メートル崖下の大池に飛び込み、戦死しました。いつの頃からか、命日の六月九日に、池の底から朱塗りの鞍が浮き上がるとのうわさが広まりました。

金沢の表具師幸吉は、人々の止めるのも聞かず、池に潜って確かめようとなりました。池底の洞穴に白衣白髪の老人がいて、「人に言うな、死ぬぞ」とらみつけました。

幸吉は驚いて逃げ帰り、「実はー」と話そうとすると、ザーッと大風が吹き、幸吉を大空に連れ去り



旧師範学校の寄宿舎(上)と現在のグラウンド周辺



ました。

## 5、師範学校の七不思議

①運動場を斜めに、白や黒の線がときどき地面に現れる。

②寮から運動場に下りるときの石段数と、登るとき石段数が食い違う。

③深夜に不気味なピアノの音が出る。

④音楽室横の地下から人骨が出る。

⑤月夜に音楽室横の濁り水をピチャピチャ飲んでいる影がある。

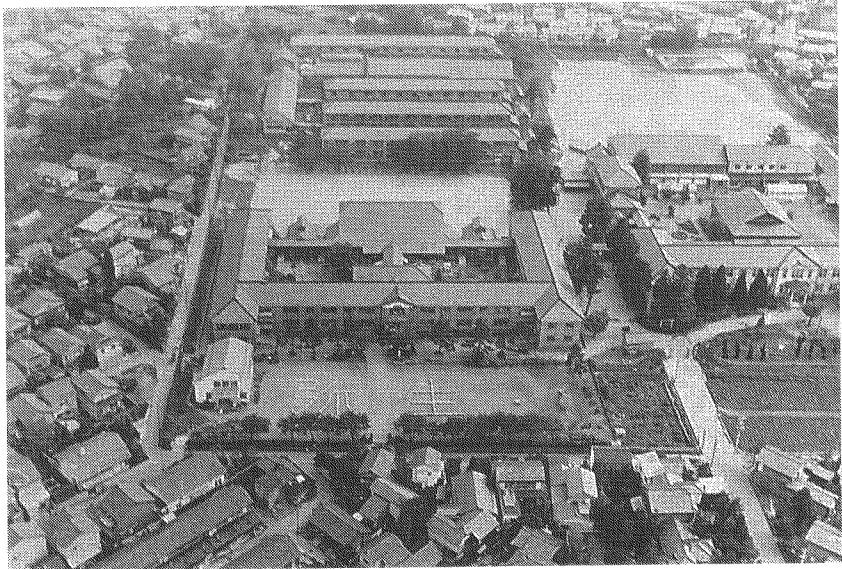
⑥三寮トイレは、夜、上から牛の脚、下から手が出る。

⑦資料館の階段が、奇妙な響きを発する。

以上は、教生さんから聞いた懐かしい話です。

(註)・師範学校は、昭和二十三年に金沢大学に移転し、残った校舎は泉中学校になりました。

(館報平成4年7月号)



昭和33年焼失前の弥生小、泉中校舎。左奥が旧師範学校寄宿舎

## 六、人物

### 1、門弟二千人の塾を開いた木村民衛氏

明治五年に学制が發布され、寺や民家などで学校が次々に開校されました。下等小学校は八段階あり、半年ごとに試験進級していきました。さらに上等小学校は八段階あったのですが、途中の退学者が多かったと言われます。明治十二年にコレラが大流行し、経済難から廃校するところも出現しました。こうしたなかで、私学代行や、一日三時間三年間の簡易小学校の設置が認められました。当時の就学率は四八％でした。このあと、明治二十年には小学校四か年が義務制となり、さらに同四十年に六か年が義務化されました。

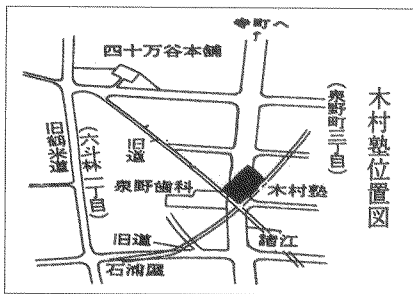
木村民衛氏は、第一回文化勳章受章者木村榮<sup>ひさし</sup>氏の

父で、私塾を開設し、多くの門弟を育てました。

長坂道を上り大乗寺山門参道曲がり角に、木村先生碑が立っています。壇石の周りに藤溪了観さん(林幽寺)ほか有志門弟の氏名が、また裏面には次のような碑誌(要旨)が刻まれています。



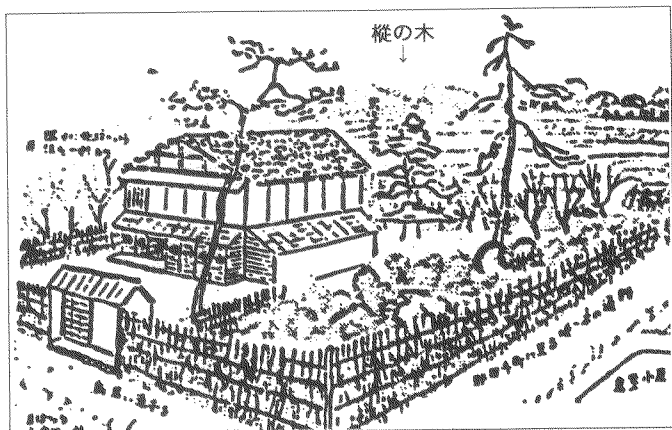
木村民衛氏の碑



敷地600坪(1800㎡)

す。

民衛先生諱は翹、判之助後に恕堂民衛と改め、藩に仕え書に秀れ慶応三年木村塾を開き門弟計二千余人。天保八年十一月十七日生まれ、明治三十一年九



木村塾(門弟の丸岡与三次氏筆)

月十四日没、享年六十一歳

木村塾は、読み、書き、算、裁縫を教えました。

当時は和算塾が多かったので、門弟は二百余人に増え、碑の墓誌を作られた漢学者大島照氏ほか一人の先生を増員しました。

先生は常に正座し、教え方は厳しかったが、叱責が終わると恕堂の恕はゆるすの意味のとおり優しい先生に戻りました。冬、雪の朝は玄関で門弟を待ち、雪を払い、優しい言葉をかけました。毎月二十五日に菅公祭りや、正月のカルタや旗源平など、季節ごとに催しがありました。このあとの推移を年譜で追うと、次のようになります。

明治8年 泉野甲、泉野出は木村小学校に通学

明治10年 地黄煎小学校訓導補、木村小学校と合

併

明治12年 致芳小学校と改名

明治14年 辞職。家塾を開く

明治20年 致芳小学校閉校。長坂新校へ

明治25年 閉塾(推定)

山河 明治三十一年に鳥居の横に致芳青年クラブが

建ち、昭和五十五年八月、致芳会館に改築されました。致芳小学校は、丸岡さんの敷地内にありました。

(註)・丸岡与三次氏は寺町三丁目十二―十七、造園

業喜市氏の祖父にあたり、木村塾で学びました。造園技術に優れ、金沢の職人を率いて資材を運び、東京星が岡茶寮三千坪の作庭をはじめ、松永家、近衛家などの名苑を造りました。昭和三十三年八十二歳で亡くなりました。挿絵の中央に先生ご自慢の「金沢で一番の檜の名木」が描かれています。

## 2、第一回文化勲章受章の

天文学者、木村栄氏

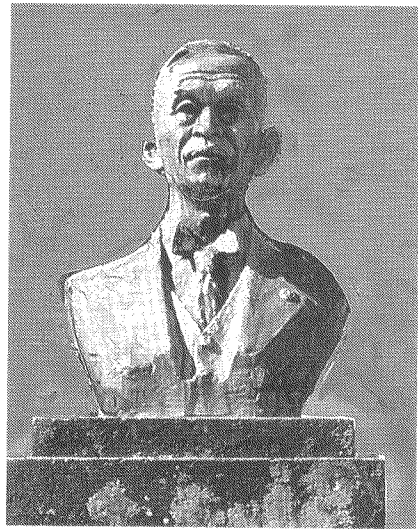
木村塾の神童、小先生

慶応三年に木村塾を開いた木村民衛氏は、本家の篠木庄太郎さんの二男栄さんを我が子として育て、四歳になると朝六時から読書、算術を教えました。教え方は大変厳しく、油断したり、復習を怠けると烈しく叱り、ときには梅の木に縛ったり、冬でも雪

の外に放り出したりしました。

そのようにして育てられた栄さんは、八歳の頃には、ほかの子らが珠算か筆算でなければできない問題でも暗算で正しく答え、九歳からは時折、先生の代わりに珠算や漢文の読み方を教えるなどしたため、「木村塾の神童」とか「小先生」と言われました。

栄さんは、九歳で小学校の勉強を終え、特別に数学、英語、漢文を勉強して十一歳の時に、非常に程度の高い金沢専門学校(後の四高)の入学試験に一番で合格しました。受験生はみな年上の秀才たちで、



水沢校と同型の木村栄氏胸像



新保望氏前庭の碑

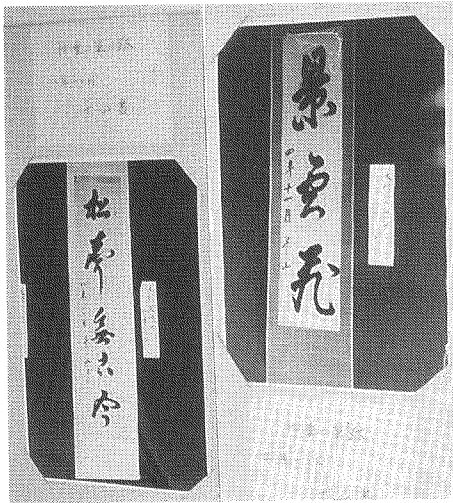
十九人もいました。授業は英語で行われました。

座右の銘は「精神集中」

栄さんは、父の民衛先生が一日に二時間しか寝ないで勉強された姿を思い、勉強に精神を集中し、一番で卒業。東大理学部星学科に進学しました。大学では教授や図書館の蔵書によって理論を、東京天文台では実際の研究を行い、さらに六か年間、大学院で北極星高度による緯度測定や、各地の磁力や緯度を測定し研究しました。

北極南極の移動を日米露伊共同で観測開始

いまから二百年前、ドイツの数学者オイラー氏は、南北両極は極めて微小ではあるが移動している、という大変な発見をしました。そこで明治三十一年万国測地学協会総会で、北緯三九度八分の線上にあるアメリカのシンシナチヤ、日本の岩手県水沢町など六地点で同一機械、同一時刻、同一計算方法で共同観測をすることを決めました。明治三十二年、栄さんは初代臨時水沢緯度観測所長に任命され、十二



神童の筆跡

月十六日から観測を始めました。

### 第一回測定は最低点、Z項発見で最高点に

明治三十三年六月、本部から水沢観測所へ、観測報告が来ないために「機械が故障したのではないか？」と、最低点の評価である旨の通知が届きませんでした。しかし、調べてみても機械の故障はありません。栄さんは苦惱六か月、気分転換のテニスをした後にハッと閃いたのがZ項でした。それまでの太陽月星原因説のほかに、「地球の磁力地熱気象潮汐等の変化」も極移動の原因であることを発見されたのです。この発見は、世界の天文学者を驚嘆させ、ABCの最後のZ項と名付けられました。栄さんは、明治三十七年に理学博士の称号を戴きました。水沢小学校には、「模倣は止め、創造に<sup>つと</sup>昂めましょう」という、博士の児童たちに向けた体験談を取めた貴重な録音盤(レコード)が残されています。また、同校校庭の胸像にも、直筆の文字「戒模倣昂創造」が彫り込まれています。栄さんは昭和十八年九月没、七十三歳でした。長男一衛氏は、「父は天才でなく、努力の人です」と語っておられます。

(註)・死の直前まで執筆された「北極軌道解析図」

のことや、学士院恩賜賞、文化勲章、記念切手、英国王立天文学会金牌賞、論文等については割愛しました。

### 3、女流俳人千代尼

元禄十六年(一七〇三)二月、松任八日市町の表具屋福増屋六兵衛の長女として生まれる。母はつる。六歳から作句を始め、十八歳のときに金沢の福岡弥八と結婚したが、二十歳で夫と死別、実家に戻った。五十二歳のとき剃髪し、号を素園と称し、金沢泉二丁目の念西寺に約五年間住む。安永四年(一七七五)九月八日没、享年七十二歳でした。辞世句の「月を見て我はこの世をかしく哉」は、広く世に知られています。

千代尼と念西寺の関係を少し詳しく見てみましょう。

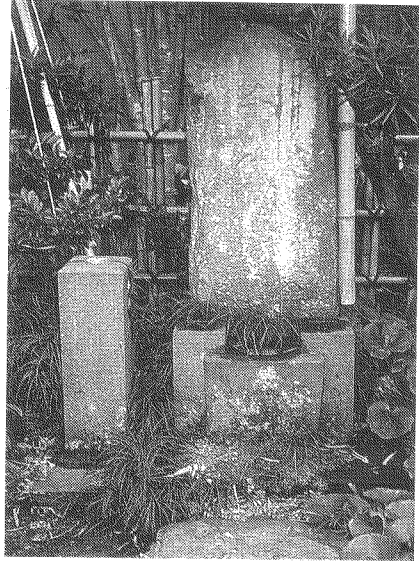
千代尼は宝暦四年(一七五四)頃から約五年間、同寺に住み、ここで句会を催しています。そうした因



本堂内の朝顔井戸



俳書文庫で月例句会



千代尼塚

縁から、文化八年の三十七回忌に、千代尼塚が境内に建立されました。その塚の右側に「あさかおや釣瓶とられて貰い水」、左側に「百生や蔓ひとすじの心より」の句が刻まれています。大阪屋眉山筆、泉新町奥原一叟寄進となっています。

このほか、明治八年に百回忌、昭和四十九年に二百回忌法要がそれぞれ営まれています。昭和三十三年からは、毎年「千代尼忌俳句全国大会」が念西寺で開催されています。

千代尼遺跡保存会が毎月句会、全国大会も

石間苔石 千代尼遺跡保存会が昭和三十二年に設立されました。初代会長は、北國新聞社長をされた宮下与吉さん、理事長は句歴六十五年の元老山本素律さんでした。現在は、会長は弥生公民館館長の松下良さん、副会長は念西寺住職伴田良観さん、理事長は私、石間苔石です。毎月八日(千代尼命日)に句会を、また十月十日の祝日に全国大会を開き、各地の方々とは友好を深め、研鑽を重ねています。

#### 蔵書約千冊の念西寺俳書文庫

念西寺には、蔵書約千冊を擁する「念西寺俳書文庫」があり、研究者にとって宝庫と言われています。それは、初代理事長山本素律氏寄贈の俳書約千冊と、小松砂丘氏らの協賛寄贈書などによるものです。

芝木茂 私たち念西寺近くに住む謡曲愛好者四人は、平成四年九月八日午後二時から境内の千代尼塚に朝顔を供えて香を焚き、住職さんの読経と各自の献句を読み上げました。献句の最後は、石間苔石先生の「萩の花揺れて明るき千代尼塚」でした。そのあと、御堂内の朝顔の井戸の前で、宝生流「加賀の千代女」を謡い納めました。



千代尼のおもな業績を紹介しておきます。

・宝暦十三年、朝鮮使節への返礼に千代の書六幅と

自作二十一句を贈る。

・蕪村玉藻集(女流俳人集)の序文を書く。(最高位者)

・アメリカの教科書に、あさかおや他十五句が紹介

されています。

・千代尼句集が英独訳されています。

#### 4、棒術半兵衛さ流を創始した町田半兵衛

半兵衛久定は、天保四年(一八三三)に地黄煎村の農家半兵衛さ(屋号)に生まれ、明治四十二年に七十七歳で亡くなっています。

十四歳のとき、祖先は足利尊氏の臣町田一郎であることを知り、永山藤七郎に剣術を、高山直行に拳法など九技を習い、奥義を究め、さらに獅子舞の棒術を工夫するなど門弟千五百余人を擁しました。

「半兵衛さ流」は加賀一円に広まりました。

半兵衛は、入門許可のとき、規約敵守の誓紙に血判を押させ、また免許を与えるときには獅子舞袴に

「渡トンボ」の模様を許可しました。

半兵衛は、武術

で世話になった渡

辺家に嗣子がなく

断絶するので入籍

し、渡辺半兵衛と

呼ばれていました。

半兵衛は、あると

き、トンボを捕ろ

うとする瞬間、ト

ンボがすーっと逃

れるのを見て、そ

の「静動一瞬」の

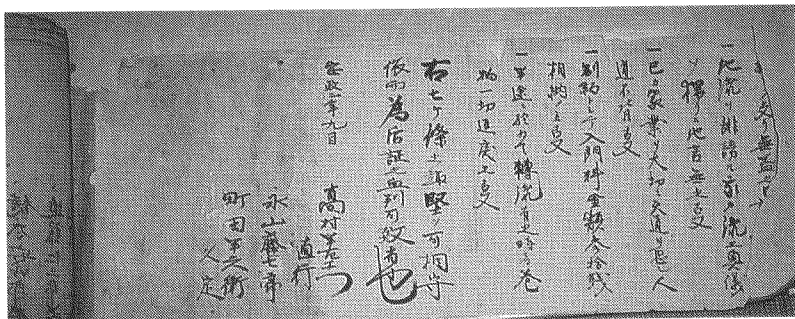
呼吸から武道の奥

義を悟ったそうで

す。渡トンボ印の

袴は獅子組の誇り

でした。



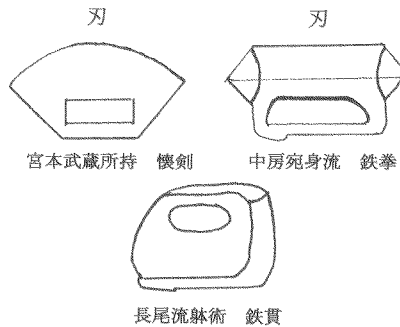
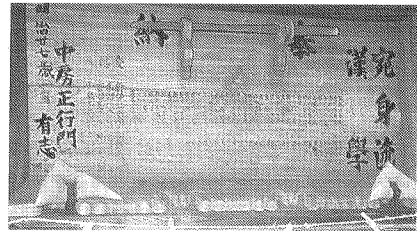
入門血判の誓紙

## 5、宛身流躰術を確立した中房正行

泉八幡神社に、明治二十七年宛身流、漢字の中房正行門弟有志による奉納額が掲げられてあります。

早速、中房家や門弟の家などを訪ねましたが、道場があったことしか分かりません。やむなく奉納額に飾られた長さ約十四センチ、両端の尖った木器を手掛かりに、小立野の岩井柔道塾のご助言を得、錦町の石川県警察学校を訪ね、校長補佐金子啓介氏に教示を頂き、金沢工業大学示野喜三郎氏著『正伝長尾流躰術』一冊を貸していただきました。

数日後、金沢工業大学明倫館で、著者の示野氏に、木器模写図を検討していただきました。「長尾流鉄貫は鉄製で重く、刃はありません。奉納木器の上部外辺は刃です。本来は鉄器で長尾流分派の両端尖出型越村系鉄拳でなかるるか」と指摘され、さらに後日、握り武器研究の権威者、東京の名和氏から「外刃両端尖土型鉄拳は、全国に類例が無い。研究を要する」とのご回答をいただきました。



長尾流は、上杉謙信一族、長尾監物が考案した流派で、組み打ち戦の際、甲冑を打ち砕き急所を打つ鉄貫や拳法当て身などを駆使する実戦流派です。

雨夜覚右衛門は、藩経武館躰術師範となり、長尾流を広めました。明治に分派し、八道場が建ち、技が乱れました。示野喜三郎氏は、著書、学生指導支部の設立、全国大会開催などを通じて、正伝長尾流躰術の復興に努力しておられます。

仮説ですが、外刃は明治十年西南の役に中房正行も参加し、熊本藩の宮本武蔵流懐剣からヒントを得

たものでしょうか。

### 6、孝子二題（泉町の仁太郎／六斗林の小助）

宝曆九年（一七五九年）四月十日、六斗林の玉龍寺境内舜昌寺から出火し、烈風にあおられて金沢の九割が燃え、金沢城も全焼し、藩財政は極度に困窮しました。

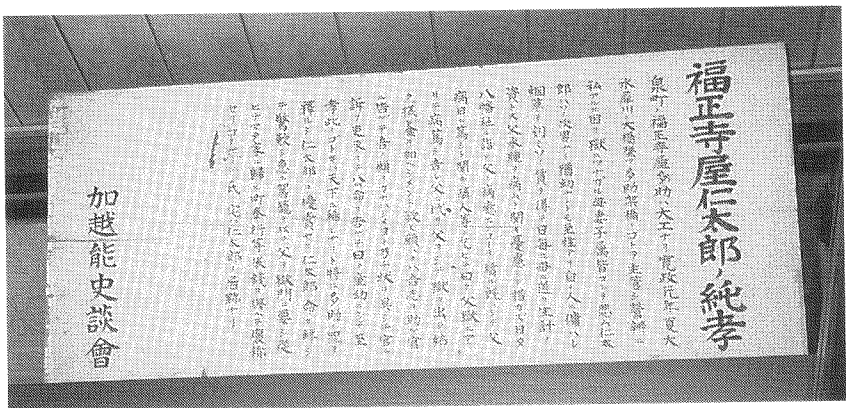
十一代藩主治脩公は、遊惰を戒め、藩士には明倫堂・経武館を建てて文武を勧め、信賞必罰で臨みました。また、民衆には善行者二十九人を表彰し、人心を一新しました。表彰された中から、弥生校下の孝子二人を紹介しましょう。

#### 福正寺屋仁太郎

大工の福正寺屋太助は、寛政元年（一七八九）、大水で墜ちた犀川大橋の復旧工事を主管しましたが、経費問題の責任を負わされて牢に入れられました。その子の仁太郎は、幼少ながら人に雇われて煙草を刻み、その賃銀で家計を助けていました。

仁太郎は、

父太助が水腫で苦しんでいると聞き、朝夕、泉八幡社に平癒を祈りました。しかし、父の病篤しと聞いて、ついに父に代わり入牢を頼い出ました。藩は、その孝心を賞め、太助の罪を許すとともに、仁太郎に米



孝子仁太郎の説明板

銭を与え表彰しました。

平野正毅 私宅は、福正寺屋の跡地です。昭和八年頃に、加越能史談会の説明板が掲げられました。

### 六斗林の小助

六斗林の野菜売り雇い人、小兵衛の子小助は、幼くして白銀屋源七の弟子になりました。寛政九年（一七九七）に父小兵衛が牢に入られました（理由は不詳）。小助は、日夜悲しみ、遂に絶食して父に代わって入牢を願ひ出て牢に入り、翌年五月釈放されました。

小助は、再び白銀屋源七の弟子となり、業に励み、余暇にも賃仕事をしてその賃銀で家計を助けました。藩は米銭若干を与えて孝心を賞し、同十二年には一万銭を、享和三年（一八〇三）には米十俵を与え、三度表彰しました。

### 7、死んで名を残した佐々主殿

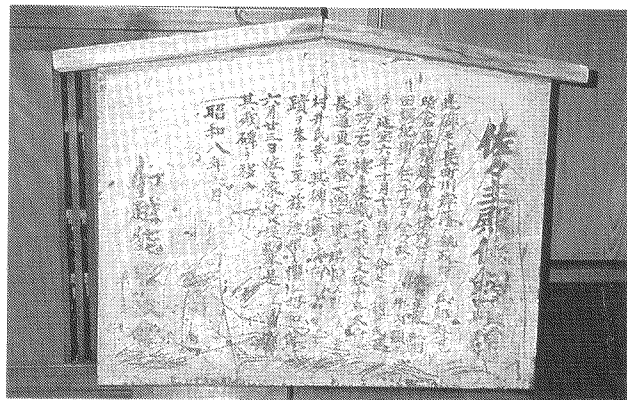
六斗林の本是寺山門に、加越能史談会の佐々主殿

の説明板が掲げてありました。

### 牧行宣

本是寺は、

佐々家の菩提寺であり、お墓もあります。山門改築のため、説明板は寺内にあります。佐々主殿は千石の大身ですが、どうしたことが負債が銀二百貫（米約四千石）にもなり、屋根の修理もできず、雨の日は屋内で傘をさしていました。



佐々主殿の説明板

主殿は、藩に借銀を願ひ出しましたが、藩は家政不行き届きを責め、執政村井家に、主殿と、そして三

人の息子も別々に禁固刑にしました。しかし当時、遊惰の気風がはびこり、負債藩士が多く目についたため、五代藩主綱紀公は、見せしめのためにと延宝六年（一六七八）十月十日、ついに佐々父子四人に切腹を命じました。

後日、家財没収のため倉を調べたところ、主殿用の鎧櫃よろいびつには軍用金五十兩と藩の軍事規定による十三人分の武器、馬具、幟のぼり、鉄砲に五兩く二兩を添え、美しく手入れしてあって、諸人を感嘆させまし



屋漏堂碑

た。

#### 村屋漏堂と佐々主殿

村井邸跡地の中央小学校（長町一丁目）東入口に、屋漏堂おくろどうと彫られた自然石と説明板が立っています。村井長道は、謡曲「鉢の木」の佐野常世が極貧の中で武器を揃え馬を養い、鎌倉の軍揃いくさそろえに馳せ参じたこと、また筆聖顔真卿が家貧しく雨漏りの筋跡から筆法を悟ったという故事などを佐々主殿と重ね合わせ、自分の通称を「屋漏堂」と名付けたのです。

## 七、神社寺院

### 1、国造神社・虚空蔵社（泉二丁目二十一六）

鳥居をくぐると右手に平成二年に建立した黒御影石の立派な神社由来板があります。

国造神社の主祭神は、大兄彦大神と大国主大神です。天平勝宝三年（七五二）の創建と伝えられ、藩主利家公所蔵の虚空蔵菩薩が奉納され、「虚空蔵之宮」と称されました。歴代大聖寺藩主の崇敬厚く、木地師の隆盛などを祈願して家臣を代参せしめました。

明治初期、一時「井手神社」と称しましたが、明治三十九年十二月十三日再び「国造神社」と改称されました。当社は三十年ごとに式年祭の慣行があり、天保二年（一八三二）に三十六回目の記録があり、近くは昭和五十六年に斉行されました。



国造神社

（田中正記宮司誌「要旨」）

加賀の国造主祭神、大兄彦大神

旧事記国造本記に「雄略天皇（二十一代）、大兄彦大神に賀我國造を賜う」と記されています。羽咋国造石衝別命いわつくわけのみことの四世大兄彦大神は、湧水の豊かな泉の地（井手郷）を選んで開拓されたと『国造神社正誌』に詳しく書いてあります。大国主大神は、国土開発五穀豊穰の神様です。

昭和三十七年、国造神社氏子総代会から『国造神社正誌』が刊行されました。主筆編集者は、泉旭町

一丁目氏子総代の松下栄太郎先生です。

神社は千二百余年の古いお宮です。古文書や十三代藩主齋藤公の奉納額など百余の奉納物の記録がほとんどありません。しかし、幸いなことに氏子総代勤統三十四年の橋爪与一郎さんや十六年以上の方が五人おられたので、古い言い伝えを聞き出し、また松下先生は当時、金沢大学事務局にお勤めでしたので大学図書館の郷土文書や県市立図書館の文献などを調べ、現地調査もされました。松下宏さんは「父(栄太郎)は、よく県市立図書館に行ったり、またお



国造神社正誌

にぎりを持って三池村や宝達方面などへ行きまし  
た」と証言しています。

### 国造神社改築と雀谷川

明治三十六年十二月、改築起工式が行われました。当時、雀谷川(どんどがわ)は養清寺の横を回り、国道を横切っていました。流れが曲がっているため、川底に土砂が溜まり、永年の間に道より二メートルも高くなり両側に土堤を築き、橋が架けられていました。神社の本殿辺りは、反対に国道より二メートルも低いので川筋を有松町の後側に移し、土堤の土を神社の地盛りに運び道を平らにして喜ばれました。なお不足分は、野町駅向かい側の吹屋たんぼ(現在は津田駒工場敷地)の土を運びました。当時は日露戦争中でしたが、氏子二百余戸が総力の奉仕でした。同四十年八月に竣工しました。

(註)・賀我は後に加賀に改まりました。

・『加賀志徴(下)』に、河北郡三池村<sup>ぐんけ</sup>郡家神社加賀国造を祀るの一章がありますし、また宝達方面は酒井の永光寺へ加賀守護富樫家尚奉納の虚空蔵菩薩を調査に行かれたのでしょうか。

刊行までに三年かかりました。『国造神社正誌』には、関係文書や事項が全部載っています。当時の氏子ご家庭にはあるはずですから、ご一読ください。

(館報平成6年7月号)

〔藩主奉納の虚空蔵像由来について〕

京都嵐山麓に、貞観十六年(八七四)道昌<sup>とちよ</sup>の建立した法輪寺があります。ご本尊の虚空蔵菩薩は、招福除厄、智恵(記憶力)を増し、鬼門の方位丑寅(東北)と丑寅年生まれと塗師さんの守護本尊です。祭日の四月十三日「十三参り」には、京の十三歳児が大勢お参りします。

慶長元年(一五九六)七月の京都大地震で、法輪寺は倒壊しました。利家公は秀吉公の養女になり、天正十二年(一五八四)六歳で死去した丑年生まれの菊姫の十三回忌供養に本堂を再建し、慶長四年に二代利長公も工事を続け、慶長七年に竣工しました。

宮城清一 法輪寺では木造虚空蔵菩薩三体を造り、一体はご本尊としてお寺に安置し、一体は報謝のた

め前田公に贈り、あとの一体の所在は不明です。石川県からは金沢や輪島の漆器屋さんが参拝されますと、法輪寺から直接お聞きしました。

慶長四年、利家公は金沢城天守閣の丑寅(東北)の方位、卯辰山の麓に、鬼門鎮護の八幡宮を建立しました。国造神社は、八幡宮の正反対方位にあり、古くから石像虚空蔵菩薩が祀られ、「こくぞう社」と称していたゆえか、裏鬼門鎮護のため城内の法輪寺虚空蔵菩薩が奉納されました。

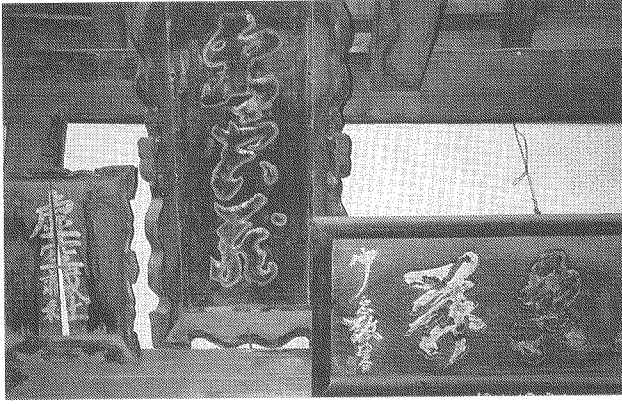
塗師屋さんが崇敬の虚空蔵社

国造神社には、十三代斎泰公や塗師達の立派な虚空蔵額五面や、漆職人七人の篋額(漆へら)も奉納されています。大聖寺藩主は隆盛を願って家臣を代参させました。

高松秀雄 昔は、農家が麦いり粉を袋に入れて奉納しましたから、拜殿には山のように積み上げられました。いまは麦を作る人もなく、行われていません。

角村 十二月十三日に、私は米いり粉を奉納しました。式が終わると塗師屋さんらは、下地塗りにと





虚空蔵社の漆額

言って粉を分けてもらいました。私たちも、冬のもやけの妙薬にと言って粉を頂きました。

丑寅年生まれ守護神

宮城 昭和の初期まで泉新町の方十数人が、毎月十三日の夕方、野町千手院の虚空蔵さんをお参りされました。

大聖寺藩

主二代利明公、五代利道公はとも  
に丑年、六代利精公は寅年生まれです。それで招福除厄、智恵を願い、家臣を代参させました。  
(館報平成6年12月号)

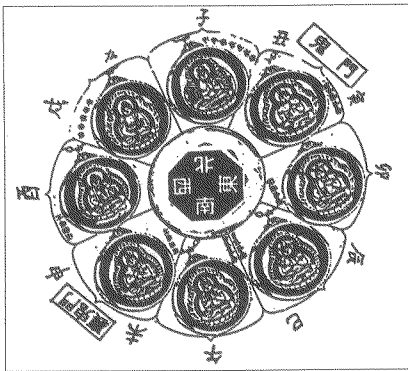
(註)

丑寅年生まれの大聖寺藩主(表)

鬼門について 十二支では東北の方位(丑寅)

は災厄の宿る鬼門に当たり、虚空蔵菩薩が守護本尊です。

(図参照) 平安京や江戸の鬼門には、除厄招福のため延暦寺や寛永寺が建立されました。加賀藩では金沢の鬼門に卯辰観音院を建立し、裏鬼門の虚空蔵宮(国造神社)には京都嵯峨峨法輪寺から伝



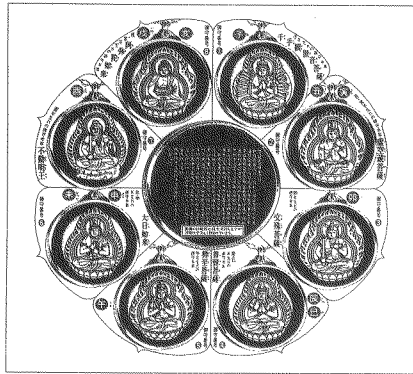
代名	生年	干支
二利明	寛永14	丁丑
五利道	享保18	癸丑
六利精	宝暦8	戊寅
十四利鬯	天保12	辛丑

丑寅年生まれの大聖寺藩主

わった虚空  
藏菩薩木像  
が寄進され  
ました。元  
禄の頃には、  
観音院にも  
虚空藏菩薩  
木像が祀ら  
れました。

・天満宮につ

いて 国造社（虚空藏宮）の氏子たちが、何故  
さらに天満宮を建てたのでしょうか。享保十  
二年（一七二七）、泉出町（有松）続きに町家建  
願と同敷地用に三石五斗（約七百坪）の開墾  
が許可され（後藤家文書）、寛延三年（一七五  
〇）には五十六戸増えています（新保望氏調  
べ）。元文四年（一七三九）、養清寺近くの処刑  
場が有松端に移されました。四代藩主光高公  
は江戸幕府の意に反し、前田家の先祖は菅原  
道真であるとの家系書を差し出し、さらに五



代綱紀公も菅原家系書を差し出しています。  
以上から推論しますと、加賀藩主へ町建報恩  
のために天満宮を建てたのではないでしょう  
か。

・菅原神社について 文化三年（一八〇六）寺  
社由緒書上書の「養清寺文書」には、藪天満  
宮と記されています。地元では、藪天神と呼  
び親しまれていました。明治三十九年十二月  
十三日に国造神社に合祀され、菅原神社と改  
まりました。所在地は、合祀前は泉二丁目十  
八―十九に祀られていました。合祀後、その  
跡地二十五坪は安楽寺に寄付され、現在は同  
寺の倉庫が建っています。推論しますと、町  
家建や同用地開墾が許可され、処刑場も移転  
し、家数が増えた一七五〇年前後（元文く宝  
暦）の創建と考えられないでしょうか。なお、  
天神堂前には、安政七年（一七七八）講中寄進  
の手水鉢（石）がありました（現在は菅原神社  
前に移してあります）。

国造神社正誌 年表

天皇	年号	西曆	摘要
13成務		一三〇 一九〇	山河を境とし国郡を分つ (江沼賀我羽能登鳳至珠洲の六郡)
16仁徳		四〇〇 四二〇	加宜国造素津美奈留命(旧事紀国造本紀)
27雄略		四五〇	賀我国造大兄彦命(右同)
29欽明		五五一	仏教伝来
36孝徳	大化2	六四五	大化の改新公地公民租庸調班田収受(補記)
44元正	養老2	七七八	能登立国 道慈律師虚空藏を伝える (補記)
45聖武	天平15	七三一	道君大領越前国正税帳(補記)
51平城	大同1	七四三 八〇五	壘田私有を認める(補記) 勤操虚空藏を伝える(国造神社正誌)
52嵯峨	弘仁14	八二三	加賀立国(井手郷記載あり。但し鎌倉期には富樫郷に入る)

天皇	年号	西曆	摘要
107後陽成	慶長	一六〇〇頃	法輪寺から加賀藩へ虚空藏木像贈られる
114中御門	正徳2	一七二二	虚空藏之宮(十村後藤家文書)
119光格	享保7	一七二二	虚空藏額塗師屋吉兵衛奉納
120仁孝	文化5	一八〇八	虚空藏額13代藩主齋泰公奉納
121明治	文政2	一八一九	国造社初見(加賀国神社録)(補記)
	天保2	一八三一	国造社(社号祭神等調書神主藤原正全)
	明治5	一八七二	国造神社額(加能郷土辞彙)
	6	一八七三	国造社額(中屋次郎)
	9	一八七六	井手神社(加賀国石川郡誌)
	14	一八九一	虚空藏額(中屋喜三右エ門奉納)
	24	一九〇一	井手神社(石川郡誌)
			井手神社
			国造社
			こくぞう社

天皇	年号	西曆	摘要
121明治	明治39	一九〇九	国造神社と改める
40		一九一〇	神社改築落成
国造神社			

## 2、泉八幡神社（泉一丁目三一八）

由来碑（昭和六十三年四月吉日 文学博士小倉学）により、同神社の由来を紹介しますと、祭神は応神天皇、大山咋神。祭日は春祭四月十五日／例祭九月十五日／新嘗祭十一月二十三日です。

神社明細帳によれば、加賀国の守護富樫泰高が文亀年中（一五〇二）頃に祀った八幡宮で、その後地黄煎村の権兵衛が現地に再建したと伝えられます。古来、泉町地方の産土神と仰がれてきた名社です。近世は修験道の宝高寺が別当として奉仕しました。明治五年（一八七二）村社に列し、同三十九年には神饌幣帛料供進神社となりました。昭和三年に本殿を新築、同五十一年に拝殿を、同六十二年には本殿を改



泉八幡神社

修しました。また昭和三十八年、犀川ダム建設にもなつて金沢市見定町の日吉神社、倉谷町の日吉神社及び二又新町の多賀神社を合祀しました。祭神はみな大山咋神です。

末社は菅原道真（桃島の天満宮）をはじめ、稻荷神（石坂角場）、金比羅神（芦中町）及び恵比寿・大黒天

(泉町)を合祭します。

さて、町名について、町しるべ標柱「いずみま  
ち」(昭和六十二年二月 金沢市)によると、「もと泉  
野の地で、このあたりが北国街道筋であったため、  
藩政初めころからしだいに家が増加し、この名で呼  
ばれた。明治二十二年、泉町と泉新町に分けられ町  
名となった」と記されています。

境内にあるイチヨウ(銀杏)は、保存樹として昭  
和五十六年三月金沢市指定を受けました。樹高二十  
メートル、幹回り二・六八メートル、枝幅十二メー  
トルの大木です。大木になると「ちち」という気根  
が出て下がる雌雄異株で、種子は銀杏と言いつい食用に  
なります。公園街路のほか神社仏閣境内に植えられ  
ています。

### 〔仮説の楽しみ〕

(1) イチヨウ社叢林について イチヨウの社叢林  
は珍しい。何が原因でしょうか。

① イチヨウは水分が多く、火事から守ると言われ  
ています。

② イチヨウ林は推定三百年程度と二百五十年程度  
の二グループがあります。近年、三百年以上のケヤ  
キを伐採したそうです。

③ そのころに火災がなかったでしょうか。イ、享  
保十八年(一七三三) 四月二十六日、伝馬町から出  
火、七百九十五戸焼失。ロ、さらに二日後に兩宝院  
から出火、野町石坂角場五百三十七戸を焼失。ハ、  
宝暦九年(一七五九) 四月十日、六斗林の舜昌院から  
出火、金沢城など金沢町の九割にあたる一万五百八  
十戸を焼失。

この二大火災が、イチヨウ林を造成する原因と  
なったのではないかと推定されます。

(2) 地黄煎村の権兵衛さんが、神社を再建したの  
は何時ごろか。

① 明暦二年(一六五六)、地黄煎村||正しくは古  
(前)地黄煎町(村)||は、泉野村と改まりました  
(ほぼ南大通りから以北、長坂辺まで)。

② 八幡宮を創建した富樫泰高は本願寺を焼き討ち  
した織田信長軍に加わったため、この辺りの一向宗  
門徒から法敵として怨嗟され、八幡宮は永らく荒れ

果てました。

③元和寛永年間に、加賀藩は一向宗対策として一向一揆の拠点となった近郊の有力寺院を金沢町内に移転させ、門徒との分断を図りました(跡地に安楽寺)。

以上から、権兵衛さんが同神社を再建したのは、寛永以後から明暦までの約二十年間で、三百五十年ほど前と推定されます。

#### 〔建築年代仮調査報告〕

現在の拜殿、末社(旧本殿)の建築年代を調べました。

①泉八幡神社には建築記録や棟札はありません。

②柱は平安時代までは円柱でした。八百年前(鎌倉期)から角柱になり、面は柱の太さの六分の一、桃山初期(四百年前)は十二分の一、明治初期(百二十年)は二十五分の一で算出しています。

③神社建物正面の横材の下辺に彫り込まれた弓形は、一重(室町以前)、二重(桃山)、三重(藩政中期以後)と区分し、さらに弓の幅の比率で算出します。

④その他建築様式、技法、彫刻なども時代により異なります。柱は、大黒柱や四隅柱を計測します。主柱仮測定結果を参考までに紹介しておきます。イ、尾崎神社(参考測定)同社は寛永二十年、江戸の名工木原大工允の建築。本殿拜殿は立ち入り禁止(神主不在)。向拝の八寸柱二本の平均価 $22 \cdot 5 \text{ cm} \cdot 1 \cdot 8 \text{ cm} \parallel 12 \cdot 1 / \text{ロ}$ 、泉八幡神社拜殿七寸柱八本平均価 $20 \cdot 5 \text{ cm} \cdot 1 \cdot 5 \text{ cm} \parallel 13 \cdot 1 / \text{ハ}$ 、泉八幡神社眉測定。旧本殿、拜殿は共に二重眉の桃山後期ですが、しかし旧本殿の方が古い。

以上三殿の建築年代は、寛永二十年の尾崎神社、次に泉八幡神社旧本殿、次に同社拜殿の順ですが、今回は仮調査ですから確認はできません。

### 3、地黄八幡神社(泉が丘三丁目二十一―二十三)

ご祭神は、第十五代応神天皇。由緒によると「本神社は文亀年中(一五〇一―〇三)地黄煎村の僧養学という者、白山の麓尾添村に居住し、白山の別当職たり。二代養順が慶長年中(一五九六―一六一四)地



県道開通前の地黄八幡神社

黄煎村に帰り、応神天皇を勧請して社殿を建立せるものなりという。初め八幡社と称せしが、明治十九年六月八日、いまの社号に改めらる」とあります。

昭和二十六年、社前に県道が開通する直前の「村社地黄八幡神社」全容は、地黄煎町二十八番地、本

殿前口二間×奥行き二間、幣殿前口九尺×奥行き五間、拜殿前口二間三尺×奥行き二間三尺、神饌所前口九尺×奥行き六尺、社務所前口六尺×奥行き六尺、鳥居一基、手洗舎前口六尺×奥行き三尺五寸、境内坪数九百五十坪、氏子六十六戸となっています。

天保十一年（一八四〇）九月景應書の扁額を筆頭に、明治六年八月、明治十五年九月、明治十九年、明治三十七年の四枚の絵馬が掛かり、明治二十九年四月、町内の柿田正次社中の神前奉納謡曲六十五番の扁額があります。

祭事は、元旦祭、鎮火祭、豊穰祈願祭、春祭り、秋祭り、豊穰感謝祭の年六回です。

祭司は、野町の神明宮宮司により執り行います。神社の維持管理は、氏子総代八人により行っています。

（泉が丘致芳会 相川久雄記）

#### 4、泉野桜木神社（泉野町三丁目十五―十四）

今を去る千二百余年前の養老年間（七一七〜七二二



泉野桜木神社

三)、名古屋に居住していた豪族、多治見広成が、白山の開祖泰澄大師が桜の木を用いて彫刻されたご神像を、祠を建ててお祀りしました。

室町時代の延徳年間(一四八九〜九一)、広成の子孫・綿貫広之が石川郡野村字泉野の現在地に来て遷祀し、自ら弥勒坊と称して神仏に奉仕され、里人の崇敬を集められました。当時は、神仏混淆の時代であり、僧侶が神官を兼ねて祭事が行われていました。

明治五年に村社の社格が付与され、明治十五年には、桜木八幡神社と呼ばれていた名称を、現在の泉野桜木神社に改称しました。明治三十九年には、泉野村において里人に敬われていた豊受姫神(食物の神様)を祀る神明社の流れをくむ無格社・法受社を合祀しました。現宮司は十握三郎氏。

また、当神社の由来について、次のような説もあります。

①桜の四郎の屋敷が現在の境内にあったので、桜木八幡と称しました。(徳川時代の神社仏閣についての資料「亀之尾記」から)

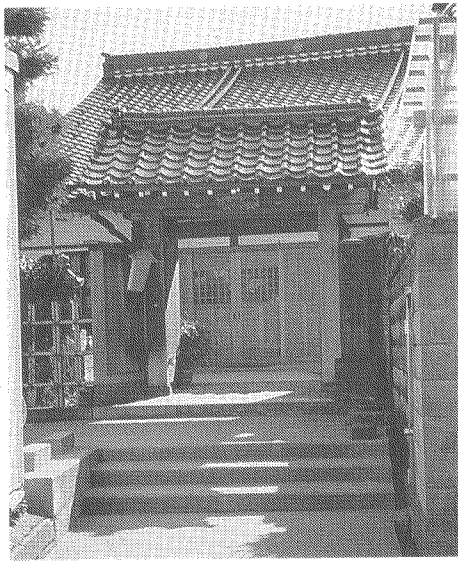
②金沢市額谷町に存在した真言宗当山派山伏の修験道場「法光寺」の別宮でした。「加越能寺社由来」から)

(四十万谷与之記)

## 5、念西寺(泉二丁目十二〜十四)

浄土宗仏帰山念西寺の開闢かいびやくは非常に古く、富樫時代あるいはそれ以前とも伝えられ、元は小立野如





念西寺

来寺の末庵で旧木町4番丁にありました。

寛永の頃(一六二四〜四三)、念西大徳がこの寺に安置されている延命地藏菩薩が雨露を凌ぐ堂宇すらないのを悲しんで、修復再建を企て、ここに移り住んだことから、以来「念西寺」と称しました。

念西大徳の時代、加賀藩前田利常公が小松城へ来往の折、道中行列立て直しに、あるいは幕末頃、藩主が調練場へ家来を同道し休憩所に選んだ折などは、広大な土地に堂宇の輪奐(建築の広大、壮麗なこと)

も整えられ、一帯は永く繁栄していました。しかし、時のうつろいととも盛衰があり、現在はその一部を残しているに過ぎません。

念西大徳が天和二年(一六八二)八月三十日に示寂し、その後は隠遁者あるいは平僧が居住して数代を経ましたが、文化三年(一八〇六)に野町大蓮寺と師弟関係を結び、大誉田人智鏡比丘尼が、この寺の初代住職に就いたのをきっかけに、以来尼僧住職となり、現在の伴田良観さんは第十五代住職となります。

俳人千代尼が念西寺に起居したのは、寛延から宝暦初年(一七四八〜一七五二)にかけての四、五年間です。剃髪後、素園と号して起居しており、当時を偲ぶものとしては、境内に文化八年(一八一二)千代尼三十七回忌が営まれた際に建てられた千代尼塚があります。

## 6、安楽寺(泉二丁目十一十九)

弥生校下では最も古いお寺と言われています。



安楽寺

貞享二年（一六八五）の「由緒書上」によると、明応二年（一四九三）に道祐が創建したと伝えられます。その開基道祐は、この土地の百姓出と伝えられ、蓮如上人が北陸地方布教のときに得度して開基したと言われているとあります。道祐は、蓮如上人が亡くなられた明応八年（一四九九）の翌年に没しています。ご本尊は、裏に元禄三年（一六九〇）の建造と記してあります。

眞宗大谷派、現住職は二十世藤谷登喜男師。



本浄寺

7、本浄寺（泉1丁目五―七十八）

大正七年十月、本浄寺第十世住職荻正傳師謹書の伝えるところによれば、

当寺に安置してある聖徳皇太子（第三十一代用明天皇第一皇子）御歳二歳の親作尊像の由来は、寛永元年（一六二四）四月二十八日、大阪堺に住む武士、木津五郎左衛門尚政なる人が、世間の無常を感じて隠

遁し、仏教に帰依し、聖徳皇太子を深く敬い、天王寺詣りの折、夢のなかで皇太子のお告げを受けた。

「吾二歳の像阿部野の万代が池にあり、汝に与える」の令旨を感得し、直ちにその池にいたり、水中から尊像を得た。尚政感涙して、わが家に持ち帰り、内仏に安置して深く崇敬した。その後、時勢が変わり、堺から越中礪波に住居を移した。尚政は、北越をご巡回された蓮如上人のご遺徳に触れて念仏行者となり、この地で往生された。その孫、荻原左衛門元宜が、祖父五郎左衛門の古跡を尋ねて尊い聖徳皇太子のご尊像を得、その有縁の深さに歓喜し、仏閣の創立を思いついて当寺を建立し、本浄寺と号した。その後、当寺は正保三年（一六四六）に加賀の国金沢に移転したが、歴代住職は太子ご親作の像としてこれを崇敬し、この霊像を寺宝としてきた。

毎年二月二十一、二十二日御忌には太子講が盛大に執行され、一般門信徒は親しく二歳のお姿を拝像することができません。また、報恩講を維持している泉町会により、永年にわたって毎月二十二日を「定例お講日」として受け継がれ、信仰の深さと和やか

な心のよりどころとして現在に至っています。

真宗大谷派、住職は第十三世荻證師。

（泉町 吉谷義雄記）

## 8、林幽寺（弥生一丁目二十一五）

一 溪山林幽寺、開基は了善と言われますが、出所は不詳。創建は、慶長十五年（一六〇）ですが、ご本尊立像の作者も不明です。

聖徳太子画像一幅、聖徳太子木像一体、その他数点が寺宝となっています。

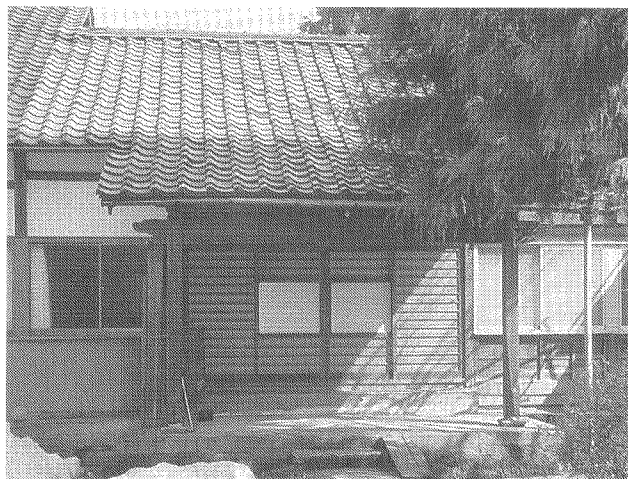
その昔、窪の一の溪へ、ある老婆がワラビ取りに出かけた際、その溪谷に光る物があるのを見つけ、引き込まれるように恐る恐る近づいたところ、かつてこの付近にあった珍徳寺の聖徳太子木像でした。

珍徳寺の火災で、お寺とともに焼失したとみられていたものですが、当時やはり窪の地に開基されていた林幽寺に安置されたのです。その後、享保十七年（一七三二）に林幽寺が、窪から現在地に移っても同寺に安置され、毎年の太子講には多くの参詣者で賑

わったと伝えられます。  
 本堂裏には、明治初期ごろの同寺住職が植え込んで愛したと言われる椿の名花「ヒナツル」「ヒナワビスケ」が一株ずつ保存されており、十一月頃には美しい花を咲かせて「椿の寺」としても知られてい



林幽寺



養清寺

ます。  
 真宗大谷派、現住職は十五世藤溪了天師。  
 9、養清寺（泉三丁目四―十五）

天台宗のお寺で、松平妙香さんが庵主を務めています。

「古蹟志」によると、同寺は檀家がないため無住寺となり、明治五年の太政官令により廃寺になるどころだったのを、庵主による寺として廃寺を免れたとあります。

寺の近くを流れる雀谷川が、旧北陸街道を横切っており、そこに架かる橋を「養清寺橋」と称していたとも言われます。

## 10、如来庵（弥生二丁目十三―二十六）

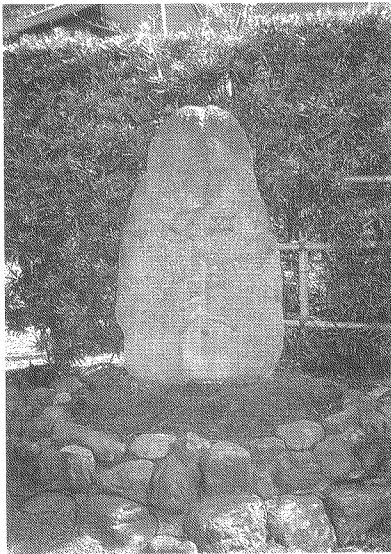
昭和四年十月二十三日、金沢市の南端三百坪の畑地の中に平屋建て五十坪の如来庵が開苑されました。釈迦牟尼仏をご本尊として祀っております。

この庵創立の由来は、次のようです。すなわち、現在の松任市柏野町に、深見覚太郎の子、深見一赧氏が賢い子供で幼少の頃より皆から囑望されていた。小学校五年生から金沢の第一中学校へ、つづいて第四高等学校を経て東京帝国大学独法科へ進み、

常に首席を通して恩賜の金時計を頂いて卒業しました。韓国ソウルへの赴任もすでに決まっております。親は卒業証書を持って帰省する我が子を待ちわびておりました。しかし、一向に帰ってくる兆しがなく不思議に思っております。

彼は、東大在学中に、上智大学の石橋教授に一尊如来教の御法を聴聞し、一筋に仏法に引かれ、とうとう卒業後、東京西巢鴨の東光庵に清宮秋搜法師の弟子として出家されておりました。

若くして母を亡くし、父一人の手で育てられました



如来庵

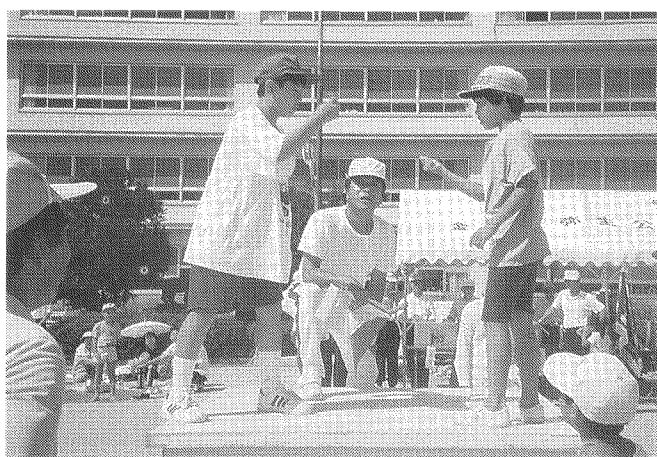
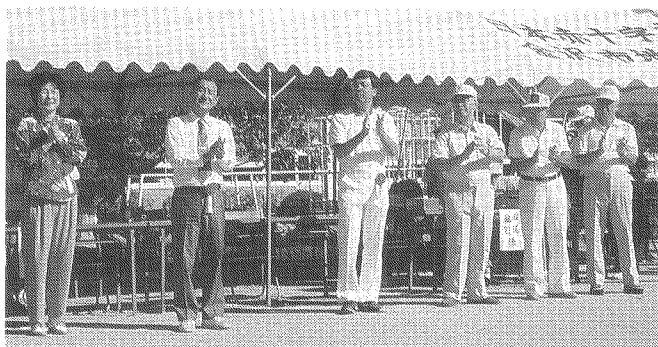
たので、父の嘆きは一入ひとしほでした。が、求道のただならぬ姿に、父親もまた翻然と悟りをいたし、私財を全部投じて当地三百坪を購入し、南平治氏によって五十坪の草庵を建立されました。父親並びに縁籍の人達の悲願によって開苑されたのであります。しかし、父は、開苑を待たず昭和四年一月二十五日に他界されました。

一 越氏は、名を拙搜とし、他宗を誹謗せず、皆共に天地同根の教えとし、相共に大乘の心にて一乗に帰依する心を貫き、足る事を知って慎んで処世されておりました。昭和十九年十月十九日、四十一歳をもって「今からいくぞよ」の言葉と共に深く合掌され端座のまま、弟子たちの読経に送られて入滅されたのであります。若き日の一筋の求道心と、父親の大悲による深い慈しみによって創立建立された庵でござります。

一 尊教団金沢協会があります。創立当時は、畑の中の修練場でした。歴史も浅く、戦前までは村の寄り合い場所として利用されておりました。隣接のニンニザンマイは、関係ありません。

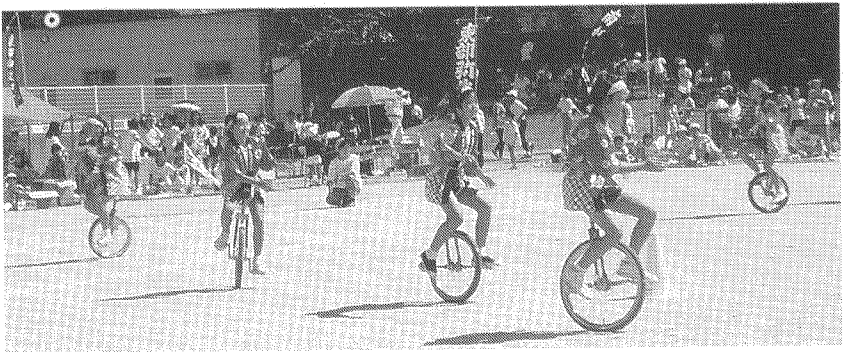
八、公民館行事アルバム

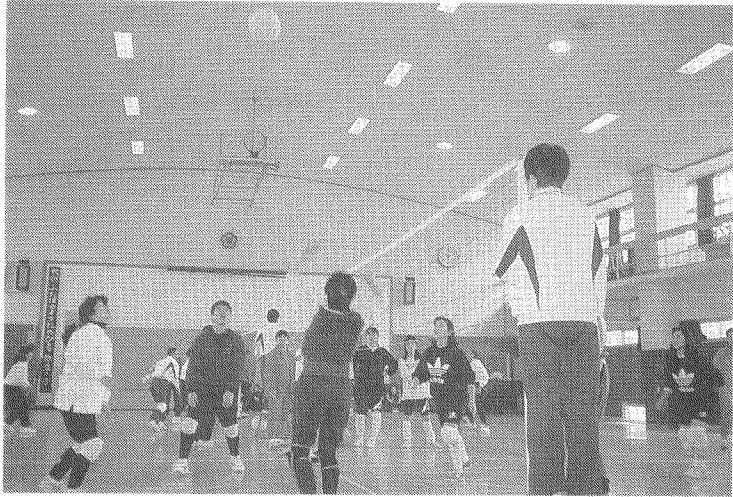
和気あいあい





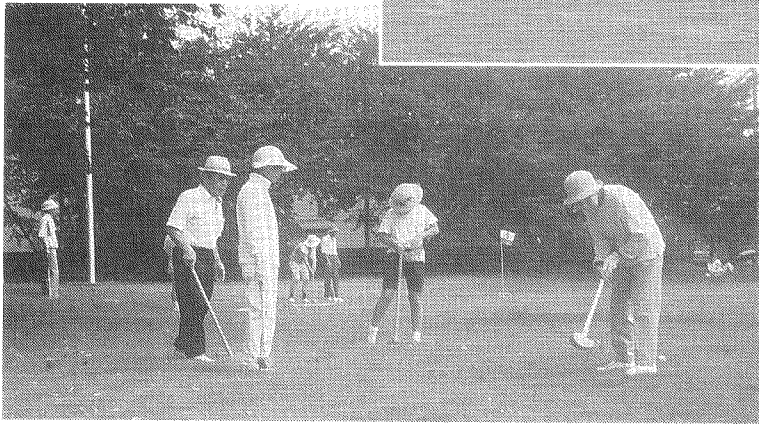
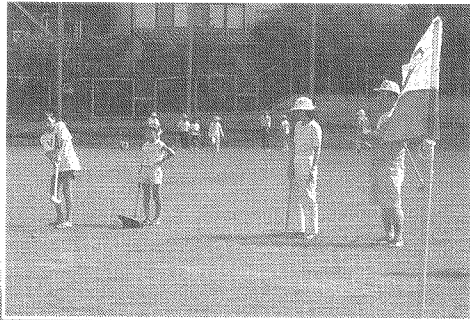
社会体育大会





ソフトバレーボール大会

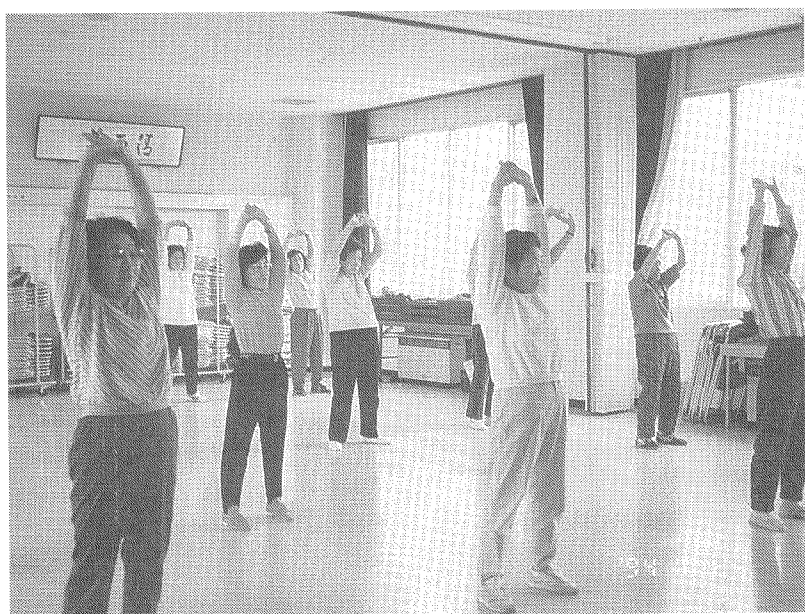
いい汗  
流して



孫とグランドゴルフ



兼六園周辺を散策する歩こう会



高齢者のストレッチ体操



敬老会で  
大正琴演奏

# 人生の節目



乾杯の音頭をとる江川さん（ルネス金沢）



立志式



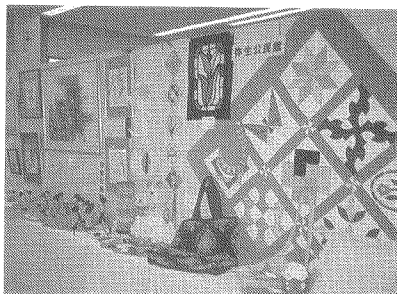


成人式おめでとう



こんな華やいだひとときも

# それが生きがい



文化祭



ふれあいウォークラリー出発

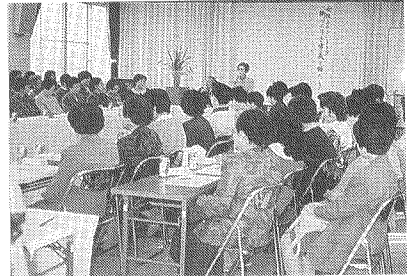
# 熱中できる



藤工芸教室



健全育成地域づくり会議



市長と語る女性トーク集会



料理教室



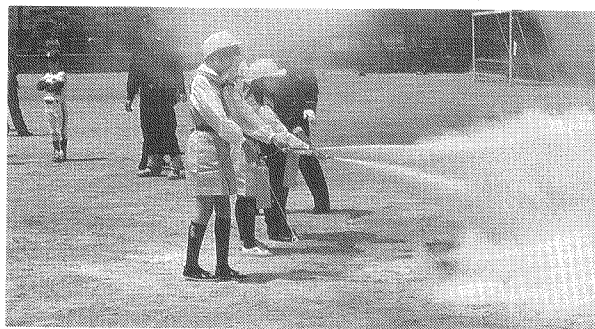
茶道教室



防火訓練は体で覚える



ぼくも私も弥生少年消防クラブ







市制百年旗行列（平成元年）



花いっぱい運動

社会活動にも燃えて



百万石まつりの提灯行列

## あとがき

この冊子は、弥生公民館報「やよい」に昭和六十一年十二月号から九年間にわたり連載された「弥生のうつりかわりこの六十年間」から「弥生の歴史」までを集録し、まとめたものがメインとなっております。

故林秀信先生の、地域の古老からの聞き書きによるところが多いのが特徴と言えます。先生は、弥生公民館運営審議会委員として三十二年余務められ、その間、少連委員長、教養文化部長、副館長を歴任し、弥生公民館の基礎づくりに中枢的役割を果たされました。平成元年すべての役員から退任後も、引き続き館報に「弥生の歴史」を寄稿され、かたわら弥生の歴史講座の講師として活躍されておられました。平成七年一月十七日、阪神大震災の日、自宅で眠るがごとく八十六歳の生涯を終えられました。

心からご冥福をお祈りいたします。

「弥生の歴史」は、まだ書き尽くされていないのですが、公民館新館十周年を機に一応のまとめをしたいたとの願いから出版にこぎつきました。折角、校下の歴史や伝承文化をまとめる以上、例えば昭和初期頃の各町並みや商家の変遷をはじめ、風習、方言、遊び、民具、地名由来などにも触れられればと、考えれば考えるほど取り上げてみたい事項が膨らみました。それには、なお時日や研究者を要します。その意味からは、必ずしも意を十分に満たすものとはなり得ませんでした。この冊子発行にあたり、元北國新聞社社長宮下明様から多大のご援助を賜りましたことを紙上

をもって厚くお礼申し上げます。また、林先生の聞き書きに資料などの提供や、ご指導、ご支援をいただきました次の皆様方にも深く感謝を申し上げます。

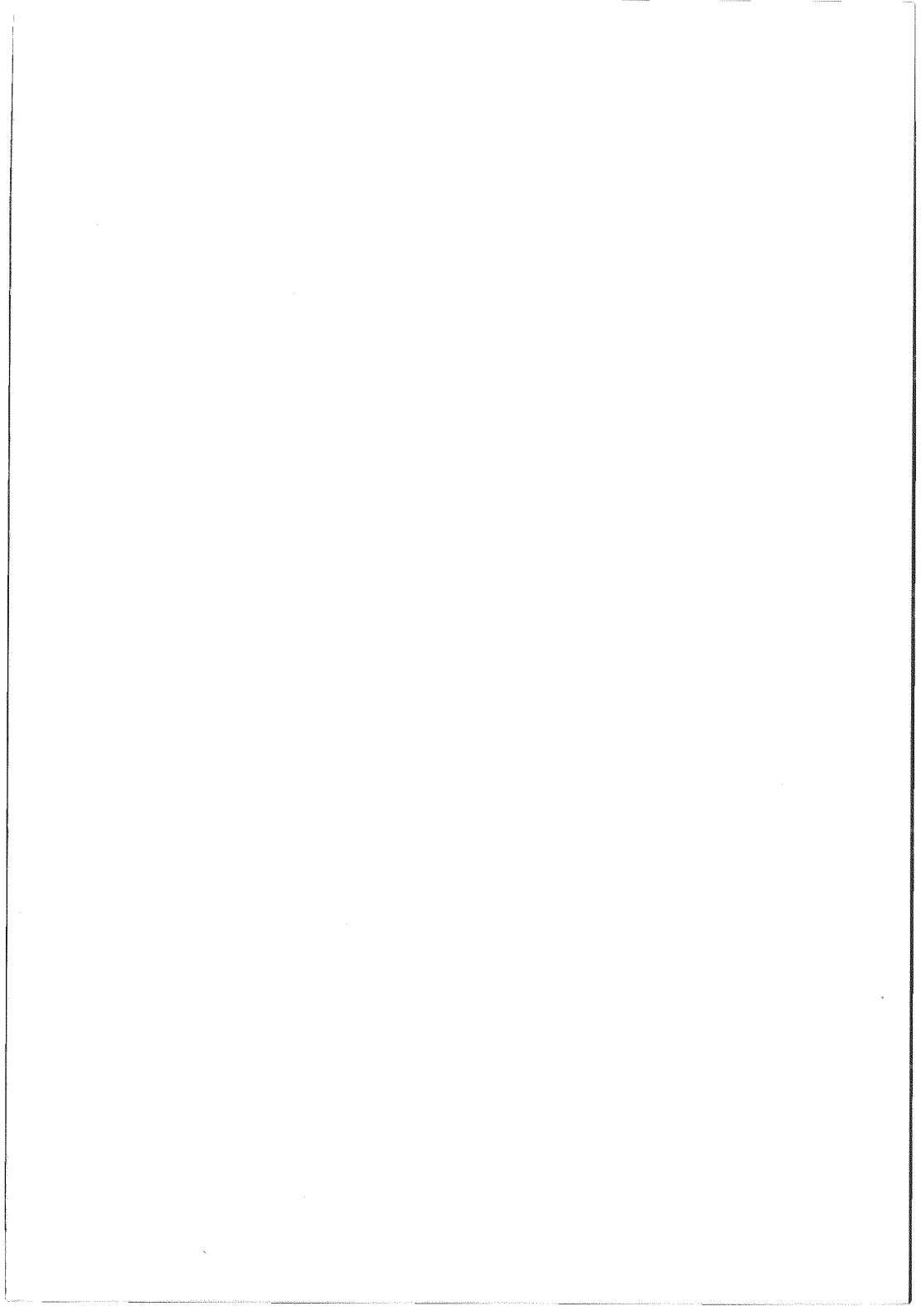
辻世誉喜知(故)、角村鈴枝、宝島外喜雄、山河栄佐男、松下七雄、能登長朔、平木静、十握三郎、地野一清、紺谷義弘(故)、石間作次(故)、酒井守三、坂井直勝、松下孝昭、北林久子、研谷千代子、田村勝治、新屋久雄、魚屋寿美子、平井義正、松本安平、太田一雄、伴田良観、有松久子、松平妙香、居村玉喜、山本操(故)、能登善次、樺木義則、中居殉也、三香美瑛舜、安東義雄、高山清旻、新屋武久、橋爪豊康(故)、松下良、桜町茂征、海道澄(故)、泉屋隆久、泉屋富三、石坂大喜治、小西建仁、町田一郎、丸岡孝三郎、小西紀一、谷村ヨク、大屋信之、村上忠、宮一郎、北本与一、半田清次、丸岡登代子、丸岡喜市、赤尾通彦、屋敷道明、鈴木一成、岩井克良、金子啓介、示野喜三郎、芝木茂、平野正毅、牧行信、松下宏、田中正、高松秀雄、森博、藤溪了天、相川久雄、茂村恵、島村正二、山本舜一、塩谷潔、泉屋清

平成七年三月

弥生公民館主事 柿木 源吾

「弥生の明日のために」編集委員

新保望、野村庄一、宮城清一、祖浜賢太郎、柿木源吾



弥生公民館新館10周年記念

「弥生の明日のために」

発行 平成七年五月十四日

発行者 金沢市弥生公民館館長

松下 良

金沢市弥生一丁目二十九—十三

郵便番号921

☎0762(41)1329

制作 株式会社北國新聞社

金沢市香林坊二丁目五—一

郵便番号920—88

☎0762(60)3587

印刷 北國書籍印刷株式会社

